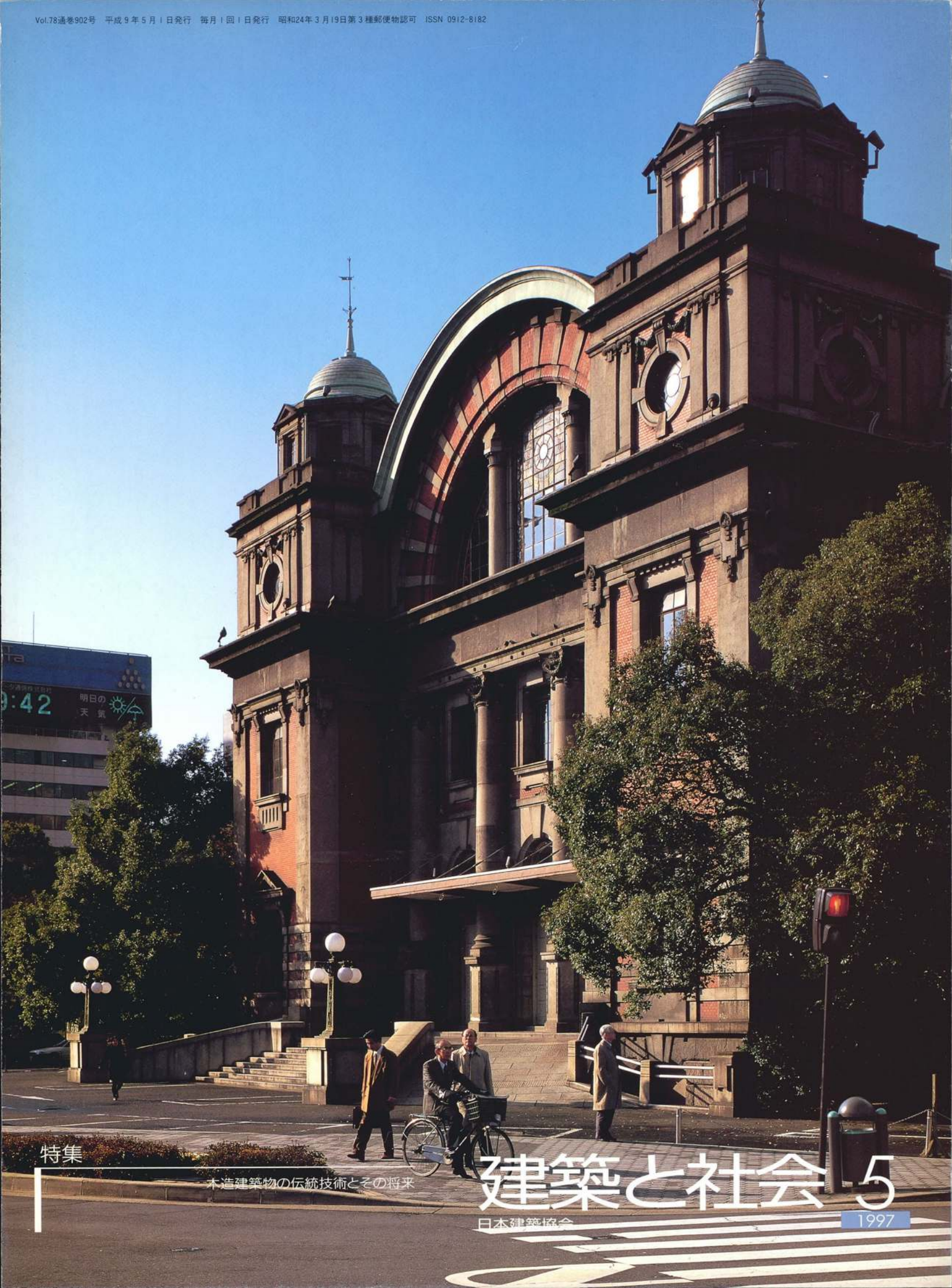
Vol.78通巻902号　平成9年5月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年3月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182



特集

木造建築物の伝統技術とその将来

建築と社会 5

日本建築協会
1997

シリコーンガスケット カーテンウォール



★特長★

■シリコーンガスケット カーテンウォールは、外装のイメージチェンジに簡単に対応できます。
外部の無目、方立のシリコーンガスケットは取替え作業が容易なためビルのイメージを変えたい場合は設計者の意図に柔軟に応えます。

■多彩なカラーで意匠性もアップ
従来のクロロプレン系ガスケットでは実現出来なかった着色自在なカラーバリエーションを可能にしました。

■水密性についても独自の排水機能を設けた樋構造を採用し、万一侵入した雨水はすみやかに外部へ排水します。

■断熱性にすぐれている
外部にアルミ型材が露出しないため、断熱性にすぐれています。

熱伝導率　アルミニュウム　180Kcal/m·h·℃
　　シリコーンゴム　0.21Kcal/m·h·℃

■工期の短縮
ガラス廻りのシールが不要です。

以上のような特徴を持ったカーテンウォールを、震災後の神戸で施工しました。無目・方立はコバルトブルーのシリコーンゴムを採用し、方立には少し丸味を帯びた表情をもたせ、金属ではとても出せない柔らかさが表現され、神戸の街にふさわしい雰囲気がかもし出され好評を得ました。
シリコーンガスケット カーテンウォールは、これからの豊かな環境づくりに寄与すると思われます。

透明建築の可能性を広げる
耐火間仕切壁の新しいカタチ。

GPX WALL-1hは国内では初めて、全面に透明な耐火ガラスを用いた全く新しいタイプの耐火間仕切壁です。

シースルー耐火間仕切壁
三高 GPX WALL-1h

GPX
GLASSPROTEX™

M.T.K.S
株式会社 三高製作所
〒661 尼崎市神崎町45-23 TEL(06)499-8151(代) FAX(06)499-0412

営業品目

- スチールサッシ・ドアー
- アルミニウムサッシ・ドアー
- 各種カーテンウォール
- ステンレスサッシ・ドアー
- スチールシャッター
- 同面サッシMTT-フラット
- ガラス製耐火間仕切壁

日本建築協会 創立80周年記念事業実施

■社団法人日本建築協会創立80周年記念式典

と　き　平成９年３月28日(金)
　　午後２時30分から
ところ　太閤園（大阪市都島区網島町9-10）
◇式典、表彰式（14:30～15:50）
　　於　２階ゴールデンホール
(1) 来賓として招待した小川忠男建設省住宅局長、横山ノック大阪府知事、磯村隆文大阪市長および尾島俊雄日本建築学会会長のそれぞれの代理出席者・浅野建設省住宅局建築指導課長、壽大阪府建築部建築振興課長、坂大阪市都市整備局建設部長および辻日本建築学会理事から祝辞が代読された。
(2) その他関係方面から来賓44名、一般参加者243名、計287名が出席した。
(3) 表彰式では、①第４回日本建築協会賞の表彰および②創立80周年記念協会表彰が行われた。
受賞者は次のとおり。

●第４回日本建築協会賞
「織物文化への貢献」
株式会社川島織物
　　代表取締役社長　南　　荘郎
「免震建物と免震効果の実証」
株式会社松村組
　　代表取締役会長　松村　雄吾
「工高教育におけるCADの有効利用とその普及に関する研究」
秋田県立大曲工業高等学校
　　教諭　黒沢　一元
「膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及」
太陽工業株式会社
　　代表取締役副会長　能村　博正
●第４回日本建築協会賞　特別賞
「実験集合住宅NEXT21」
大阪ガス株式会社
　　取締役社長　領木新一郎
●80周年記念協会表彰
多年役員　９名、多年評議員　15名、多年委員　47名、永年会員（50年以上）24名、特別功労　15名、特別功労（支部関係）　28名、永年勤続（事務局）8名
　　計146名（別記）
◇記念講演会開催（16:05～17:10）
　　於　２階ゴールデンホール
建築家・清家　清先生により「建築は文化か文明か」という演題で記念講演が行われた。
会場には、清家先生の講演を聴こうという370人の人々がつめかけた。
講演内容は、会誌「建築と社会」６月号に掲載予定。
◇祝賀会開催（17:15～18:55）
　　於　３階ダイヤモンドホール
来賓をはじめ関係者335名が参加し、祝儀舞で幕を開けた祝賀会は、終始賑やかな交歓の中で進められ、会員にとって有意義な創立80周年記念行事を締めくくった。

■その他事業の報告

(1) 創立80周年記念事業に対し、団体正会員を中心として多額（119件、841万円）の賛助金が寄せられた。
(2) 記念出版『先輩からのメッセージ「建築を志す人びとへ」』（出版委員会委員が執筆、A5判192頁）が、祝賀会当日の引き出物として配付された。
(3) 会誌「建築と社会」記念特集号は４月号として発行される。
(4) 大阪市事業「戦前長屋等建替モデル提案募集」を協賛するとともに、その一部を協会の受託事業として受託し実施した。
(5) 協会80年史編纂事業は、本年４月に編纂委員会を発足させ、平成９年度事業として動きだしている。



記念式典であいさつをする市川宏会長



祝賀会で乾杯の音頭をとる佐野正一名誉会長

80周年記念協会表彰者

（敬称略・順不同）

●多年役員
板井　亨介　今村祐三郎　大岡　　昇
大林　芳郎　小島　　雄　城口　庸平
中西　　孝　藤木　鐵三　山田　義行

●多年評議員
荒巻　恭士　井手　正己　稲葉　　登
岩橋　貞雄　内村　俊一　大塚日出夫
加藤忠三郎　川瀬甲子雄　清田　剛一
白石　靜二　田崎　至成　野村　茂則
原田孝太郎　福永　敏男　三木　敏男

●多年委員
伊東　史郎　伊藤　郁郎　伊藤　武夫
猪野　達雄　池渕　俊男　植松　清志
内仲　　毅　遠藤　　進　大川　和彦
岡山　　信　掃部　　彌　梶井　宏修
川村　眞次　木場　公典　小浦　久子
小山　将史　酒井　重治　島　　隆男
下村　健治　鈴木　克彦　田中　　康
田畑　重明　田村美喜男　高田　光雄
竹田　三夫　龍野　豪利　谷川　康信
塚口　明洋　鶴田　昭一　出雄　　隆
轟　　泰輔　中川　　徹　中西　　稔
西川　純一　伯耆　　紳　松隈　　章
松本　　章　三宅　育男　宮内　　宏
安田　　孝　保田　幸昭　山下　修司
吉村　英祐　米井　　寛　和田　克朗
和田　康由　渡辺　　博

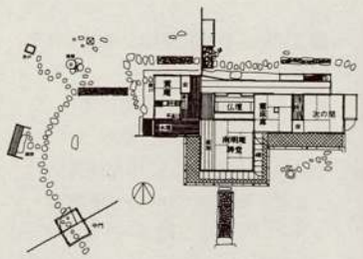
●永年会員（会員歴50年以上）
井上　　實　井澤　善哉　井原　巖
石倉　千満　犬伏　武芳　大内　　茂
岡本　俊輔　沖田　誠一　亀岡　二郎
工藤　雅三　小山　　武　坂本　忠義
竹内　さく　谷口　尚武　玉木　一次
富松　助六　中村　隆慶　林野　全孝
広瀬　　勇　南出　信雄　宮田　禮彰
森　　定夫　山田　一義　米田　良男

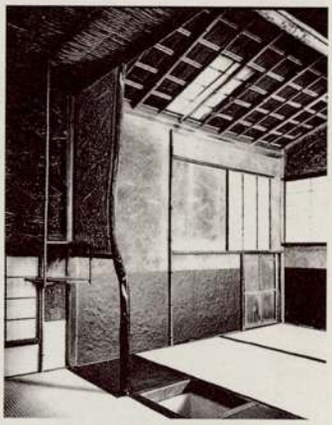
●特別功労者表彰
○事業功労者
勝　　一弘　北村　恭一　杉本　真一
中村　昌生
○青年技術者選考委員
荒井　　清　溝神宏至朗
○工高生デザインコンクール審査委員
奥　　俊信　狩野　忠正　北浦かほる
西村征一郎　本多　友常　三谷　幸司
安田　丑作
○建築工事実務講習会講師
藤井　孝晏　吉田　　豊
○支部関係
（京都支部）
大原　　正　岡野　武司　神谷　　治
小滝　一夫　神野　武司　水野　善雄
森島　照雄　安井洋太郎　山口　　明
（中国支部）
古林　敏郎　佐藤　重夫　柴田　修身
宮本　健司
（東海支部）
今津　清直　岩田　昌広　小宮　三辰
後藤　利秋　林　　金之　福田　泰造
桝林　宏二　松本壮一郎
（和歌山支部）
上野　嘉一　岡　　隆　貴志　満二
黒田　征四郎　辻本　豊　野島　育夫
東野　信義

●永年事務局職員（在職10年以上）
（本部）青野　明子　大島　正樹
　　森ノ木徳信　森本　　勉
（支部）河島　勝三　田中　鈴子
　　松本　幸二　山内　清幹

茶室見学会(第8回)
大徳寺玉林院の蓑庵と霞床席

日　時　1997年 5 月17日(土)
　　14:00—16:00
講　師　中村昌生／京都工繊大名誉教授
定　員　30人
　　＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
　　京都市北区大徳寺町
参加費　会員 3,000円、一般 5,000円
申　込　5 月 9 日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名：茶室見学会
　　②氏名
　　③個人・団体会員、一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を 5 月12日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　大阪駅前第 3 ビル21階 〒530
　　FAX.348-0634 TEL.348-0633





大徳寺玉林院南明庵と茶室

大徳寺塔頭玉林院は、名医家として知られた曲直瀬正淋が月岑和尚を開山として、慶長 3 年に創建された寺である。8 世大龍和尚のとき、大阪の富豪鴻池了瑛が当院に祖先の牌堂を造営した。それが南明庵であり、茶室蓑庵と霞床席は、その付属施設である。

この茶室を組み入れた牌堂は、旦那衆の数寄者であった了瑛の構想に基づいたものであったと推察される。しかし、ここに造られた茶室には、数寄者の余技の域を越えた専門家の創意工夫が溢れている。了瑛の背後には表千家 7 代の如心斎がいたのである。

そしてこの一連の施設の建築に当たっては、南明庵を堂宮大工が、茶室は数寄屋大工がそれぞれ手がけているが、その仕上がりには違和感が全くなく、仏堂と数寄屋の意匠が、巧みに融合されていることを高く評価しなければならない。

蓑庵は西面して建つ。柿葺切妻造りの前面に庇を付け下ろし、袖壁を隔てて右方に水屋の棟が接している。外観では壁が大きくて、差石に直接壁がつく足元の手法なので、大へん侘びた姿を形づくっている。内部は三畳中板の間取りである。点前座には中柱を立て、炉を中板の所へ台目切に切っている。天井は、床前の平天井に対して、点前座を菰の落天井とし、にじり口側を化粧屋根裏にしている。

霞床席は四畳半の広さである。ここは蓑庵に対する書院としてつくられている。間口一間の床を構え、違棚を備え、天井は格天井、壁は張付壁であり、明らかに書院風な構成をそなえている。

（中村昌生著『茶室大観』より）

近代建築見学会
(第5回)
大阪倶楽部 中央電気倶楽部の建築



大阪倶楽部



中央電気倶楽部

新緑深まる季節に在阪屈指の歴史と格式をもつ二つの倶楽部建築を訪ね、建築とともに、社交倶楽部の近代と現在の在り方を見学したいと思います。

大正13年の大阪倶楽部の建築は、安井武雄の名作として著名なもので、特異な様式性と装飾を備えるこの作品によって設計者の意匠力を十分に察知できるものです。

次の中央電気倶楽部は大正 3 年創立の歴史を有し、現在の建築は大江ビルの設計者として著名な葛野壮一郎によって、昭和 5 年に建築されたものです。堂島浜にあり、その存在は広くは知られないもののようですが、保存状態もよく活用され、大ホールや和室など個性的な意匠をもつ建築です。

また時間が許せば、この両建築の間を少し遠回りして、周辺の近代建築にも目を向けたいと計画しています。土曜の午後、街の探訪にご参加ください。

（山形政昭）

日　時　1997年 5 月31日(土)
　　14:00—17:00
講　師　山形政昭／大阪芸術大学助教授
見学先　①大阪倶楽部
　　②中央電気倶楽部
集　合　大阪倶楽部玄関前
定　員　30人
　　＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 2,000円
　　＊含、消費税
申　込　5 月23日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名：近代建築見学会
　　②氏名
　　③個人・団体会員、一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を 5 月26日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　大阪駅前第 3 ビル21階 〒530
　　FAX.348-0634 TEL.348-0633

建築家に何ができるか

阪神大震災・被災地の現場から考える

第4回

森崎輝行

森崎建築設計事務所主宰

支援まちづくり専門家の役割

被災地のまちづくりでは、いま建築家の役割が問われています。
復興にかかわる様々な分野の方をお迎えし、震災の教訓を踏まえた建築家の日常的な役割に焦点を当てながら、建築と都市の将来を考える対話型のセミナーを開催します。
お気軽にご参加下さい。



まちづくり専門家の資質は、どんなまちがいいかを考え、提案し住民に伝え、そのまちづくりを誘導的整備手法によって、いかに実践させうるかによっていると思える。建築及び都市計画系の人がそれに携わるが、一般的には都市計画系のコンサルタントがその役を担っている。

都市計画家の職能は、都市・地区レベルではその機能性を発揮するが、街区レベルでの対応はいま一つ困難なことが予期される。これは、<まちの人々>にとっては個々の家々の集積体が<まち>であるのに対し、現代日本の都市計画家は全体からの分割という手法に終始しているからであり、都市全体の中での個としての理解も乏しく、住民との間に違和感も生じている。

一方、建築家の職能は、第一義に個人利益、次に社会、個人と社会の矛盾の相剋、次代への継承、といったものであると考えられるが、個人利益最優先の為に都市全体の中での家づくりという概念に乏しい建築家が多い。

都市計画家も建築家も互いの職域に足を踏み入れねばならない。すなわち、最低、街区レベルまでを考慮に入れた



森崎輝行（もりさき てるゆき）
1972　神戸大学工学部建築学科卒業
　　双星社竹腰建築事務所、安藤忠雄建築研究所を経て
1976　森崎建築設計事務所設立
現在、明石高専非常勤講師、神戸市景観アドバイザー、神戸いきいき推進協議会運営委員長、新長田再開発久二塚6地区コンサルタント及び担当建築家。
震災前からの関係地区を中心とした支援活動、白地地区野田北部における地区計画の提案・合意形成への協力などで活躍中。

個人利益と社会利益の同時誘導の手法による新しい職能の確立である。これによって、次に挙げる役割を、専門家個人として、あるいは専門家組織として受け持たなければならない。

①まちづくり協議会のネットワーク化
②地元事業者の参画体制の確立
③まちづくりの支援

（森崎輝行）

日　時　1997年 5 月30日(金)
　　18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
　　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　森崎輝行
定　員　30人＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
　　＊学生は500円引
　　＊含、飲物・消費税
　　＊団体会員扱いは１社１名
申　込　5月23日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名（建築家に何ができるか）
　　②氏名
　　③個人・団体会員、一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を５月26日(月)に発送します。
申込先　(社)日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　大阪駅前第３ビル21階 〒530
　　FAX.348-0634 TEL.348-0633
主　催　(社)日本建築協会
　　若い会員の集い小委員会
　　主担 米井 寛／東畑建築事務所

30's EYE- 21世紀へのエスキス

第24回

松井　紫朗

現代彫刻家

京都市立芸術大学講師

空間への回路

「30's EYE-21世紀へのエスキス」をテーマに、30代を中心に様々な分野でご活躍の方々をゲスト講師に迎え、従来の講演会形式とは違う「語り合い、情報交換を行う場」をつくりたいと考えています。
気軽にご参加下さい。

日　時　1997年 6 月27日(金)
　　18:30—20:30
会　場　日本建築協会サロン
　　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　松井紫朗
定　員　30人
　　＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 1,500円
　　＊学生は500円引
　　＊含、飲物・消費税
　　＊団体会員扱いは１社１名
申　込　6月20日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名(30's EYE)
　　②氏名
　　③個人・団体会員、一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を６月23日(月)に発送します。
申込先　(社)日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　大阪駅前第３ビル21階 〒530
　　FAX.348-0634 TEL.348-0633
主　催　(社)日本建築協会
　　若い会員の集い小委員会
　　主担　樋上新治／和敬





Voice-Scope/copper/180(h)×500×3000cm/1994

私は'93年、奨学金を得て、ドイツで１年間制作三昧の日々を送りました。その後もあちらで作品を見せる機会を得、現在もドイツと日本を行ったり来たりしています。

私の作品の内容というのは、様々に次元の異なる空間を、私の作品を媒体として結び付けるというものです。そんな私にとって幸運だったのは、あちらでは現代美術の展示空間が歴史的な背景を持っていたり、はっきりとした方向性や性格を持っていることでした。それは、私の作品内容からして、私がその展示空間をどのように把握するかという事から始めなければならない事を意味しています。この経験は、私自身の視点の位置をはっきりさせることに役立ったと思います。そしてそれは単に作品の展示空間に止まらず、日常の中で意識されないで在る空間の発見へと繋がっていく可能性があると思います。

今回それが、例えば建築に携わる方々にとってどういう意味を持つのか、意見の交換ができればと思っています。

（松井紫朗）

松井紫朗（まつい しろう）
1960　奈良県生まれ
1984　京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻卒業
1986　京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
1986～87　京都市立芸術大学美術学部非常勤講師
1986～92　成安女子短期大学デザイン科非常勤講師
1988～95　京都精華大学美術学部非常勤講師
1995～　京都市立芸術大学美術学部講師
1983～97　キリンプラザ大阪、東京画廊、マイドーム大阪、京都府立文化芸術会館、兵庫県立近代美術館、ザールブリュッケン市立美術館（ドイツ）等、国内外で個展・グループ展多数作品出展。

受賞
1983　京都美術展 奨励賞
1989　次代を狙う作家展 大賞
1992　第３回五島記念文化賞 美術新人賞
1993　第４回タカシマヤ文化基金　新鋭作家奨励賞

講演と見学の会
琵琶湖博物館とロータス館



ロータス館　　琵琶湖博物館

滋賀県・琵琶湖の南湖東岸のほぼ中央部に湖面に突き出た烏丸半島があります。今、この半島が大きな注目を集めています。草津市立水生植物公園みずの森（ロータス館）の完成に続いて、昨年秋に新たに滋賀県立琵琶湖博物館がオープンしているためです。

今回の「講演と見学の会」は、琵琶湖博物館とロータス館を自分の眼で実際に確かめようとする企画です。そして琵琶湖博物館及びロータス館の企画、建設、展示段階の様々な興味あるお話をしていただける予定です。

5月は琵琶湖のもっとも美しい季節です。多数の方のご参加をお待ちしています。

琵琶湖博物館は12年間という長い準備期間を経て、昨年の10月20日に開館しました。この準備期間の学芸員の議論で、どのような博物館を作るのかが決められていきました。その基本の考えは、本当に大切なのは地域の人のくらしや、そのくらしを取りまく自然であり、その自然やくらしに改めて目を向けるきっかけを作る場が博物館だろうということでした。

そのような場になるためには、展示ははっきりと分かっていることを知らせるというような内容ではなく、展示作りの過程や方法も展示し、展示と対話する中で、ごく普通と思っていたものの中に発見があるような展示を心がけてきました。そしてそのような展示を活かし、また博物館全体の雰囲気を盛り上げて博物館の効果を上げることができるような建物を作ってきました。

展示と建築、そして博物館利用者のネットワークと学芸員、これらの要素がどのように配置されているかをご覧になり、ご意見を聞かせていただければありがたく存じます。　（布谷知夫）

日　時　1997年 5 月27日(火)
10:30—17:00
講　師　布谷知夫／琵琶湖博物館総括学芸員・事業部長
楠　和夫／創造社・中部事業所長
定　員　50人＊申込者多数の場合は抽選
集　合　草津市立水生植物公園（ロータス館）入口付近
＊滋賀県草津市下物町1091
＊JR草津駅よりバス「烏丸半島」行＜約25分＞
＊大津港より「草津烏丸半島港」行＜約50分＞
参加費　無料＊ただし、入館料・資料代等として1,500円が必要です。
申　込　5月13日(火)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：琵琶湖博物館とロータス館
②氏名
③個人・団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を 5 月14日(水)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
大阪駅前第３ビル21階 〒530
FAX.348-0634 TEL.348-0633

アジア建築文化誌研究会
第12回
「建築」との出会い
フィールド・ワークの現場から

研究会では、１年以上に及ぶフィールド調査をおこなっている研究者を中心に、アジア、住宅、建築に関心を寄せる方がたにご参加いただき、その研究成果を発表、情報交換し、またその情報をひろく発信しアピールすることを目指しています。アジアの多様な住まい、生活慣習、伝統を学び考えることによって、住まいを多角的にとらえる契機になれば、と研究会を公開しています。
お気軽にご参加ください。

日　時　1997年 5 月17日(土)
17:00—20:00
会　場　学芸ホール
＊学芸出版社３F
発表者　加藤　剛
定　員　30人（申込み先着順）
参加費　500円＊資料・飲物代
申　込　5月15日(木)までに、FAX、E-mailでお申込み下さい。
①催し名：第12回アジア建築文化誌研究会
②氏名
③職場・学校名
④連絡先：住所、電話・FAX番号
をお知らせ願います。
申込先　学芸出版社編集部
（担当：藤谷）
京都市下京区木津屋橋通西洞院東入　〒600
FAX.075-342-2605
TEL.075-342-2600
E-mail:gakugei @ mbox.kyoto-inet.or.jp
主　催　アジア建築文化誌研究会
事務局：学芸出版社
協　賛　ALAP（Archi-Link Asia-Pacific, アジア太平洋建築情報ネットワーク）
後　援　㈳日本建築協会

私はもともと社会心理学の出身ですが、その後、社会学、人類学、歴史学的アプローチにも関心を広げるようになったチャンポン人間です。いずれにしても、明示的には、「建築学」にも「建築」にも、縁もゆかりもない研究生活をおくってきました。しかしこの10年ほど、スマトラとマレー半島において継続的村落調査に従事し、百年ほどの村の社会史を考えるうちに、衣・食・住の変化にも興味を持つようになり、ぽちぽちと「建築」のことも考えるようになりました。というのも、今世紀前半に貨幣経済が浸透しますと、村レベルにおいてさえ、「建築」にファッション性があらわれ、村の家屋形態が大きく変化したことに気がついたからです。当然のことながら、こうした変化は生活様式一般の変容とも連動していました。

研究会では、私の個人的研究史を振り返りながら、私と「建築」との出会いがどのように展開したのか（あるいは、展開しなかったのか）を考えてみたいと思います。　（加藤　剛）



村の家屋３態。真ん中の家が一番古い形のもの。右が一番モダン。



スマトラの調査村のある家の居間



オートバイの後ろにドリアンを積んで村をあとにする某研究者

加藤　剛（かとう　つよし）
京都大学東南アジア研究センター教授
著書
『時間の旅、空間の旅』めこん、1996年

日本建築協会創立80周年
受託事業

「戦前長屋等建替モデル提案募集」表彰作品決まる

大阪市内の老朽化した民間住宅の建替を一層促進するため、「戦前長屋等建替モデル提案募集」が実施され、審査委員会（委員長：巽和夫京都大学名誉教授）にて厳選審査の結果、入選作品として最優秀作品、優秀作品、佳作が２部門あわせて９点と、入選作品以外に、優れた作品として準佳作２点、学生の作品の中から奨励作品として３点、計14点が選ばれた。

この提案募集は、市内に数多くある戦前長屋や木造共同住宅など老朽化した民間住宅の建替について、共同建替や協調建替の手法を用いて、より良い居住環境のなかで引き続き住み続けることができるような計画提案を広く専門家などから求めたものである。

作品の応募は、平成８年10月30日から平成９年１月31日までの期間で２部門に分けて行ったところ、関西圏を中心に、Ⅰ部（建築設計、都市計画などの実務や研究にたずさわる方［学生を含む］を対象）67点、Ⅱ部（建設に関わる企業を対象）11点、合計78点の多数に及んだ。

Ⅰ部入選作品　　敬称略

	応募者名
最優秀作品 1点	澤田悠紀夫、小林　純、植田道則、橋岡佳令、吉田卓史、西村英夫
優秀作品 2点	中西義和、平林威久子、澤田健司、中本有香
	大阪ガス株式会社 関西ビジネスインフォメーション株式会社
佳作 2点	大阪スタヂアム興業株式会社 一級建築士事務所株式会社高原建築研究所
	植　康則、須永和久、林　一則、野坂英史、鶴田善久

Ⅱ部入選作品

最優秀作品 1点	三井建設株式会社大阪支店 松浦義和建築研究室
優秀作品 1点	積水ハウス株式会社
佳作 2点	株式会社鴻池組大阪本店
	株式会社長谷工コーポレーション 西村紀夫

その他の表彰作品（いずれもⅠ部作品）

準佳作 2点	佐藤敏和、三和盛彦、木戸貴博
	株式会社坂倉建築研究所大阪事務所
奨励作品 3点	北岡伸一、沼田典久、布野研究室メンバー
	宇高雄志、吉村茂久、山口　真、水谷威信
	脇田祥尚、土江敦子

●戦前長屋建替モデル提案募集　講評

老朽住宅密集市街地の整備は、震災対策や人口回復、活気あるまちの再生などの面できわめて重要な課題となっている。

今回の提案募集は、民間のエネルギーを活かして大阪市内における戦前長屋地区の再生を図ることをめざして行われた。多面的な検討を要する難しいテーマであるにもかかわらず、関西圏や東京圏などからⅠ部67点、Ⅱ部11点、合計78点という多数の応募があったことは高く評価されることであり、非常に意義深い。

提案された内容は、現状分析にもとづいた地区にふさわしい整備方針、戸建て建替・協調建替・共同建替など選択性のある建替モデル、建替ルールや事業推進手法、魅力ある共用空間の計画、制度・組織の新設や改善など多方面にわたるものであった。

きわめて意欲的な作品が数多くあり、特にⅠ部では多様な提案が得られた。今後の戦前長屋地区等の環境整備や建替について、建築計画、事業手法の両面において多くの示唆を与えるものである。一方、Ⅱ部は、構・工法面に力を注いだ提案が寄せられたが、応募作品数が少なかったこともあって、計画、事業推進面とあわせて総合的にまとまった作品が少なかったことは残念である。

選考にあたっては、戦前長屋地区等の密集地域の特性を的確にとらえているかどうか、地権者や住民に理解が得られやすく民間主体で進められるかどうか、また、事業実施面での実現性が高いかどうか、といった観点のもとに審査を行った。

審査の結果、入選作品以外に、Ⅰ部において優れた作品２点を準佳作に挙げるとともに、将来への活躍を期待して、学生の作品３点に奨励作品賞を与えることとした。またⅡ部の優秀作品は、審査の結果、１点にとどめることとした。

今後、応募された貴重な提案を生かして、老朽住宅地の地権者や住民の方々へ広くPRを進めるとともに、老朽住宅密集市街地に対する施策がより一層発展し、戦前長屋地区の再生が図られることを強く期待したい。

主催／大阪市
協賛／㈳日本建築協会
後援／㈳大阪府建築士会
㈳日本建築家協会近畿支部
㈳大阪建築士事務所協会
㈳日本建築学会近畿支部
都市住宅学会関西支部
住宅金融公庫大阪支店
住宅・都市整備公団関西支社
大阪市住宅供給公社

※上記表彰作品については、作品集の作成や展示会の開催が予定されている。

●問い合わせ先
大阪市都市整備局計画開発部住宅政策課
〒530　大阪市北区中之島１丁目３番20号
大阪市役所６階　TEL.06-208-9217

主催　日本建築協会

平成９年度　第43回工高生デザインコンクール

設計課題　記念展示館

課題の趣旨

近年、全国各地に個人や企業が残した業績などをテーマにした記念展示館がふえてきている。

記念展示館とは、展示館・資料館の中で特に記念性の高い施設である。そのジャンルは、郷土を代表する人物や会社・自治体に関するものにとどまらず、歴史・文学・芸術など多岐に渡っている。したがって、立地については、その記念性をよりよく表現する意味から、展示に縁が深い地であることが多い。また、その土地にゆかりがなくても、展示内容の背景や風土を来館者自身が、イメージできるように企画することもある。



入選賞牌

本課題は、資料の収集・展示のみならず、多くの人々が自分たちの住むまちを見直し、新たな発展を促すような、アイデアあふれるスペースの提案を期待している。

設計条件

1．敷　　地：敷地の大きさ、形状ともに自由。現実にある敷地を想定してもよい。
2．規　　模：延べ面積は自由とする（ただし、上限は500m²）。構造・階数は自由とする。
3．所 要 室：たとえば、展示室・収蔵庫・事務室・便所など、必要と思われる室を適宜設ける。
4．そ の 他：「○○記念展示館」、「○○の記念館」などのようなサブタイトルを付ける。

所要図面

1．配 置 図：縮尺自由（敷地・建築物・植栽などの外構および、道路や周辺の状況を示す）
2．各階平面図：縮尺1:100
3．立 面 図：縮尺1:100（2面以上）
4．断 面 図：縮尺1:100（1面以上）
5．透 視 図：設計意図を表すところ（アイソメも可）。模型写真に替えてもよい。
6．設計説明：設計趣旨（展示内容と立地についての説明も含む）および建築概要（敷地面積、建築物の構造・階数および床面積など）を示す。
7．そ の 他：平面図・断面図には室名・所要寸法を記入する。その他必要と思われる図面を描いてもよい。

応募条件

1．用　　紙：白色製図用紙A１判（５９４mm×８４１mm）１枚を使用し、その中にすべての要求図面を描くこと。
2．仕 上 げ：透視図のほかはすべて黒色鉛筆仕上げとし、ワープロ・スクリーントーンなどによる仕上げは禁止する。透視図は彩色用紙に描き、製図用紙にのりづけしてもよい。透視図や模型写真以外の貼りつけ、図面のパネル化は行わない。
3．応募資格：平成９年４月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同で制作したものとする。
4．そ の 他：用紙や図面には、学校名・学年・氏名など応募者がわかるような表示は行わないこと。
＊以上１～４の条件に違反した応募作品は、失格とすることがある。

応募方法

1．別紙用紙に、学校名・所在地・学年・氏名を記入し、封筒に入れ密封し、図面の裏に貼りつけること（記入用紙が足りない場合は複写して下さい）。
2．共同制作で応募する者は、１.の記入用紙に連名のうえ、代表者に丸印をつけること。
3．応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成９年９月３０日(火)付の消印をもって締め切る。

送付先

〒530　大阪市北区梅田1丁目1番3-2100　大阪駅前第３ビル21階
社団法人　日本建築協会　第43回　工高生デザインコンクール係
TEL.06-348-0633

入選作品の数および賞

1．入選作品を１０点とする
2．入選作品のうちから最優秀賞１点、優秀賞２点以内を選び、賞状・賞牌および記念品を贈る。
3．他の入選作品には、賞状および賞牌を贈る。
4．応募者全員に参加賞を贈る。
＊入選作品の版権は本会に属し、また入選作品は本会にて保管する。

入選者発表

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」１２月号に発表し、入選作品は翌１月号に掲載する。

審査員（５０音順・敬称略）　委員長　菅家　克子／菅家設計室主宰
委　員　石川　康介／近畿大学理工学部建築学科助教授
大森　智子／武庫川女子大学生活環境学部講師
柿本　正和／㈱錢高組設計統轄部大阪設計部次長
北村　　潤／㈱東畑建築事務所設計部設計課長
設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所設計部専門部長
谷口美樹子／あるくネットワーキング谷口建築設計室主宰
新田　正樹／新田正樹建築空間アトリエ代表
橋本　修英／アーキテック代表取締役
檜垣　晴夫／㈱昭和設計企画・設計部室長
本多　友常／㈱竹中工務店大阪本店設計部副部長
本間　利雄／㈱大林組本店建築設計第二部部長
宗本　順三／京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授
與謝野　久／㈱日建設計大阪本社副代表・取締役
吉村　英祐／大阪大学工学部建築工学科助教授

今月の表紙
中之島中央公会堂（大阪）
撮影　松村芳治
表紙デザイン　安里俊久

■特集予告
6月号／住む空間の復興
住宅・都市整備公団関西支社15周年
7月号／素材の不思議
8月号／新エネルギー
—環境との共生—

編集委員会（平成9年度）
■副会長　西岡　道雄
金多　潔　野口　大郎
薬袋　公明　橋本　直樹
■編集理事　堀内　一夫
荒巻　恭士　※桝井　貴廣
井上　豊　水谷　昇
小島　雄　村上幸三郎
竹中　統一　山根　敏和
立野　一郎　横平　光伸
真塚　達夫　★施工材料分科会
松村　慶三　植田　実
溝神宏至朗　岡崎　康夫
山田　修　小椎八重猛
◎與謝野　久　志水　史典
■編集委員　十倉　毅
★計画分科会　吉田　茂二
☆計画系　米澤　秀暢
伊縫　憲幸　★法令分科会
梅村　宏尚　入江田吉仁
※小浦　久子　江山　雅己
鈴木　克彦　城戸　史郎
田中　直人　炭崎　勉
松川　敏正　中村　正昭
横関　真紀　浜野　幸雄
吉村　英祐　■作品作風小委員会
☆建築計画系　赤木　隆
磯村千恵子　秋山　克彦
上杉　秀隆　秋山　茂
江副　敏史　朝倉　一晃
荻窪　伸彦　小笠原絵理
菅野　忠司　川上比奈子
笹村　欽也　倉渕奈千子
佐藤不二男　杉原　繁
※塚本　史郎　富田　昌義
根木　睦二　中村　文紀
刃金　国雄　藤城　義丈
山本　匡　前川　治彦
☆インテリア・住宅系　前田　幸宏
石川　佳子　増田　敬彦
加藤　力　増田　俊哉
角方　利幸　○宮地雄一郎
北浦かほる　■会員企画小委員会
小梶　吉隆　伊藤　郁郎
小島　保人　池田　聡実
下村　陽子　○稲木　裕子
中村　孝之　大谷由紀子
中村　雅人　糟谷　浩史
※畑　康之　佐野　洋
西田　和子　高岡　伸一
渡邊　秀俊　高田　光雄
★構造分科会　高橋　麗子
岸本　一蔵　塚口　明洋
岸本　圭暁　東宮年一郎
楠本　隆　長友理津子
下野　直人　増渕　昌利
鈴木　勝博　山嵜　章子
田中　剛　■広告企画小委員会
※田辺　太一　池渕　俊男
野口　拓也　岩井　武夫
松村　和夫　○小幡　義明
吉澤　幹夫　加納伸太郎
★設備分科会　勝　一弘
梶井　宏修　河原　正雄
河津　隆之　長野　洋一
田ノ畑好幸　山下　修司

◎委員長　○副委員長　※幹事

印刷　平成9年4月25日
発行　平成9年5月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　06-348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定価　1200円〔本体価格1143円〕

建築と社会 5 1997
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN
1917年創刊　第78集／通巻902号

CONTENTS

特集●　木造建築物の伝統技術とその将来

[総論] 木の文化ルネッサンスの提起●東樋口　護 —— 22
[各論] 寺社建築の技術と今後の課題●大森健二 —— 26
数寄屋建築●吉江勝郎・日向　進 —— 28
京町家の流転●望月秀祐 —— 30
遺跡における建物の復元●細見啓三 —— 32
伝統的造園技術の伝承と今後の課題●山田昌次 —— 34
[職人紹介] 伝統建築技術を守る人々 —— 37
[終論] 現代に生きる町家●大谷孝彦 —— 40
[コラム] 伝統的木造住宅における延焼防止の試み●十倉　毅 —— 44
伝統的木造建築をめぐる話題 —— 45

会告　日本建築協会創立80周年記念事業実施　1
茶室見学会（8）大徳寺玉林院の蓑庵と霞床席.
近代建築見学会（5）大阪倶楽部、中央電気倶楽部の建築.
建築家に何ができるか（4）森崎輝行.30'sEYE（24）松井紫朗「空間への回路」.
講演と見学の会—琵琶湖博物館とロータス館.アジア建築文化誌研究会（12）.
「戦前長屋等建替モデル提案募集」表彰作品決まる.
第43回工高生デザインコンクール（設計課題：記念展示館）

建築の眼　建築の問題、まちの問題●三輪康一　痴者の歌●上野卓男　20
気になる音●塘　伸夫　景観●田中英一

作品作風　とちぎ健康の森　8
園田学園女子大学・園田学園女子大学短期大学部ドミトリーけやき
兵庫県フラワーセンター花と緑のレストハウス

gallery　ふうりんぼう—HOUSE K×2—（北村　潤）●中村文紀　16
Sketch Book　最近竣工した新建築作品8点　18
W　座談会—建築を画像化する女性たち●東宮年一郎　46
構造の頁　京都駅ビルの構造設計—2—●西　伸介　48
設備の頁　大阪市立大学学術情報総合センターのAGVシステム●東　恒雄　50
施工材料の頁　日本瓦—アスカ工法ロック式●石野欣秀　51
基礎講座A　好きな小説家の名文を写す（その1）●山田　修　52
基礎講座B　設計図の理解—1—●河津隆之　53
REPORT　SUPER ARCHITECTURE〜近代末期の建築夜話〜●米井　寛　54
REPORT　野崎隆一「白地地域復興の現状」●増田昌彦　55
GBRCニュース　平成9年度の事業計画　56
ブックステーション　書名紹介8点　57
協会だより　平成8年度建築科優秀卒業生表彰　58
第4回日本建築協会賞　織物文化への貢献●南　荘郎（川島織物）　59
免震建物と免震効果の実証●松村雄吾（松村組）
工高教育におけるCADの有効利用とその普及に関する研究●黒沢一元（大曲工業高等学校）
膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及●能村博正（太陽工業）
（特別賞）実験集合住宅NEXT21●領木新一郎（大阪ガス）

Information　西澤文隆「実測図」展—建築と庭—と実測図集刊行.開発許可事務等が守口市へ.「SPACE MODULATOR」ホームページ.村井　修「パリ・都市の詩学」展.建築系3校の卒業設計作品展.個展「上京の町家—吉原邸」.欧州住宅事情視察研修.建築Next Phase研究会.「キヤノンIXY」開発物語.マルチメディアの展示会.'97大阪ガス環境シンポジウム.スペースデザインゼミ開講　65

月間の動き　平成9年2月分　67

南側アプローチ



鳥瞰

作品
作風

設計監理■
久米設計

施工■
三井・渡辺・中村共同企業体


正面玄関

とちぎ健康の森

栃木県における健康づくり、生きがいづくりの拠点施設として宇都宮市内に竣工した。JR宇都宮駅から西へ車で約20分、大谷街道の北約300ｍの場所に位置する建設地（旧宇都宮病院跡地）の敷地面積は約21ha。敷地には豊かな「森」が残されていた。

こうした自然を最大限に残しながら、環境と調和した建築の創出を目指し、「自然との共生」を、土地利用から建築形態までの一貫したテーマとして掲げた。

健康づくりセンターは、運動フロア、温水プール等の運動施設で構成され、県民の健康増進に寄与する。生きがいづくりセンターは教室や講堂等で構成され、高齢者に学習や研修の機会を提供する。その他に展示室や大・小会議室、各種団体のオフィス等が加わって、健康や福祉に関わる多様な機能を一体化した。

敷地内に２期工事として、総合リハビリテーションセンター・養護学校の建設が予定されている。これらについては、中央の円形広場を北側から囲むような配置計画を検討中であり、近い将来、全体は統一のとれた施設群として完結する。

（柳　雅夫／久米設計）


西側夕景


東側外観

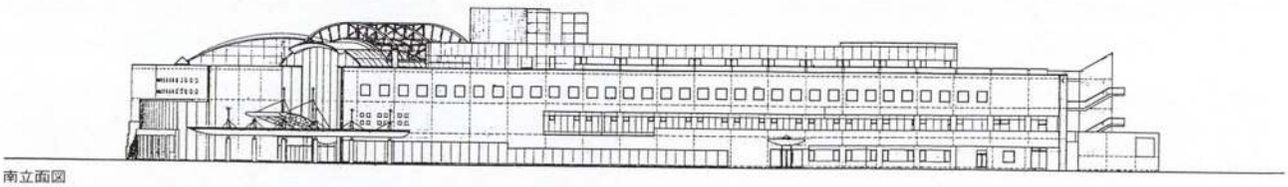


配置図1：8000

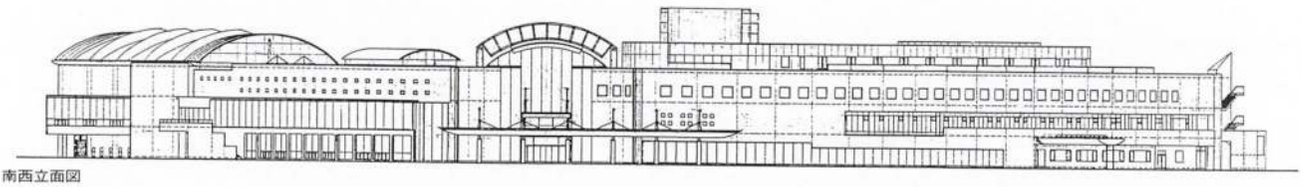
所在地 ——栃木県宇都宮市駒生3337-1他
敷地面積 ——208,770㎡
建築面積 —— 9,713㎡
延床面積 —— 23,203㎡
構造規模 ——RC、SRC、S、4F、B1F
工　　期 ——1994年10月～1996年10月
最寄駅 ——JR線・宇都宮駅
撮　　影 ——新建築写真部



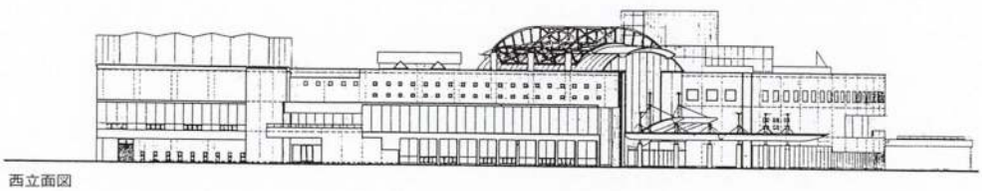
インフォメーションゲート



南立面図



南西立面図



西立面図



総合受付を見る



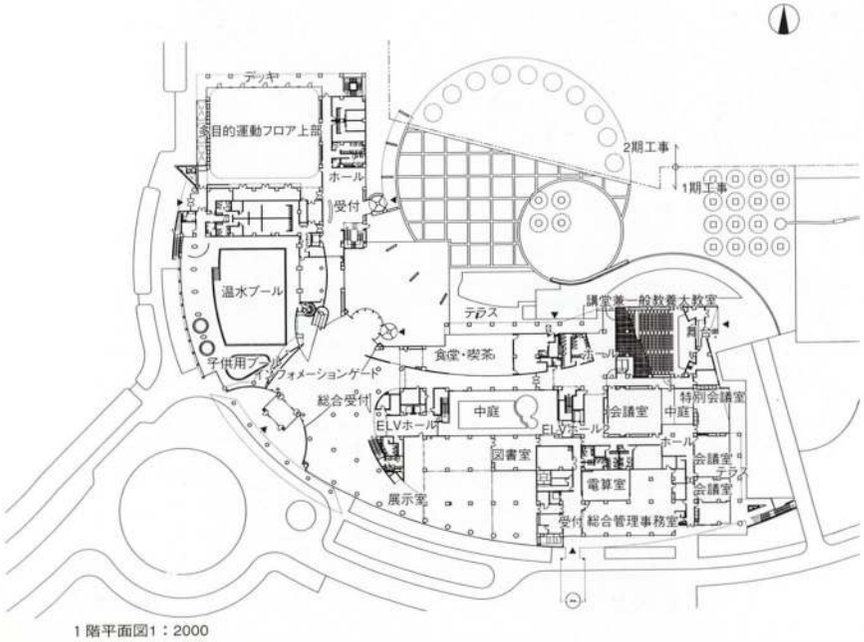
温水プール



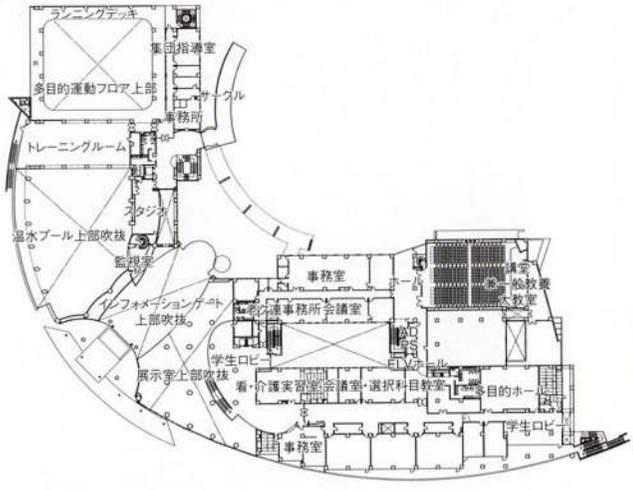
運動フロア



講堂



1階平面図1：2000



2階平面図1：2000

正面外観



開放廊下外観



バルコニー外観

作品
作風

設計監理■
大林組

施工■
大林組

園田学園女子大学·園田学園女子大学短期大学部

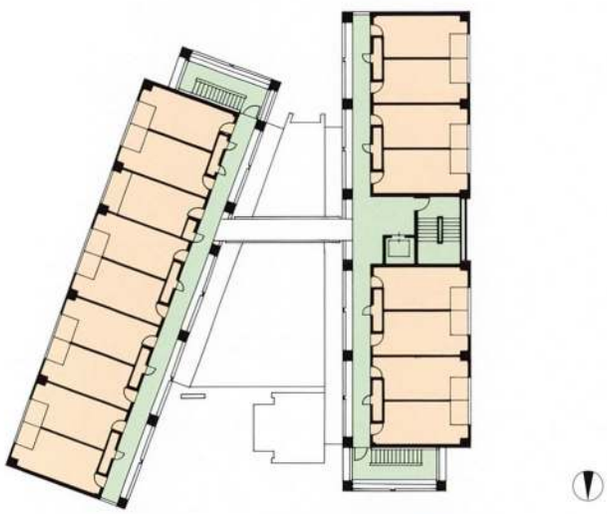
ドミトリーけやき

阪神大震災から丸二年、半壊した園田学園女子大学清明寮が新しく「ドミトリーけやき」として息をふき返した。プライバシーとコミュニケーションの共存をテーマとした女子学生寮である。

寮室はプライバシーを重視し、全室、UB、キッチンを備えた個室となっている。建物は片廊下タイプの２棟構成とし、採光、通風を確保しながら、その狭間の１階にコミュニケーションスペースとして談話室を設けた。プライベートゾーン（寮室群）をタイル張りのマス、パブリック通路を柱と梁の格子とし、テーマを形態表現するとともに、２棟構成を明快に示すため、２棟をつなぐブリッジの存在感を消すよう配慮した。また、外壁のタイルは校舎の基本色を使用して、キャンパス全体の調和を図りながら、ホワイトベージュの格子と対比させている。

敷地周辺は緑豊かな地区であり、寮名称もキャンパス内のけやきアベニューに因んで名付けられた。生活する学生にとって、思い出の核となるような寮であってほしいと思う。

（小林照雄・茶田美代子／大林組）



プライベートゾーン
パブリック通路
基準階平面図　1：500

所 在 地 ——兵庫県尼崎市南塚口町7-29-1
敷地面積 ——2,127.34㎡
建築面積 ——　658.90㎡
延床面積 ——2,343.12㎡
構造規模 ——RC、一部S、7F、P1F
工　　期 ——1996年３月～1997年３月
最 寄 駅 ——阪急電鉄神戸線塚口駅
撮　　影 ——川元　斉



南面見上げ



渡り廊下



アプローチ

全景



ファサード

作品
作風

設計監理■
兵庫県都市住宅部営繕課

施工■
塩谷運輸建設

兵庫県フラワーセンター 花と緑のレストハウス

兵庫県フラワーセンターでは、開園20周年記念事業として、より高度なサービスを提供するため、レストハウスの改築を行うことになった。

施設の設計にあたっては、以下の点に主に配慮した。

● 景観との調和

設計にあたり、周辺の美しい景観との調和がまず求められた。

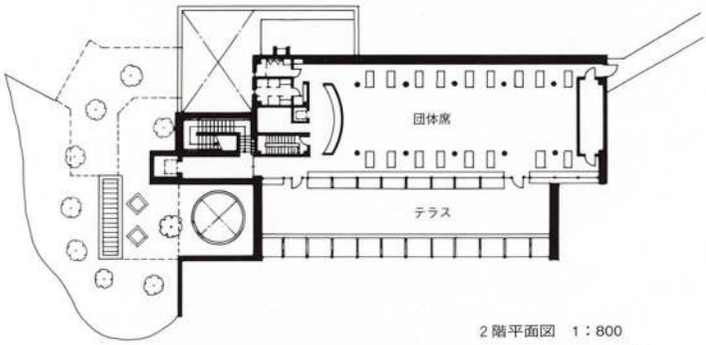
そこで、断面を斜面に沿った階段状とし、また、側面や屋上に盛土をして、建物が半ば斜面に埋もれたかのように設計した。

さらに、外壁はインド砂岩白目地とし、客席前面のガラス張りと合わせて、清々しい印象の佇まいとなるよう配慮した。

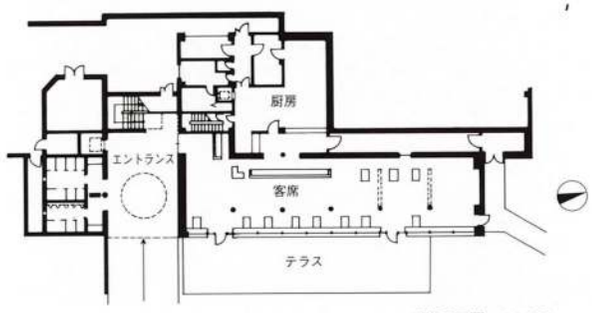
● 食事のための空間構成

花壇、噴水、池、緑の織りなす美しい景観を満喫しながら、くつろいだ雰囲気で食事ができるように考え、建築はそのための装置と位置づけて設計を進めた。

特に、2階客席は、屋根を膜構造として、開放感を重視した設計となっている。　　(栄　真樹／兵庫県都市住宅部営繕課)



2階平面図　1：800



1階平面図　1：800

所 在 地 ——兵庫県加西市豊倉町飯森1282-1
敷地面積 ——462,043.23㎡
建築面積 ——　964.25㎡
延床面積 ——　991.25㎡
構造規模 ——RC、2F
工　　期 ——1996年6月～1997年2月
最 寄 駅 ——北条鉄道北条町駅又は中国縦貫自動車道加西インター
撮　　影 ——新極　求



エントランス



1階客席



2階団体席

gallery

ふうりんぼう
――HOUSE Kx2――

設計
北村　潤

――かつて、私が住んでいた家の近くにそこだけが、ぽっかりと家を建てることが忘れられた様な、原っぱがあった。そこは、子供たちのかっこうの遊び場で、彼らはその原っぱを「ふうりんぼう」と呼んでいた。
「原っぱ」は住宅地の中の自然である。陽だまりの場所であり、風が吹き抜ける場所である。
私たちは、まちの中に「広場」と名付けられる場所を見ることはできるが、「原っぱ」には仲々お目にかかることができない。
「原っぱ」は、そこが何もない場所であり、隠れることができない場所であるが故に私たちの想像力をかきたてる。
ご多分にもれず、20年ぶりに見た私の「原っぱ」は、駐車場になっていた。

――家を建てるとはどういうことだろう。賃貸住宅であれば、家族の成長に合わせて、住み替えることができる。例えばオフィスビルなら、ある時代のそのビルに働く人々の年齢構成はそう大きくは違わない。
家を建てるということは、そこに住む家族の時間を引き受けることだ。
住宅が他のジャンルの建物と決定的に異なるのはこの点にあると言っていい。
そうであるならば、住宅は時間に耐えねばなるまい。
その意味で住宅は普遍性が求められるだろう。
何故なら、人の好みが変わることを私は知っているからである。

――奇をてらわず、ぶっきらぼうであるが、少しばかり倦まない程度の洒脱さを持ち合わせ、いつも言葉静かに佇んでいる。そんな奴となら、時間を共に旅することができるだろう。
いつまでも遊ぶことができる「原っぱ」の様に。
そうして、私はこの家を秘かに「ふうりんぼう」と呼んでいるのである。

北村（きたむら）　潤（じゅん）
1951　大阪市生まれ
1977　京都大学大学院修士課程修了
　　東畑建築事務所入社
　　設計部 設計課長

撮　影―島　修一、徳田　裕英*
企画編集―中村　文紀（作品作風小委員会）







2594

2594 大阪府立漕艇センター

設　計：大阪府建築部営繕室
施　工：大森工務店
a．高石市高砂１丁目
　（泉北臨海緑地内）
b．2,602.26㎡
c．1,029.01㎡
d．1,491.93㎡
e．ＲＣ、一部Ｓ、3Ｆ
f．平成７年４月～平成８年５月

平成９年なみはや国体の漕艇会場としての整備と競技の強化・振興・普及を目的に、旧棟に隣接して建設された本施設は、工業専用地域の緩衝緑地として設けられた公園内にあり、護岸整備されたコースの水路を挟んで浜寺公園に面している。要求される艇庫や観覧室などの機能に加えて、以前の海岸が果たしていたような憩いの場をつくる、“水辺空間の再生の核”をコンセプトに計画を進めた。
傾斜し突出したボート形の屋根庇にスリットやライン状のトップライトを入れることで、リズムとスピード感ある幾艇ものボートが競争しているイメージを表現し、広がる屋外アプローチ階段や８°傾いたガラスは、水辺への方向性を強調して、施設利用者だけでなく見る人に水辺を意識させるランドマークを意図した。内部は中柱から外側を片持ちの床・屋根とガラスで構成し、水辺への眺望を生かした設計とした。



2595

2595 島本町ふれあいセンター

設　計：昭和設計
施　工：青木建設
a．大阪府三島郡島本町桜井3-4-1
b．13,203.30㎡
c．　3,496.36㎡
d．　9,970.40㎡
e．ＲＣ、Ｓ、5Ｆ
f．平成６年10月～平成８年５月

生涯学習・健康保健サービス・社会福祉・図書館といった４つの機能を階別に配したこの施設は、島本町の住民サービスの拠点として計画された。
地階から屋上に貫いたアトリウムは、各機能を有機的につなぎ、老若男女を問わず、同じ町の住民として、互いに息吹きを感じあえる“ふれあい”のための装置として据えられている。
また、アトリウム頂部のガラスのシリンダーは、昼光を施設内に取り入れ、夜間は施設内の照明により光を発信する、いわば内と外を結ぶインターフェースとしても機能する。
このシリンダーから洩れる光が、通行者にとって“しまもと”を示す道標となり、住民にとって“ふるさと”を示す光となり、町の発展を示唆する光となっていつまでも輝いてほしい。
緑に浮ぶ“灯台”のように……。



2596



2597

2596 山形県文翔館（山形県旧県庁舎）

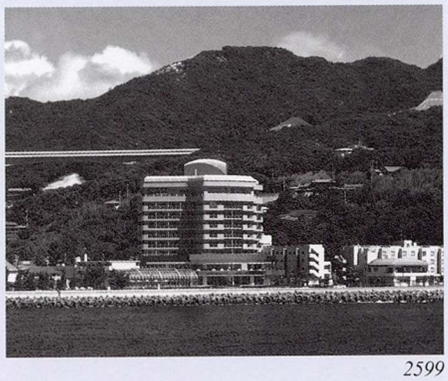
設　計：文化財建造物保存協会
施　工：千歳建設
a．山形市旅篭町3-4-51
b．19,400　㎡
c．1,864.60㎡
d．5,471.20㎡
e．組積造三階建
f．平成２年６月～平成７年６月

2597 KTIセミコンダクター㈱
西脇工場増設工事

設　計：鹿島・大成共同企業体
施　工：鹿島・大成共同企業体
a．西脇市平野町302-2
b．78,315.99㎡
c．8,519.5 ㎡
d．23,342.14㎡
e．RC、S、4F
f．平成７年４月～平成８年５月



2598



2599

2598 福山市北部市民センター

設　計：新広島設計
施　工：前田建設工業・三島産業
（仮称）福山市北部市民センター
建設工事共同企業体
a．広島県福山市駅家町大字倉光37-1
b．9,479.17㎡
c．3,889.13㎡
d．6,666.11㎡
e．RC、一部S、3F
f．平成６年９月～平成８年６月

2599 ジャンボオーナーズ淡路島

設　計：昭和設計
施　工：鴻池組
a．兵庫県津名郡東浦町大磯9-3
b．5,125.86㎡
c．1,992.86㎡
d．7,718.38㎡
e．SRC、9F
f．平成７年４月～平成８年６月



2600



2601

2600 富山市芸術文化ホール
とやま高度情報センター
（オーバード・ホール）

設　計：久米設計
施　工：佐藤工業・熊谷組・日本海建興
石坂建設・奥田建設
建設共同企業体
a．富山市牛島町９番28号
b．8,628.2 ㎡
c．7,644.62㎡
d．24,255.57㎡
e．SRC、S、B2F、5F
f．平成６年４月～平成８年６月

2601 橿原神宮神楽殿（御饌殿）

設　計：奥村組一級建築士事務所
施　工：奥村組
a．奈良県橿原市久米町934
b．――㎡
c．397㎡
d．397㎡
e．木造平屋、桧皮葺
f．平成６年７月～平成８年７月

凡例

a．所在地

b．敷地面積

c．建築面積

d．延床面積

e．構造規模

f．工期

ARCHITECT's EYE

建築の問題、まちの問題

三輪　康一

被災地の住宅再建とまちづくりを考えるなかで、これまでさまざまな問題が浮かび上がってきた。そこから、「建築の問題」と「まちの問題」が互いに密接に結びついているということに気づかされる。たとえば住宅を建て替える場合、個別の敷地内だけでは解決できないし、仮にできたとしても、将来とも住環境がよくなるかどうか問題な街区が数多くみられる。そこで複数の敷地の共同建替や協調建替、さらに街区全体で取り組む街区再建の計画が必要となる。これは、個別の住まいの問題がまちの問題につながっていく例であり、同時に個々の生活がコミュニティにつながっていくことも意味している。そうした見方で振り返ると、建物の耐火・耐震性能を高めるだけでなく、まち全体が安全な構造になっていなければならない。また、ハンディキャップをもった人々が、日常生活を健常者と同じように送るためには、住宅の内部だけでなく、災害時を含めて、まち全体がバリアフリーになっていかねばならない。歴史的建築物についても、個々の建物の保存にとどまらず、一体的な環境としての保全に広がっていくことに意味がある。「建築の問題」と「まちの問題」はどちらか一方だけでは語れない。この、あたりまえのことが、実はうまくいっていないのである。

神戸大学工学部建設学科助教授

痴者の歌

上野　卓男

世の中にできない相談ということがある。できない相談を持ちかける心持は「痴」の一字で尽されているほどはかないものに違いない。ただできない相談を持ちかけずに済む心とこれを持ちかけずにいられぬ心との間には拒むべからざる人格の相違がある。（阿部次郎「三太郎の日記」“痴者の歌”抜粋）都市の環境づくりに携わる者にとって、この一節は心の支えになってくれる。

都市とは、無関係なものが空間的にも時間的にも非連続に存在する複合体である。人間の生活は社会の発展と共に変化していて、空間との対応において“はたん”は存在するものである。私共はこうした“はたん”を前にした時、計画力を発揮し価値ある対処を求められる。計画すると言うことは「混沌に対して秩序を与える」ことである。その為にはもっと環境に働きかけ“はたん”の因果を解析しあるべき姿を提示すること、言い替えれば潜在的ニーズを顕在化し、意思決定者の関心事として仕立てあげ、仮説のもとにシュミレートしてみせることが大切であろう。都市はナイーブなもので諸条件の熟度も低く、冷ややかな鉄の壁が控えていて思うように調整できるシステムは存在しない。それでも私共はこの冷ややかな鉄の壁に向って、できない相談を持ちかけるしか道を開く手立てはない。「痴」の一字では尽されない覚悟がいる。

大阪府建築部営繕室長

気になる音

塘　　伸夫

最近、街中で、とみに気になる音がある。急速に流行した携帯電話の呼出し音である。街路、車中、ロビー、時には会議中まで、時と場所を、わきまえずに鳴り響く音、一度耳に入るとその後の会話音まで気になるから始末が悪い。今日、都市生活の周辺には、自動車騒音、広告音、案内音、その他音の出る商品や装置が数多く開発され騒音に溢れている。視覚的なものなら取捨選択の余地もあるが、聴覚的なものは、そうもいかない。

西欧と日本の建築の成立ちを比較する際に、自然とのかかわりの違いが、あげられる。西欧の建築が壁で内外を明確に区分けしたのに対し、日本では、開放的な造りとし、自然を内部に取り入れてきた。当然、音についても遮音せず、室内に居ながら小鳥や虫の音を楽しみ、風鈴や水の音で涼をとり、音の文化を育くんできた。脳のしくみの研究によれば、日本人は、人が喋る言葉と虫や風等の自然の音を同時に左脳で聞きとれるが、西欧人は、自然音を右脳で聞きとる為、人の言葉を中断しないと聞きとれないという。昔から日本人が、いかに自然とかかわりを持ち、開放的であったかという証でもある。この様な自然を楽しもうとする生活の中に、一方で、迷惑な音を出さないという気遣いがあったのは、言うまでもない。今日の音の氾濫による環境劣化を問題にする際、かつて日本人が持っていた音への感性を、今一度、思い起こす必要があるのでは……。

東畑建築事務所設計部長

景観

田中　英一

日本の景観を壊しているものに電柱と看板がある。旅に出て、この町に電柱と看板がなかったらどんな風景になるかと空想してみる。まことに爽やかであり日本らしい町並みとなる。美しい。大都市の中心街では電柱の埋設化が進んでいるが、焼け石に水である。各市各村で景観条例が施行され、国立公園内では色彩規制なども行われているというのにいっこうに日本の町が美しくなる気配がない。町並みを作る要素がみなちぐはぐで好き勝手をしている。縦割り行政もいけない。

最近特に腹立たしいのは有名寺院の境内である。無雑作に立てられた電柱、張られた電線、国宝や重要文化財の説明板、WCへの道案内、火の用心や立ち入り禁止の看板など一番よく目立つところに置かれて景色を台なしにしている。自然公園の中もまた同じで自然公園というのに余りにも人工のものがあり過ぎる。形や色、設置場所を考えてもう少し目立たなくする工夫をしてもらいたいものだ。僕は絵や写真が好きでよく寺院や公園に出かけるが、絵は目障りなものを消せるからよいものの写真はそうはゆかない。いったい管理者はどんなセンスをしているのか、疑わざるを得ない。最近この腹立たしさがますます心の中で増幅してきた。行政側に、優れたランドスケープデザイナーの育成を望む。

大成建設大阪支店設計部長

建築の眼

木造建築物の伝統技術とその将来



【総論】
木の文化ルネッサンスの提起
東樋口　護

【各論】
寺社建築の技術と今後の課題
大森健二

数寄屋建築
吉江勝郎＋日向　進

京町家の流転
望月秀祐

遺跡における建物の復元
細見啓三

伝統的造園技術の伝承と今後の課題
山田昌次

■

伝統建築技術を守る人々

■

現代に生きる町家
大谷孝彦

伝統的木造住宅における延焼防止の試み
十倉　毅

■

伝統的木造建築をめぐる話題

本特集企画担当幹事
植田　実（清水建設）／小椎八重猛（積水ハウス）／志水史典（大林組）
野口和宏（大阪府建築部）／吉田茂二（竹中工務店）／米澤秀暢（鹿島建設）

【総論】

木の文化ルネッサンスの提起

―現代における木造伝統技術継承の意味―

東樋口　護

京都大学工学研究科環境地球工学専攻 助教授

はじめに

今、木造建築はさまざまな注目を集めている。伝統的な木の建築は、世界遺産や海外に建設される数寄屋・町家として日本の木の文化を発信している。木材が、こだわりの素材としてまた地球環境時代の再生可能資源として見直され、その品質の安定化やエンジニアードウッドなどの素材改良も進んでいる。木素材を活かしたドーム・トラス・大断面構法など新しい木質大空間を実現する構法開発・意匠創造も盛んだ。ツーバイフォーや輸入住宅など木造建築の国際化も進みそうである。また一方で、先の震災は脆弱な老朽住宅の安全性向上の課題を提起したところでもある。こうして、木造の世界は、豊かで安全な居住空間模索の直中にあるわけであるが、この文脈において、伝統技術・システムがどういう意味を持っているのか、その未来性について考えてみたい。伝統技術をどう捉えるか？ここでは、文化財的な建築物やそれを作る仕組みに限って伝統技術の継承を考える立場をとらない。特別なものとして「伝統技術」を取り上げ、礼讃する単線の議論はしたくない。現代の住宅・都市における木造建築の伝統技術の状況と将来性を木の文化再生の観点から論じてみたい。この意味で、木造建築伝統技術は広義のそれである。伝統技術が自己変革できるか？これをテーマにしたい。

木造住宅の現在―戦後のテクノロジー優先

●地球家族の「高成長様式」―商品化された在来構法

大変衝撃を受けた「地球家族」と題する写真集*1がある。国際家族年1994年に向けて、世界30カ国の家族を撮ったものである。持ち物を全て並べた家を背景にしたそれぞれの家族のスナップである。居住環境の差異、富の格差の前に建つ家族の姿を通して、家族の構造を探り、その未来を語ろうとする試みである。様々な解読が可能だ。

普通の暮らしとされる日本の住宅は、都心から1時間半の郊外住宅であり、住戸規模は130m²で、クウェートの450m²、イラクの200m²を除けば、決して小さくない。家財道具や衣服・什器は種類、量ともに圧倒的に多い。外壁・屋根は新建材、窓はアルミサッシ、ガレージもアルミのセットである。アメリカのそれと比べても、工業製品であふれ、大変人工的である。わが国の住宅の画一と住宅地の混沌が指摘されて久しい。こうして目の前に突きつけられると、何ともやりきれない気持ちになるのは、私だけだろうか。

これが日本の経済成長の結果であり、モダンリビングの追求と住宅生産の近代化の結果であることは紛れもない。そして今や、わが国の住宅が、モデルであったはずの欧米の様式とは似ても似つかない新しい様式、地球上今も昔も存在しなかった新しいスタイルいわば「高成長様式」とでも言うべきものに到達したことをまことに鮮やかに示しているのである。

●住宅の戦後を支えた産業化・工業化

良くも悪しくも、戦後50年の住宅生産の軌跡は、産業化の過程であった。戦後の住宅建設は、420万戸といわれる膨大な住宅不足をいかに補うかという差し迫ったわかりやすい目標を持って出発した。徹頭徹尾、欠乏の充足が追求された。そして、この半世紀に建てられた住宅は、およそ5千万戸、毎年百万戸づつ建ててきた計算になる。こうしたたゆみない歩みを支えたのは、国民一人一人の住宅を求めるエネルギーと住宅供給の産業化である。

ヨーロッパとは異なり、わが国が辿ったのは、住宅金融に基づいた自己調達の道、徹底した持家政策の実施である。国民の住改善のエネルギーは、住宅産業という新しい産業部門に組織されていった。離島も含めて国の隈々にまで新建材・部品・プレハブ住宅という形で、鉄・アルミ・プラスチックを送り込む一大産業を作り上げ、巨大な耐久消費財市場を創出したのである。

わが国の住宅生産の構造は明らかに特異である。年間数万戸を供給する巨大住宅メーカーを頂点とする住宅企業群とその背後の建材・部品メーカー群、ディベロッパーなどの関連業種からなる巨大なシステムを創り出している。戦後の住宅生産にとって決定的であったのは、住宅生産の工業化であり、その明るい技術に対する期待が、産業化の過程を通して「現実化」したこと、そして産業化の過程を通してしか現実化しなかったことである。

●伝統システムの解体・再編

産業化の過程は言うまでもなく、在来システムの解体と再編成のプロセスであった。そのひとつは、プレハブ住宅などの工業化住宅供給の末端施工への組織化である。下請施工・代理施工組織として、広範な系列化をすすめ、在来組織の建築技能に依存しながら、工業化住宅の生産性向上・コストダウンの要請からその無技能工化を進めたのである。また、より広範には、建材メーカー・部品メーカーさらには工作機械メーカーのマーケットとして、木造住宅自体が「工業化」され、地域の大工工務店システムを解体していった。そこでは、長い時間をかけて洗練されてきた本造住宅の伝統は、経済性・能率といった戦後の価値の前に敢えなく敗退し、人並みと小さな差異を求める消費者ニーズに閉塞されてしまった。今や多くの木造住宅は新建材と部品を展示する木骨住宅でしかない。先の地球家族の

＊1 ピーター・メンチェル「地球家族」TOTO出版1994

写真もどうやらこうした木造住宅であるらしい。

●木造亡国論—もう一つの近代化

都市不燃化と防火・耐火建築の実現は、廃墟を経験した国民にとって切実な課題であり、こうした状況下で田辺平学の「木造亡国論」や「防火耐風水害のための木造禁止決議」などが共感を持って受け入れられ、また、都市不燃化と耐火建築の推進が都市計画行政、建築行政の揺るがない一貫した方針であり続けることとなった。こうして木造校舎などの公共建築をはじめ寺院などの大規模木造も鉄筋コンクリート造に替わっていったのである。

不燃住宅・工業化住宅の行政的推進の一方で、戦後の木造住宅供給は、後に一部、供給の合理化策などが講じられるものの、基本的に大工工務店の業界に委ねられてきた。大学教育の場における「建築学の体系」からは排除され、木造建築の教育は消え去ってしまった。技術偏重と技能殺しは、戦後産業化社会の構造的問題である。

●欠乏から浪費への転回

しかも、多くの人が信じてきたこの産業化の成果すら、生産性という効率の一点だけで見ても、その高価格、非効率は覆うべくもないことが、近年ますます明らかになりつつある。産業化は、規制・商慣習の硬直的な制度化を伴っているのである。また、こうして造られる住宅は、エネルギー多消費型のそれである。戸建ての木造住宅の建設には、さまざまな新建材・部品を多用し、組立にも機械力を用いる。そのエネルギー総量は、平方メートルあたり90万キロカロリーに及ぶといわれる*2。伝統的木造住宅の施工に坪当たり大工5人工、諸職5人工とやや多めに見積もっても、現代住宅は伝統住宅の300倍ものエネルギーを使っていることになる。しかも、現在の住生活において冷蔵庫、暖房、照明、風呂で消費するエネルギー量は、一日平均およそ2万5千キロカロリーに達する。人力に置き換えると、25人の「召使い」にかしずかれた生活をしていることになる。これを支えているのは、言うまでもなく、化石燃料をふんだんに使う現代技術文明である。日本人は毎日一人当たりおよそ11リットルの石油を消費しているという。長い人類史のほんの2、3世紀の間だけに許された化石燃料消費時代の住まいと生活であり、つかの間の宿りにすぎない。ここにも、地域資源を大切に使ってきた伝統技術が再評価さるべき視点が存在する。

木の文化のルネッサンス—伝統技術再生のフィールド

建設省が「木造住宅供給合理化促進の方針に関する構想」を発表するのが1972年になってからである。このころから、建設省、農林省が木造住宅供給の綻び、木材流通・林業問題に取り組み始めたと見られる。そして、ようやく近年、伝統建築の再評価と再生、新構法開発と意匠創造、木材の品質向上と木質材料開発、輸入住宅など国際化の進展といった新しい動向が、さまざまに注目を集めるようになってきた。

こうした新しい木造建築の動向が、木造建築の衰弱と形勢不利を転換しうるか。問題は構造的であり、我々の社会が選択する文化に関わっている。ひとり狭義の木造伝統技術の保存継承だけでなく、伝統技術が広く我々の住まいと町を生き生きとした豊かなものにしていくためにどういう意味を持つのか、産業化する現状に対して対抗文化としてどう再生させていくのか、これこそが課題である。

木を育て、製材し、木材を流通させ、加工し、組み立て、住宅をつくる、木製品をつくる、この過程が地域に根づき、豊かな生活とすまいを形成する、そして関係者がいきいきと仕事を続けることができる、自然環境と国土を保全する。こうした木の住まいとまちづくりにおける諸要素の連鎖の総体が木の文化である。この社会システムとしての木の文化は長くわが国の基層文化として根づいてきた戦後の近代化とモダンの建築は木造を排除し続け、衰退と凋落の道をたどってきたが、今、木造再評価・振興の動きを受けて、新しい展開の芽ばえを生みつつある。それらが、木の文化のルネッサンスとして花開くかどうか、解決すべき課題は多い。

(1)伝統技術の保存継承と「適正技術」開発

木造在来構(工)法は、言葉の意味からは、その時代、地域に継続してきた一般化した構法のことを言い、工業化に対する「在来」、新構法に対する「在来」という対比で用いられる。したがって、一般的な住宅で用いられる「柱梁の軸組で構成される構法」を指すことになるが、堂宮、数寄屋、民家(町家・農家)で用いられる構法も含まれ、構造方式としては実に多様なものを含むことになる。

建築基準法が最低基準として規定している木構造を「在来軸組構法」とし、堂宮、数寄屋、民家・町家などの歴史的に形成されてきたものを「伝統構法」として区別することが、それぞれの構造原理と方式を明確化するためにも必要であると考えられる。それは、基準法上の在来構法は水平力に対しては変位を押さえ壁で耐力を確保する構造であり、歴史的な堂宮・民家などの伝統的な軸組方式とは異なるものであるからである。このような区分をしても、その境界がどこにあるのかは実はそんなにはっきりしない。それに、塔、校倉など軸組とは異なる伝統構造も存在する。

いずれにしても、文化財木造建築、堂宮建築、茶室・数寄屋住宅、伝統町家・民家などの文化市場・高級市場の伝統構法技術の保存継承の必要については、多くの言を必要としない。しかし、だからといってその保存継承が容易なわけではない。第一に、限られた市場では維持できない柿・桧皮葺き、特殊塗装などの伝統職種の育成、茅、壁土、木材などの枯渇しつつある自然材の確保などの問題である。この点についての状況は、保存意識の一定の高まり、「全文連」など文化財所有者の自助的共同取り組み、伝統的職人の養成の新たな取り組みなど明るい材料がいくつも見られるようになってきた。第二に、適切な保存継承のためには、伝統構法の構造特性・耐力を明確化するなどの技術化が求められる。伝統構法は多様な存在であり、またさまざまな社会的技術的変化を受け入れながら変質している。兵庫県南部地震で被害を受けた社寺や仏閣、淡路の「しころ造り」住宅に見られるように、伝統的な構法が局部的な強調や変化によって全体のシステムが壊れ、構法的な整合性が維持できていないケースもある。困難な課題であるが、保存継承のためには、この伝統構法の構造原理・構造耐力の解明が一般在来構法以上に必要とされる。

機能と入手性の向上に特化した商品化住宅の反省と伝統住宅の見

＊2 石川英輔「大江戸えねるぎー事情」講談社1993

直しが始まっている。しかし、未だ、伝統技術は、数寄屋・茶室あるいは高級住宅の分野に適応されるものとしての孤立化状況を脱してはいない。伝統技能がたとえ狭いマーケットであっても生き延びる重要な分野であることは疑いない。伝統構法を特殊高級市場に閉じこめ差別化する事の方が供給者にとって都合がよいと言う事情が働いているのかも知れない。しかし、その長きにわたって洗練を重ねてきた伝統の技が一般に享受できないのは不幸なことである。例えば都心町家街区において、プリント合板やクロスなどの新建材の安易な利用による修繕や改修が質の高い町家ストックにフィットするはずもなく、町家住人もそれを望んではいない。さりとて、坪当たり何百万円もするようなオーセンティックな伝統技術に対する需要が広範に存在する訳ではない。

高級化した高価な伝統技術でもなく、安易な新建材・部品技術でもないいわば伝統・現代両技術の「中間技術」、両者の適切な組み合わせによる「適正技術」が求められている。こうした分野の取り組みは伝統技術・現代技術の双方から等閑にされてきた。味わいある、アメニティの高いこれからの住まいは、伝統技術と現代技術の調和のなかに求められる。もちろん入手性は高くないといけないし、コスト低減も重要な目標になる。古材の再利用、民家・町家再生は、こうした適正技術開発の場としての意味をも持っている。

(2)木造建築の木素材を活かした空間と表現の再創造

アウトプットとしての木造住宅・木造建築が、魅力ある豊かなものでなければならない。戦後、さまざまな木造排除の仕組みの中で衰退・凋落の色を濃くしてきた大きな要因の一つに、「木造らしさ」―軸組の力強さ・優しい素材感のある仕上げ・開放性と融通性などの喪失といった事態を数えることができる。工業化部材・部品で隙間なく覆い尽くされた木骨住宅は木造であることの存在理由をほとんど喪失してしまっている。

今、木造建築が注目を集めているのは、文化財・町並み保存などを通した伝統構法の再評価と再生、大断面構法・立体トラス・ログハウスなどの素材と構造の力感的表現の創造といった、木造建築の構造と意匠の表現方法の復活である。木の構造表現は、伝統的な白木表現に限定することもない。民家の色付け・数寄屋の黒木利用・広葉樹の活用など自在であるべきである。非木造との混構造、非木造建物の内外装表現の追求も木造活性化の重要な分野である。

これらの木造空間と意匠表現の再創造のために、伝統構法に対してはモダンの伝統構法・木造建築排除ではなく、その再生・転生を、新構法に対してはエンジニアリングウッドなどの素材と新構造方式・仕上げ構法の開発を展開することが求められる。言うまでもなく、伝統構法は、堂宮・民家構造の力感的意匠も数寄屋の素材・自然表現もともに積み重ねられた高度な洗練の宝庫であるのだから。伝統建築と新木造の両者に見られるこのような木と構造表現・意匠表現の生き生きとした一体性は、広範な一般住宅においてこそさまざまに試され創造されなければならない。

伝統的な木造建築の生産は、設計施工が一体的なシステムである設計も施工者であるマスタービルダーに担われる。設計は、建築主の要求をとりまとめた間取り図を、簡便な板図に変換する「板図システム」である。平面図・床伏せ図・小屋伏せ図の上で、水平部材の組合せを決め、これらを垂直部材・柱で繋ぎ、立体化するという、柱・梁の軸組構造の特性を巧みにシステム化した伝統技術であり、間取り図を番付・ｘｙｚ座標系の上で立体構造に変換し、各軸組構成部材の寸法と継手・仕口を決定するのである。これが実質的な設計行為であるが、外部から見ると、あたかも設計過程が存在しないあるいは、簡単な間取り図作成だけが大工工務店による設計であるかのように見える。

しかし、この伝統的な設計システムは、紙に書かれた設計図に基づいて行われる近代的な手続き、「契約書の作成」や「建築確認」にはそぐわず、これらの手続きのための「設計」が別途必要になり、「代願」のシステムが一般化することになる。また、板図による設計は、伝統的な寸法体系と木材・畳・ふすまなどの部材を前提に成り立つ一種のオートマティックな設計法であり、間取り図作成あるいはそれ以前のコンセプト作成に対しては何の効力も発揮しない。このニーズ把握とコンセプト作成、空間設計といった現代的な意味での設計の訓練を欠く大工職人の、都市化など環境変化への対応の弱点の要因がここにある。したがって、木材などの素材表現・空間創造には、大工職人に対する「板図前」設計*3の教育、建築家との協働など設計システムの革新が求められている。

(3)地域の生態系と固有性に根ざした「共歓の住まいづくりネットワーク」

数十年前までの地域の住まいづくりは、地域の協働の形として地域に埋め込まれ、住まい手を中心に自律的な小規模主体がそれぞれの普請に応じて一回毎に組織されるという形が一般的であった。そこには、古い形ではあるが、地域の生態系と資源に根ざした、生き生きとした地域の住まいづくりがあった。なによりも、建てることと住むことの実感が息づいていた。こうした地域の生態系と固有性に根ざした住まいづくりは、産業化の住まい・商品化住宅の対抗力として再評価されなければならない。衰退したとは言え、さまざまに存在する地域の大工工務店システムは、施工と維持のグランドシステムである。対抗力としての伝統的地域システムに、現代技術利用のより多様な状況を拡散させつつ、住まい手と建築家・技術者・職人の住まいづくりの実感と喜びを回復する事が求められる。それは、個人的創造活動としての住まいづくりのなかに市場の商品、産業の成果をさまざまなレベルで混合し埋め込むことができる。消費の満足を超える実感の住まいづくり、そこでは住まうことと「創る」こと、住まいづくりと町づくりの合一がめざされねばならない。

地域の住まいづくりは、林産地の産直住宅、建築家が職人・林家を組織するもの、消費者組織が住宅生産を組織するもの、大工工務店が林家と協力するものなど多様な形態で試みられている*4。これらに共通するのは、林業者、製材所、材木店、地域の工務店、設計事務所などが縦のフォーメーションで連結し、一貫した住宅生産を図る協同のしくみだと言うことである。統合の度合いは総じて緩やかなネットワーク組織で、「地域ビルダー」「住宅メーカー」などの大規模化の方向に対して、供給規模がせいぜい年間100戸程度とあまり大きくない。新しい「地域型住宅」の模索、まちづくりとの連携、

＊3 板図作成の前段階での間取り空間の設計

＊4 日本建築学会建築経済委員会「地域の住宅生産システムこの十年」1994
木造建築研究フォラム26回公開フォラム資料「ネットワークがつくる木の住まい」1994

木造合理化工法の開発、地域資源との連携・活力などその目標は革新的である。これらは、まださまざまに揺らいでいる。多様な試みの成功と失敗の積み重ねといった一種のカオスの中から地域の住まい手主体のネットワーク再構築の方向が見えてくるのかもしれない。少なくとも、そこには新しいチャレンジの緊張感だけでなく、住まいづくりの歓びと相互理解・依存の関係性を確認しあう住まい手とつくり手の創造的な交歓の過程、「共歓のネットワーク」の胚胎を見ることが出来る。

＜住まい手のイニシャティブ＞

住まいの産業化・商品化の過程で、つくることと住まうことは分化し、住まいは消費されるものとなり、住まい手は産業化・商品化住宅の市場の断片的消費者へ変貌してきた。地域の生態系と固有性に根ざしたハウジングの再構築は、地域の住まい手が主人公であり、住まいづくり・まちづくりの主体的なイニシャティブを回復することが求められる。住まい・まちは、地域の生活文化を表現するものであり、住まい手の意識と教養が反映される。

＜地域資源と地場生産力の活用＞

そのためには、全国画一的な効率生産の進行に対して、地域の伝統的な住まい・集落形成の再評価を通した、地域資源と地場生産力を活かした住まい・まちづくりの再構築が求められるが、そうした取り組みは、ここ十数年来のＨＯＰＥ計画実施の過程などで既に試行が始まっている。

＜林住リンケージ＞

地域木材・国産木材の使用については、熱帯雨林の乱伐といった環境問題を引き起こしているにも関わらず、国際市場によって形成された外材の低価格によって容易に実現できない状況にある。全国ワイド・国際ワイドで形成された木材供給と利用のシステムを解体再編する、流通直結などの林業と住宅供給のリンケージの構築が重要課題である。

(4)技能労働・職人生産の再評価と技能者育成

現在、さまざまな近代化・合理化の波に洗われている木造建築の技能は、ひとり伝統技能のみならず、新たな分解再編の時期にあり、技能者養成についても、企業内の養成、小規模な私塾などさまざまな取り組みが始まっている。もちろん、十分な見習い志願者があり従来の見習い制度のもとでの養成が可能と見られる一部の高度技能分野も存在するし、積極的な育成・意識的な育成方針をもった見習い制度としての「私塾」についても、一定の成功を収めている。

しかし、現段階で、技能のあるいは技能者の将来について、明快な見通しを持つことは難しく、こうしたさまざまな取り組みの中から、未来像を一つ一つ切り開き、築きあげていかなければならない。

現代は科学技術に覆われ、その提供する利便の魅力に抗しがたい世界である。技能は技術、狭義の技術の風下に置かれ、その影をますます薄くしていくかに見える。しかし、住宅・建築の世界は、さまざまな技術革新を遂げながらも、技能労働に広く深く支えられて来たし、現在もそれ無しには成り立たない。技能と技術の協働の広い舞台が建築の世界である。にもかかわらず、建築生産の近代化の流れの中では、大工職人も大工工務店も近代化すべき対象として扱われ、伝統的技能は、文化財の保存や滅び行く工芸への哀惜といった文脈で扱われることがほとんどであった。こうした視点が不用と言うつもりはない。今も重要であることは異論はない。現に「技能」が再び問題とされているのは、技能者・職人の高齢化、後継者難という事態に直面し、その養成が緊喫の課題となっているからであり、文化財の修復など木の文化の継承にも困難な状況が生まれているからである。

しかし、そうした観点以外にも、技能労働・職人生産を、現代労働の細分性・専門性、他律的専門管理、効率性評価基準の優越に対置する技能労働の総合性、職人生産の自律性、技の美的評価基準といった「労働の人間化」の諸点からの、あるいは「仕事のよろこび」といった人間活動の根元に遡った視点での再評価が可能であって、伝統的技能労働と職人生産に内在する人間活動の未来性の見直しは今後ますます求められるに違いない。さきの共歓のネットワークを支えるのはこうした自律的活動とその成果の共有である。

技能者の育成と職人生産の再評価・活性化は、当面の緊急課題であると同時に、優れて未来的課題である。木造の世界は、その未来的課題のフロンティアである。

おわりに一確実な明日へ

地球環境問題を持ち出すまでもなく、これからの生活、住まい、都市の在りよう全てにわたって、新しい模索の時代に入っている。木造伝統技術とその社会システムが、近代化の歪みに対する対抗力・対抗文化の意味を持つことは間違いない。木造伝統技術の再生＝木の文化ルネッサンスは、広範で地道な取り組みを必要とするわけで、その現実化はひとり専門家の判断によるのではなく、生活者一人一人の価値観に依存する次代の生活・生産文化の選択の問題である。

こうした意味の、豊かな生き生きとした生活・住まい・まちを求める住み手と建築家・職人等の専門家を合わせた、さまざまな住民・市民の地域ボランティアの活動が活発化しつつある。例えば、筆者の関係するものだけでも、廃棄されんとする伝統的な木造建築の提供者と利用者のネットワークを形成し、古材の資源価値・歴史価値・文化価値のリサイクルを行う「古材バンクの会」、伝統的な京大工の技の伝承と新しい活用を担う大工職人の育成を目指す「京都国際木造建築カレッジ」、木造建築・都市とそこでの生活について広く木の文化の伝統性と現代性を研究し、その研究会ネットワークを通じて取組みの輪を広げる「木の文化研究会」、京町家の修復と再生をとおした歴史都市のまちづくりを進める「京町家再生研究会」などがある。こうした住まいづくり・まちづくりの活動は、全国ワイドで考えると驚くべき質と量のものが存在するに違いない。それらは、どこかで地域環境・資源や伝統文化に依拠し近代化の歪みを乗り越える新しい価値観の創造を目指すという点で通底するところがある。そしてこれらの地道な取り組みが、新しい木の文化の創造にどこかで繋がれば。そう期待し、楽観している。　（とうひぐち　まもる）

参考文献：東樋口　護「木造建築の動向と課題―木の文化ルネッサンスをめざして」日本建築学会近畿支部『今、注目される木造の世界』1996年３月講習会テキスト

【各論】

寺社建築の技術と今後の課題

大森　健二
(財)建築研究協会 常務理事

寺社建築といっても、それにかかわる職種として、石工事・屋根工事・左官工事等があり、又RC造、鉄筋造についての問題もあるが、主として木工事についてふれる。屋根についても少しふれる。

戦前は寺社大工というと、一般町大工より格が上で、従って手間賃も高く、若い大工にとっては、魅力的な分野であったと聞く。現在は手間の差もなくなったが、今でも何年か一回は、私共の方にまで寺社大工になりたいので世話してくださいとの依頼があり、又現場をみても若い人たちが活々として仕事をしており、大工さんの量の問題については需要と供給のバランスはとれており、私はそんなに深刻でないと思う。聞いてみると、長く残り、人々にあおぎみられるような建物の建設に参加したいから、この道を選んだという。

課題はわざにつきると思う。寺社建築と一般町家建築との大きい差は、特殊な規矩術のマスターを必要とする軒反り屋根反りを持っていることや、複雑な斗栱組の構成を示していることでなく、実は使用する部材の寸法が、町家建築とは桁ちがいに大きいことと私は考える。例えば柱径45糎の本堂の棰は、町家建築の柱寸法に近い9糎となり、長さも3米近くなるから、軒といえども柱を打ちならべたものとなる。また建物の規模も、一まわりも二まわりも大きくなるから、一般の木造建築とは根本的な差がある。

その技法は、一言でいえば架構としては厳重に固めるものの、建物全体の組手としては、若干のあそびをとっておくことと言える。三重塔の最上層の屋根を歩いた場合、塔は若干グラリとするし、又大きい屋根を持つ門の場合も、屋根上を二三人で歩くと同様にグラリとする。基本的にはそれでよいのであるが、このことはいくら注意しても判らない。すべてボルト等の金物で組み堅めてしまおうとする。

ボルトや鉄板等で堅める理由は実はある。大規模な木構造の構造計算をする場合、木造の継手や仕口の構造耐力に関する一般的なデーターがなく、金物補強によらなければ計算式が成立しないという別の事情もあるが、ごく普通の建物でも金物を使いたがる。実はその方が手軽という面も見逃せないし、見た目にも、きっちり納まると言う点もある。

かつて、私の設計した建物で、それこそ使用材料はオール尾州ひのき材という高価な建物であったが、現場をのぞくと、軒の棰の裏板を留める釘が1.5から2糎ピッチで打たれていた。これは棰裏板を釘で割っているに等しい。細かく打った釘を抜かして、釘の間隔を10糎以上空けるように指示したら、棰と裏板がすくと云う。隙間がいやなら、棰上端をしゃくって、棰と裏板の接着面を少なくすればよいと言うと、その仕事は機械で製作できないから困ると言う。そういえば斗栱を組む場合、伝統的工法では、斗の上端の肘木の乗る面は、内部をしゃくるのが一般であったが、そういう手仕事は今はしない。斗の敷面と肘木のすくのを防ぐのはボルトでしめつけ、がんじ絡めでしばってしまおうとする。この場合、肘木の木目の流れをみて、どちらを上端にするかの考慮は全くない。折角の天然素材は、全く集成材としての扱いよりされていない。そして最後にはこの建物でステンレスの金物を何トン使用したと誇らしげにいう。木工事部分をかっちり隙間なしに組み堅めようとするのは、ビル建築内の内装工事の考え方としか思われない。内装工事の考え方が主流となると寺社建築については、困るのである。

私たちは、いつも伝統工法というけれども、それは決して古いものがよいとするのではない。今日まで1000年近い木工事の歴史の内で、歴代の大工たちが、前代の建物の工法を学び或いは改良を加え、もっともよき工法をさぐりあて、後世に伝えたものが伝統工法であり、それこそ何万という大工の知恵の結晶ともいうべきものを尊重しようとするのである。もっとも、古い建物でも、感心する程うまく手抜きした工法の建物があるが、それは今回はおくことにする。不思議なことには、こういった建物は近世の例によくみられる。建築工法のよくない伝統は、このあたりから今日につながってきたのかもしれない。今日寺社建築について、建築意匠・歴史・規矩術等に関するもの、また各種仕口継手に関する著書は、多数刊行されており、簡単に学ぶことが出来るが、先ほど述べたような、斗上端をすく手法とか、仕口に逃げをとる技法等については全く本から学ぶことは出来ない。私の場合は幸いにして文化財建造物の修理にかかわってきたおかげで見聞を拡げることが出来たが、一般の大工さんにとっては、熟練した棟梁等の指導をうけて会得する以外に方法はないのが実情であろう。

「名工にきく」といった表題の本をみると、名工たちがぽつりぽつりと、仕口の納まり等についての秘伝をもらしているが、誰かがこれを集大成すれば、それこそ立派な教科書になるのにとも思う。

しかし、一般の指導者といえども、その発想は内装建築の考え方であり、次項の「もの」でもふれるが、木材の縮みを考えてか、柱への横物の仕口は、胴着き仕口をさけ、安易な大入れとし、足らない処は金物で引っ張り組み固めようとするのである。

今日、屋根瓦の葺替えをする場合、瓦を一枚一枚剝ぎおろし、再

用瓦、不再用瓦を選別。再用材については棚に保管し葺上げに備えるより（文化財建造物の修理の場合は、当然のことながら瓦そのものを文化財とみて、できるだけ再用しようとする。）瓦を一括しておろして破棄し、新しい瓦で葺く方が経済的に有利となる。工事をいかに省力化するかが、施工者の運営の方針となる。したがって、木工事についても、可能な限り機械化を考える。棰等の曲線部分も又仕口についても機械加工とし、純粋の手加工は特別の場合以外は行わないようにし省力化をはかる。

このような時代において、寺社建築といっても伝統的工法にこだわるのは、一種の時代遅れと言われるかもしれない。継手についても、機械加工することを前提とした仕口が考えられている。

ただ伝統工法の知恵を、何故そのような工法にするかを考えてほしいと思うのである。寺社建築というのは、建物の性格上、大変な努力と、費用を伴う。したがって、他の建物より数倍の寿命を持つことを要求される。十年単位でなく百年単位で考えてほしいと思うのである。

「もの」についてふれよう。木工事の材料としては、特に化粧材については、加工のし易さ、強度及び木肌の美しさからみて、ひのきが最良と思われる。寺社建築の場合、前に述べたように部材木法が大きく、大径材で且つ長尺の材料にたよらざるを得ない。この場合特殊な材料ということで、単価も高くなり、又昔みたいに材木屋さんの土場に良材が大量に保管されているものから選択するというわけにはいかず、注文後、山から伐り出すということになり、乾燥した良材を求めるのは極めて困難な状況となってきた。この場合、施主のよほどの理解がないと、製材品を一皮むいて一年以上乾燥ということは困難となる。予算の関係から内地産材をやめ、外地産を使用する場合も事情は変わらない。工期に迫られ、充分の乾燥材でないものを涙をのんで使用することになる。建物引渡の時は、ぴちっと張られた床板が、何月か経っての完成式の時点で隙間を生じているのを見る時は、式場から帰りたくなることがある。ではどうするのか、集成材でこれをカバーしようとする。

昔から大工の言葉に「百年一分」というのがあった。つまり外気にさらされた木材は百年で約３耗磨耗するというのである。このことは塗装を施されていない建物部材ではつまり証されており、言いえて妙と思われる。この言葉を逆手にとれば、厚み６糎以上の天然材を外装に用いれば、計算上は2000年、実際は５・６百年は保持されることになる。ＲＣ造や鉄骨造の寺社建築の場合、この考えを活用し数棟の建物を仕上げたが、今後は構造材、化粧材と仕分けた木造の寺社建築を試みようと思っている。

寺社建築というのは、一種のモニュメントであるから、効をあせることなく、長年月をかけてじっくり仕上げると言う方法より手がないかも知れない。最近は、そのように施主の方に理解を求めているが、逆に工事監理の期間が長くなり、設計者としては、辛いこともある。

内地産ひのきが高価だといっても、それは無節のきれいな材料を求めるからであって、強度に支障がなければ節のある材料でよいとすれば単価は驚くばかり安価となる。宮崎県で奈良正倉院を現寸大で復原したが、柱径60糎、校木寸法30糎の材料すべて節ありとした。単価は安く予算的にうまく納まったが、出来上がりは案じる程の事もなく、却って節のあることが天然材として評価をうけることになった。実際古建築をみると、節のある材は、どんどん使われており、無地材にこだわるのは、材料のない今日、考えを改める時期にきているかもしれない。

以上、木工事にたいして述べさせてもらったが、最近古建築の現場案内をすると桧皮葺の質問をよく聞くので、桧皮葺について若干ふれておく。桧皮葺は言葉どおり桧の皮で葺くわけであるが、桧皮は立木のひのきの皮をそのままは使用できない。即ち一旦外側の粗皮を剝ぎ、その上で内から生長する新しい皮を剝いで使用材料とする。普通新しい皮が生長するのに７・８年かかる。桧皮の材料がないと説明すると、皆不思議そうな顔をする。日本中いたる処にひのきがあるのに何故と思うからであろう。桧皮は杉皮のようにどの木からもとれない。それように育てた木でなければならないからと言うと一応納得してくれる。

同じ植物性の屋根でも「こけら」葺は杉材があればそれを割るだけでなんとか需要にこたえられるが、桧皮の場合は限定された自然材であるだけに困る。

普通寺社の新築工事の場合は、法第22条の規定もあり、特別な場合以外は桧皮葺とはしない。文化財建造物の場合は、前代の仕様を踏襲しなければならず、もの及びひとについて種々苦労しておられることと思う。

桧皮葺工事の未来については、私は永続性はあると思うものの、楽観できないものを感じる。

（おおもり　けんじ）

【各論】

数寄屋建築

吉江　勝郎＋日向　進
福井工業大学建設工学科 助教授　　京都工芸繊維大学造形工学科 教授

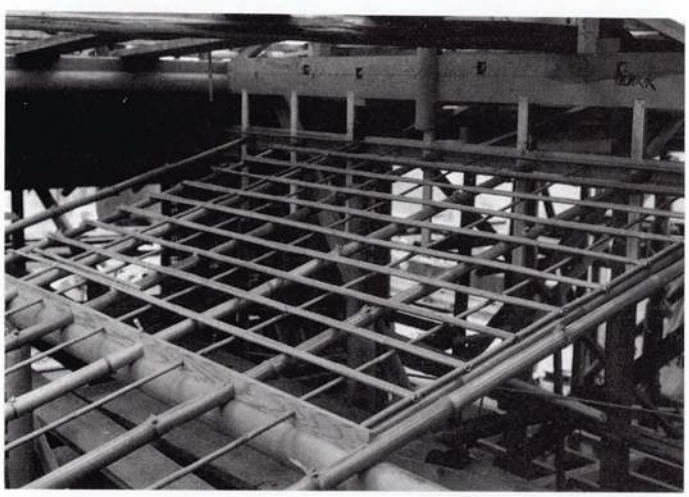
“草”の建築技術の数寄屋

日本建築に用いられる用材は、製材した角材の「角物」と自然の丸太に代表される「丸もの」とに大別することができる。技術にも“真・行・草”があり、堂宮の技術を“真”とすれば、茶室のような「丸もの」で造る丸太普請は、まさに“草”の技術であるといえる。

数寄屋とは丸太普請、すなわち丸太を使う建築のことである。丸太を使う技術が数寄屋普請の特色といってよい。そのような技術をデザインと結びつけて育て上げたのが茶の湯の建築で、数寄屋普請の主流は茶の湯普請である。数寄屋は造形の基調から、おのずと軽快、瀟洒な佇まいが形成されねばならない。書院とか広間においては、軽快でかつ開放的な構成が要求される。すなわち屋根の勾配緩く、軒は深く、柱は細い。そのため壁厚は薄く、外に現われない部分の構成に格別の工夫を凝らさねばならないのが数寄屋の特性である。その特性は、“草”の技術を発展させ、茶の湯の建築において技術は高度なものとして成熟をみ、今日、木造建築技術の粋といわれるまでに発達を遂げてきたのである。

数寄屋建築技術の特色

数寄屋普請の特色は先述のように丸太造りにある。そして細い丸太に薄い壁を付けなければならない。面皮柱の場合は上までつらがあって「散り」もはっきりするが、丸太柱であると壁が被ってくる。しかし散りが適当に保たれないと格好が悪い。２寸６分の柱で内外に７分の散りを見れば壁厚は１寸２分となる。このような薄い壁を貫で支え、貫で軸部を完全に固めてしまうのが茶室の基本的構造である。壁厚を薄くするために、竪貫は横貫に重ねることなく縦横に組み、小舞は貫の間に仕込む切壁下地とする。そして荒壁は貫の厚さのなかで納まるように塗り上げる。こうした強固な貫仕舞や切壁工法は、近代になって発達したと推測される高度な技術である。工匠たちはこの貫にも狂いを生じないよう材料を吟味し、鋸で「おさ」を付け、面を取るなどして壁土が馴染みやすくする。



丸太で組み立てる仕事には、角材の普請とはまた違った特有の技巧がある。丸太の場合は、角材のように表面を平滑に削り上げる苦心は少ない代りに、皮肌の持味を生かし、木地のもつ自然な味わいを引き立たせる木造り加工が生命である。角材に比べて丸太普請のむずかしさは、不統一な丸みをもつ丸太と丸太を組み合わせるところにある。丸太同士を縄で結える原始的な方法はまだ丸太普請としての技術以前のもので、角材と同様に、丸太と丸太を合理的な仕口で緊結していくところに、丸太普請特有の建築技術がある。

丸太は人工的に製材された角材と異なり、自然のもので、断面は変形した円形をし、本(根)より末(先)の方が細くなって、大なり小なり曲りを帯びている。そういう不均一性の材をもって、水平と垂直の骨組を形成しなければならない。すなわち、柱に対し落掛、鴨居、廻縁、そして下げ束といった部材は、角材で組み立てられるときと同様、相互の寸法をうまく取り合わせていくのであるが、自然の丸太であるところに、寸法だけで片付かない取り合わせの妙技が必要となる。そして柱をめぐる構成材の取り付く微妙なふかし加減、そこに生ずる散りの凹凸加減が、座敷の意匠を浮き立たせるのである。また部材の取り付き方も、丸太と角、丸太と丸太がT字形に出会う時、ごく自然に交わるように取り付けねばならない。そのため柱に水平材は刳り付けるのである。丸太の場合、刳付けが原則で、大入れにしたのでは両者の取り付きが死んでしまう。あくまでも自然な姿に見えるように、二つの部材の質や太さ細さの加減を見合わせて加工するのである。

落掛や鴨居は丸太柱に胴付に納めるのを通例とする。柱の丸みと太さに対し、適切な見込寸法でないと柱の程よい位置に取り付けることが出来ない。見込寸法が大きくて切面の木口が余り多く見えるのも不自然なものであるし、柱へのかぶりが少ないのも不安定に見える。刳付けの技法とともに、部材相互の取り合わせ方には、相当の熟練と心入れが必要である。

丸太普請の中で一番基本の作業は、柱作りである。本と末と太さの違う曲りのある丸太に、壁が付き、戸襖が建て付き、また框、落掛、鴨居などが取り付き、畳を敷き込むのに、どうしても丸柱に平面的なつらが必要となる。必要に応じて適切なつらを施すことによって、一般的素材としての丸太が、建築を組み立てる柱に生まれ変わるのである。また、つら付けは、柱の表情を生む意匠的要素でもある。

このような丸太の柱作りには、幾何学的な技術に加えて、彫塑的な感覚と造形力が必要である。

こうした丸太普請ならではの丸太加工のこまやかな技法を通じ、茶の湯の心意気を建物の随所に注入することになるのである。それだけに、工匠の洗練された感性と技倆に創意工夫を凝らすことが求められる。そこに“草”の建築技術の極みがあるのである。

数寄屋建築の隆盛と現代

数寄屋普請が円熟し、技術的にも最高潮に達したのは、明治から大正、昭和前期にかけてであった。京都南禅寺一帯に営まれた近代の山荘にも、そうした数寄屋の精華の様相を窺い知ることができる。たとえば、市田株式会社の創立者市田弥一郎の営んだ「対龍山荘」（明治39年、棟梁島田藤吉）、塚本与三次の営んだ「清流亭」（大正初年頃、棟梁上坂浅次郎）、野村財閥を確立した実業家野村得七（得庵）の営んだ野村碧雲荘（昭和３年、棟梁北村捨次郎）などが挙げられる。茶人であり、普請を好む数寄者であった当時の施主たちは、茶の湯全般に高い見識をもち、茶の湯をたんなる趣味以上に生活の支柱として吸収している人たちであった。茶の湯だけでなく、彼らはまた建築や庭についてもなかなかに造詣を深めていた。とくに普請の経験の豊かな人は、材料のことから大工仕事のことまでよく知っていた。毎日、槌の音を耳にしないでは淋しくていられない類いの人たちでもあった。

こうした山荘の主人に代表される当時の施主たちの溢れるような趣味や教養、意匠心等によって職人たちの作風や技術はますます磨かれ、極められていった。当時の施主は、茶匠にとっても、工匠にとっても、手ごたえのある相手であった。このような施主の存在があり、そこで請われた数寄屋普請の質の高さが、技術の水準を高め、伝統を育てる上に力があったことを、知る必要があろう。ほんとうに数寄屋普請にかけての玄人らしい施主、そして優れた茶匠、工匠が存在していたのである。

茶の湯に相当な見識をもつ施主の相談相手とならなければならない茶匠は、施主の抱く構想とか希望を、茶の湯の立場から取りまとめ、秩序を与え、筋の通った使い勝手や意匠を考案する。茶匠が依頼される内容は茶室や露地に限らず、それを含む一画、さらに屋敷全体に及ぶこともあった。茶匠の源泉は茶の湯そのものであって、茶の湯の礼儀作法に即した使い方、茶の湯の心に合った構成意匠を展開するものであった。実践では間取りや立面図の作成だけでなく、建築的技術の領域にまで理解が及ばねばならなかった。そして、一分一厘の違いを選択することを迫られる茶匠にとって、やはり実物を通じて眼を鋭く鍛練することが、一番必要であったにちがいない。こうした建築の基礎的な知識と感覚を体得したうえで、創作の修練に進んでいったのである。

茶匠の創意を支えたのが、工匠の技術である。千利休や古田織部らの時代以来、茶匠が創作能力を培ううえにも工匠の協力が必要であった。とりわけ、構造上の問題には工匠の技術協力が必要であった。双方の技術と感覚は、茶の湯の世界で互いに交わらなければならない。そこに、数寄屋師という工匠の分野を発生させたのである。数寄屋普請の専門ではないが、堂宮とか町家の仕事の傍ら、この方もこなすという器用人が相当いた京大工の中にあって、昔の棟梁と現代のアーキテクトを複合したような立場の、少数の数寄屋師が数寄屋普請の技術的水準を維持し、高めてきた事実がある。

京都では、江戸時代末からその名を知られ、幾代か続いた木村清兵衛はよく知られている。数寄屋師は、茶匠の好みを受けとめ、それを実際的な設計に具体化し、建築的に優れた造形にまとめ上げるアーキテクト的立場の一方で、材料の選定から、職人の仕事のすべての工程の監督に当たり、時には自ら工具を手にして技術を工夫した。輩下の職人の多くは茶の稽古もして茶の湯の雰囲気になじませ、普請に心入れの大切なことを認識させた。作業場には、他の職場とは全く異なる雰囲気が漂っていた。そこには、驚くべき早熟な技術の上昇を可能とした父祖代々の技術経験の蓄積が背景にあったのである。工房には、数寄屋普請のあらゆる精緻な技術や手法が用意され、実行されていた。そうした数寄屋師の造形眼と技術は、茶匠との協同以外の仕事にも展開され、茶匠の代行も可能とした。南禅寺一帯に営まれた近代の山荘をはじめ、幾多の数寄屋造の邸宅に数寄屋の全盛をもたらしたのである。しかし、茶匠、工匠の権威ともども、戦中戦後の社会では顧みられなくなり、最も充実した模範的な彼の工房も、戦いの激化とともに閉鎖消滅したままとなっている。

今では、ここに述べたような茶匠や工匠の姿は、もう見当たらない。茶道界も建築界も大きく変化し、茶匠や工匠のあり方も変貌せざるを得なくなった。茶の湯の大衆化は茶匠にも新たな使命を課し、かつての職能の維持を困難にし、施主の気質も変わった。数寄屋普請を志す技術者はけっして少なくないが、高度な水準を維持し得たかつての数寄屋師は影をひそめた。技術を啓発する茶匠は後退しているし、歯の立たないような施主もいなくなって、技術者には実に気楽で安易な時代がめぐってきた。

高い伝統的な技術を維持し、発展させていくためには、現在の建築界はあまりにも困難な問題と障害をかかえている。経済性の追求は、工期短縮による経費削減をめざし、金物の多用、浅い枘穴にボンドの併用など、合理化、効率化と称する技術の簡略化が現代の木造建築技術の理念となっているかに見える。また明治・大正・昭和戦前の高級普請が醸成してきた美材主義は、銘木を精選し、素材の持味と美しさを競い合う風潮のなかで、銘木の生産も上昇した。大工技術もそういう銘木の生かし方に応じる方向へ向い、“草”の技術の低迷をもたらし、今日に至っている。美材主義は用材の大衆化のもと、木質材料（化粧合板）の大量使用をもたらし、ムク材とは異なる美意識をもつくった。

古典の茶室に使われている丸太には銘木に相当する材は少ない。質素な丸太が使われ、それを生かすべく創意工夫された技術によって妙味のある茶室となっていることを見ると、伝統的な本来の技法の復活が工匠の世界に待ち望まれる。中村昌生博士が指摘されるように、「深い伝統の思索にもとづく茶匠の創意と、父祖の磨き上げてきた技術の高さに、改めて跪くという謙虚さがなくてはならない。そこから伝統を受け継ぐ現代の技術の摸索と創造の境地がひらける」ところに、数寄屋建築の未来が期待できよう。

（よしえ　かつろう）
（ひゅうが　すすむ）

［参考文献］
1）井口海仙・久田宗也・中村昌生・楽吉左衛門『茶の湯』保育社　1978.12
2）中村昌生『茶苑の意匠』毎日新聞社　1983.7
3）中村昌生『数寄の工匠 京都』淡交社　1986.6
4）中村昌生『数寄屋邸宅集成 第３巻 京の別業』毎日新聞社　1988.9

【各論】

京町家の流転

望月　秀祐
京町家再生研究会 会長

地震のまち・京都

いまから約八百十年前、文治元年（1185）7月に発生した地震（マグニチュード7.4）は京都東山（五条付近）を震源地とした京都にとっては恐るべき巨大地震であった。平成7年1月17日の兵庫県南部地震（マグニチュード7.2）の2倍のエネルギーであった。東山を南北に走る花折断層の南端に発生した岩盤の破砕によるものと思われる。

その年の3月、壇ノ浦の合戦で平家の軍が源氏の軍に潰滅させられた大異変の後だけに、京洛の人々はこの大地震を平家の怨霊による祟りではないかと恐れられた。

この大地震により洛東一帯の堂塔はことごとく倒壊したと伝えられる。特に百年前の1084年に建立された法勝寺（現在の左京区岡崎の市立動物園の位置）の八角九重の大塔（高さ82メートル）が中間階の4層から上部がくずれ落ち、正にこの世の終りのような惨状であったという。

しかし、鴨川を隔てた西側の洛中の町家がどのように罹災したか記録が定かでないが、ほとんどの町家が倒潰したものと推定される。

板葺き屋根の京町家

中世までの平安京では、寺院や城の屋根は瓦葺き、神社や公家の屋敷の屋根は桧皮葺きであったが、町家は板葺きの粗末なものであった。そのうえ応仁の乱（1467～77）で平安京が焦土と化し、公家を中心とした上（上京）の町と、商工業の町家が並んだ下（下京）の町に二分された。

戦国時代の京都を描いた洛中洛外図屏風のなかでも上杉本は最もすぐれている。上杉本にみる町並みは美しく、屋根は木板が整然と貼りつめられ、そのうえ細割りの竹を格子状に組み、風で飛ばぬように石を置いている。戦国時代の地方の武将は「京の町づくりをまねる」ことが権力を維持するうえで必要であると考えられ、各地で藁葺き屋根の町並みが京都の石置き板葺き屋根に似せた町並みに改造された。

しかし、永録2年（1559）、イエズス会の司祭ガスパール・ヴィレラは、都心に近い四条西洞院に一軒の家を借りたが、今にも倒れそうな堀っ立て小屋で、壁は細い葦で囲っただけ、屋根は藁で葺いてあったが、雨が降れば漏れる馬小屋同然のひどいものであった。当時の貧しい町家はこの程度のものであったであろう。

現在の四条西洞院付近は商業地として大きく発展している。**写真1**はその付近に明治期に建てられた町家（鉄問屋）をそのまま生かして、数年前に京呉服店に再生された建物である。

秀吉の三大都市改造

天正15年（1587）、豊臣秀吉は上京の大内裏跡に壮麗な聚楽第（じょらくだい）を造営し武威を誇示した。その3年後の天正18年、天下統一なるや、直ちに三つの都市改造をはじめた。まず、方一町の街区の多くを東西に二分してタテに道路を割り込ませ町家づくりを容易にした。さらに洛中の大きな境内地をもつ寺を東の寺町、北の寺之内に強制移転させ、町家づくりの発展を促がした。

最後に、天正19年（1591）、秀吉は鴨川の西側（現河原町通の西側）や右京の紙屋川の東側の京洛の周辺地に土堤を急ぎ築造させた。世にいう「お土居」である。この「お土居」の築造は河川の氾らんを防ぐことに役立ち、急速な市街化をもたらした。

この三大都市改造により、応仁の乱後、上の町と下の町でわずか3万ぐらいの人口の都市が、30万の人口を擁する世界有数の大都市へ発展していった。

慶長大地震

慶長元年（1596）9月5日、4百年ぶりに京都に大地震が襲った。震源地は東大阪（マグニチュード7.5）であったので伏見に大きな被害を与え、秀吉が築いた伏見城が大破した。花折・金剛断層線が動いたとされている。

この大地震による被害の甚大さから、以後屋根に瓦を葺くことを禁ずる官布がされた。しかし、大地震は火事や水害と違って、その発生間隔が長いため地震のことが忘れられて、寛永（1624）のころには、防火を優先して町家に瓦が葺かれはじめた。本格的に屋根が瓦葺きになるのは宝永の大火（1708）以降のことである。慶長大地震（1596）から4百年経った現在、瓦葺きの京町家は一度も巨大地震の洗礼を受けていない。

どんどん焼け

いまから約130年前、元治元年（1864）7月19日午前7時、御所を厳重に警護する薩摩・会津の両藩を主力とする薩幕連合軍と、秘かに嵯峨天竜寺の陣を発し突如御所前に姿を現わし御所へ突入しようとした長州藩兵との間で、蛤御門前を中心に激しい戦闘がはじまった。世にいう「蛤御門の変」「禁門の変」である。双方が大砲を据えて砲撃したので「鉄砲焼け」ともいわれた。

この市街戦のため、兵火は北は御所付近から南は現在のＪＲ京都駅付近まで、西は堀川から東は河原町までが一面の火の海となった。焼失家屋3万7千戸、焼失土蔵1500というまれにみる大火となったので「どんどん焼け」ともいわれた。したがって、現在の中京区・



写真１　四条西洞院の再生京町家



写真２　下京区の文化財指定の京町家

下京区の町家はすべて焼失したので、洛中のこの区域内の町家で築後130年を超えるものはない。しかし、東山区や上京区（西陣）はそのときの戦火を受けていないので、築後130年を超える古い町家はいまでも残っている。

平成維新

平成３年(1991)、京都の景観は幕末ともいえる激動の時期を迎えた。まず、１月に市の新しいまちづくり試案の発表、続いて京都ホテル改築（高さ60メートル）の許可、京都駅ビル改築設計競技で高さ59.8メートル案の採用決定、京都佛教会の超高層ビル（京都ホテル、京都駅）の大反対運動、市まちづくり審議会の発足、12月には京都ホテルの強行着工となった。

平成４年（1992)、市まちづくり審議会から最終答申書が出され、景観対策を含む市の新しいまちづくり方針が示された。92年はまさに京都の景観にとって平成維新の年であった。

この年の７月17日、祇園祭の山鉾巡行の日を選んで、私たち「京町家再生研究会」が発足した。構成は若手の学者を中心とした研究スタッフ、計画・設計を担当する活動スタッフ、研究に参画する有識者による協力スタッフの三本立てで、20数人の少数（現在は約80人）であった。

京町家再生研究会発足の檄文

千年の古都・京都は、各時代ごとに公家、社寺、町衆の美意識が融合して優れた文化を形づくってきた。なかでも、まちの根底を支えたのは、伝統産業を中心として商いをしてきた町衆の力である。そこには商いと住まいが見事に調和した町家があり、町衆が結束した町衆町があった。

しかし、戦後の京都は、戦災を免れた貴重な伝統的町家が軒並みに壊され、京都らしさを象徴する町家町が無残な姿を呈するに至った。

このように、いま京都のまちは、まちづくりの重大な転換期に立っている。市も市民も本気になってまちづくりの見直しを考えるようになった。

私たち京都の建築に携わる有志は、この京都の無残な現状を憂え、急ぎ相寄り、意見を交わした。その結果、京を特色あるまちとして残していくためには、まちの近代化と京町家の再生、そして両者の共生が絶対必要であるとの結論に達した。

私たちは、京町家を保存し、修復し、または近代町家化すること―京町家再生―の担い手となることを決意した。そして、この会は単に調査研究にとどまらず、実地に実践することを目的とする。

京町家の現状

昭和63年の住宅統計調査によると、京都市における住宅総数は51万6320戸、そのうち木造住宅は24万9950戸で全体の48.4パーセントを占めている。また、建築時期別住宅数について、終戦前に建てられた住宅は８万2160戸で、全体宅戸数の15.9パーセントを占めている。

京町家の伝統的様式を残している町家は7224戸で意外と少ない。そのうち市文化財指定登録がされている町家は指定有形文化財が14件、登録有形文化財が７件である。このうち伝統的な京町家はわずか５件である。

町家再生の実践と課題

私たちの「京町家再生研究会」は発足して５年を経ている。その間、月例の研究会・見学会を休まず続けている。そのほか活動スタッフが中心になって、町家再生についての相談を受け、町家の保存・修復・用途転用などの他に町家保存を条件とする売却のあっせんを実践している。その成果は成功するものもあれば、不成功もあり、苦しみに耐えながらＮＰＯ（非営利組織）活動を続けている。実践をしてはじめて町家再生の方策が判ってくるものと考えている。それでも町家再生を阻む問題点が多い。

第一には、建築基準法上、京町家の外壁・軒裏の木造仕上げが許されないので、増改築をしようとすると京町家の特色ある建築様式が残せない。

第二には、文化財として価値がある大きな京町家は相続するとき、税制上財産の平等化を狙って過大な相続税を支払う必要が生じ、多くの京町家はこわして処分することになってしまう。

第三には、京町家を文化財として残そうと努力することが、京町家の住み手の意向を無視するおそれがある。物を残すことも大切であるが心の方がもっと大切であることが判ってきた。

第四には、文化財指定があると修繕費助成や税制上の減額措置があるが、指定の取消しが難しいこと、公的買上げのみちがないことから、文化財指定町家の住み手が困っている場合が多い。

登録有形文化財の京町家（**写真２**）の住み手が、公的制度の不備を嘆きながらも、私たちの研究会活動に参加した結果、文化財指定解除の請願を止めて、みずから町家を守ることを決意された成功例もある。

京町家生再の道はまだまだ遠い。しかし、努力を積み上げればその道は必ず開けていくと信じている。

（もちづき　ひですけ）

【各論】

遺跡における建物の復元

細見　啓三
(財)文化財建造物保存技術協会参与　一級建築士事務所『歴史建築舎』主宰

歴史的痕跡ともいえる遺跡を保存し、かつその利用と活用とをはかるために、発掘調査等によって判明した建物跡にかつて存在していた建物を直接復元建設するという方法がある。こうすることによって往時の姿を視覚的にとらえることができ、そのことが遺跡への理解度も深められるだろうとの試みである。

しかし、一概に遺跡といっても、縄文・弥生の建物跡をはじめ、古代寺院から近世城館まで並べると、年代的にも長期間にわたるしまたその対象となる建物の種類も多岐にわたる。が、復元という行為によって原風景を再現しようとする意図はそれほどわかるものではない。ここでは、今秋竣工予定の平城宮朱雀門をとりあげ、そこから派生する問題点をいくつか抽出してみることとする。

いうまでもなく朱雀門は、奈良時代を通じて国の中心であった平城宮の正門にあたり、ここで外国使節の送迎や、天皇の出御のもとに朝賀の儀が行なわれたところで、平城宮の中でも大極殿同様最重要な位置にあった建物である。昭和38・39年の発掘調査によって、門の規模は桁行５間、梁間２間(各柱間17尺)あり、門の左右には平城宮をとり囲む築地がとりついていたことなどが判明した。翌40年これら発掘調査の知見によって縮尺10分の１の復原模型がつくられ、その後復元のための調査研究が意匠・構造の両面から検討されていたが、平成元年にいたり基壇の復元工事を、そして平成５年からは建物本体の復原工事をはじめるまでに進んでいったのであった。

造営記録が皆無に等しい古代建築にあって、もっとも重要なのは発掘調査で得られた知見であることはいうまでもない。この朱雀門でも、建築の規模をはじめ、基壇の大きさや礎石の形態、屋根瓦の存在とその形式などがあきらかとなり、復元の手がかりとしては先ずこれらにいかに語らせるということからはじまるが、残念ながら当然それには限界があり、いかに既知のものから未知の部分を導き出すかが次の段階であった。幸いなことに現在奈良時代の建立になる建物が30棟残っており、これらが未知―推定部分―への有力な示唆を与えてくれた。また平安宮を描く絵巻物の存在も大きい。

これらを復元資料としながら幾通りとなく復元図を重ね合せて順次実施案へ迫るという過程をふむ。この結果、意匠面については比較的早い段階で固まったものの、構造面は相当の迂余曲折を余儀なくされた。それは古代的架構による構造そのものではどうしても構造的に脆弱な部分があらわれ、それをいかに克服するかという問題であった。当初は柱の中に鉄パイプを通すという思い切った案も検討されたが、やはり純木造で復元すべきだとの当初理念が再確認されてからは、この鉄骨併用案は潰え、純木造プラス木材による補強がもっぱらの検討課題となった。この結果実施案としては、奈良時代の朱雀門が現在まで存続していたとすれば、それまでにどのような補強がなされていたのであろうかという発想から、例えば我国最古―ひいては世界最古―の木造建築である法隆寺金堂・中門での補強方法、特に見え隠れとなる小屋組部分における束や貫の補加材投入による慶長時の補強や、軒の垂下を防ぐために室町時代から多用されることになる桔木（はねぎ）の採用等、中世・近世で新しく開発された工法をここにとり入れることで一応の案がまとめられた。しかし、それはあくまでも古代の意匠や構造に変更は加えない上でという条件がついてのことである。

次に建築基準法との対応の問題である。指定文化財建造物は法３条によって適用除外とされているが、たとえそれがかつては存在し



写真１　復元建設中の平城宮朱雀門



写真２　同左

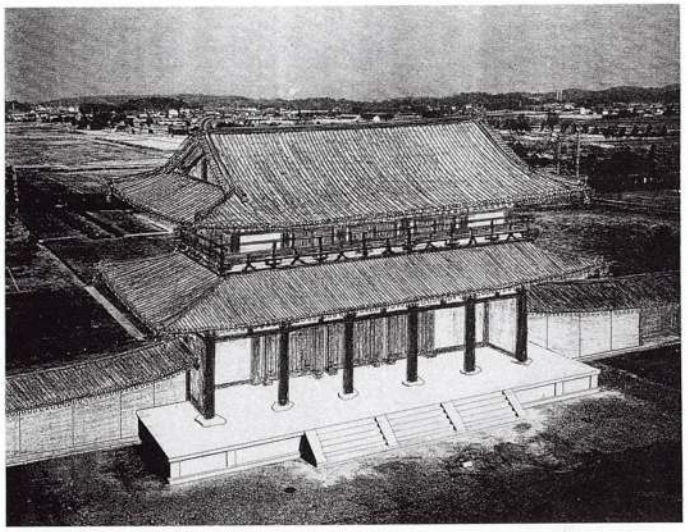
ていた建物であっても新たな復元となると新築の扱いをうけ、法のもとにおかれる。その結果、法21条にいう木造としてはならない大規模建築物となり、これを建てようとすると法38条による建設大臣の認定が必要となる。当朱雀門においては結果的には、しかるべき補強システムを確立した上、あらためて構造計算を行い安全性を確認ののち大臣認定を受けるにいたった。したがって、ここでは朱雀門と同じかあるいはそれより大規模の現存二重門が在来工法のまま何百年もの長期間厳然と遺存しているという現実、いわゆる経験則はまったく考慮されていないことになる。また、軒その他軸部以外の部分では在来木構造の手法を残すこととともなった。

・

先にあくまでも純木造の理念を尊重するとの基本方針をのべたが、実際建設するとなるとはたしてこれだけの木材が入手できるのかどうか当初は一抹の不安があったことはいなめない。化粧材が590m³、野物材が360m³、しかも直径72cmの柱18本をはじめとするいわゆる大径木・長尺物が必要である。幸いにして今回は化粧材は地元吉野を中心とした内地桧、野物材は青森ヒバときめ、それぞれ必要量が確保できたが、今後同じような条件でこれだけの木材がまかなえるかどうかの保障はない。長期的見通しを立てた上での植林計画が望まれるところである。

一方、技術的な面については現在のところではほとんどが解決できるものとの思いをもっている。それは、設計にあたっては明治30年以来100年におよぶ文化財としての歴史的建造物の修理経験やその記録が、今や我々にとっては何物にもかえ難い大きな財産として蓄積されていることがあげられるし、また施工にあたっては本格的木造建築としての神社・寺院等の新築例もわずかではあるが増加のきざしが見えたことによる。すなわち、前者からは今や特定部分の様式差や継手・仕口等の細部形式にいたるまで、各時代による分類も可能であり、建物復元の時代設定さえきまればそれなりに対応することができるし、また後者そからは仕事の増加量が人員の確保と育成とをうながし、それが伝統的木造建築の技術伝承にもつながるという循環作用を生み出す好結果となるに違いないからである。現在あらゆる現業分野での後継者不足が呼ばれている中、少なくとも歴史的な木造建築に限っては、発注される仕事量が即技術伝承につながるものとの考え方である。要は恒常的な仕事量がいかに世に送り出されるかにかかっているといえよう。

最後に、今回の朱雀門復元工事に際してのこだわりを一つ紹介しよう。それは化粧材の表面を仕上げるにあたって、すべて古代の工具であるヤリカンナをもちいたことである。ヤリカンナは現在の台カンナ以前の木材仕上げ用工具で、これまで古墳からの出土品や正倉院の伝世品、または中世の絵巻物等で知られていたのを、法隆寺の昭和大修理のときこれらを参考として新たに造られたいわば昭和復活工具の一つである。平城宮の用材の多くは伊賀・甲賀の山から伐採したものといわれる。各現地の山作所で半製品に仕立て、木津川を流して陸上げした後平城宮で規定寸法に再調整が行なわれたものと思われる。この時の調整用工具を使用順に並べれば、ナタ→チョーナ→ヤリカンナということになる。現今では電動諸工具の発達によってこのうちの前2工程、ナタ→チョーナの部分は省かれることから、機械できれいにした上でのヤリカンナ仕上げということになり、本来の意義は薄れたものの、それでも古代の工人の精神はヤリカンナを使うことによって保たれるとの思いは強い。



平城宮朱雀門完成予想図　奈良国立文化財研究所提供

・

以上、平城宮朱雀門を通じ遺跡における建物復元の様相をみてきた。実際の建物を時に推定という不安定な要素を加味しながら設計し、かつ建設するということは、復元図段階でのケシゴムすなわち修正行為が建設段階ではやりづらいだけに、すべてにわたって慎重かつ綿密な計画のもとで行なわれなければならないのはもちろんのこと、表現できる復元案は唯一つに限られるという制約もある。要は当時の人間になりきって、あくまでも当時の建築を忠実に再現することに務めるという一言に尽きるのではないかとの自戒の弁でこの稿をおわる。

（ほそみ　けいぞう）

【各論】

伝統的造園技術の伝承と今後の課題

山田　昌次
㈳日本庭園協会理事　花豊造園株式会社代表取締役

はじめに

伝統的造園技術を論ずるには先ず、造園の歴史をひもといて、その成り立ちから勉強する必要がある。

長い歴史の中で、造園の技術はその時代の流れを背景に発展し、ある時は停滞しある時は進化して今日の造園があるわけである。

ここでは紙面の都合もあって、とうてい、全部を書きつくすことができないので、日本庭園の成り立ちからはじめて、庭園史上、庭園技術の発展に名を残した作庭家のことや造園技術の伝承に大きく貢献してきた庭園の秘伝書の紹介、それに造園材料として欠かせない灯篭のことなどに触れて、伝統的庭園の技術をいかに後世に伝え発展させていくか、を模索したいと思う。

日本庭園の成り立ち

日本に庭園がつくられたのは、文献に出てくるものでは620年前後で、蘇我馬子の庭園が最も古いとされる。

馬子は大和の飛鳥川のほとりに家を建て池をうがち、島をつくったと伝えられ、その当時の人々はその庭に大変興味をもち「島の大臣」というニックネームをつけたほどであった。

島は当時、庭園のことを意味し、このことは日本書記や万葉集に出てくるのである。

その後、奈良時代に入って平城京に多くの庭園がつくられるのであるが、その主なデザインは「海の風景」であった。池を堀り庭石を組み、白砂を敷いて海の風景を表現したという。

このように白砂を庭に敷く手法はその後、今日まで庭園美の重要な要素の１つとして受け継がれているのである。

これらの手法を用いた代表的なものに、橘諸兄の庭園（760年頃）がある。これは日本庭園の基本的な構成が、この時代にすでにでき上がっていたことを意味し、やがて築山池泉式庭園として発達していく。

794年、京都に遷都されて平安時代に入ると、庭園は１段と発展し、日本庭園として確立する。

そもそも、京都に遷都された理由として、①交通、水運に便利、②山紫水明の景勝地、などがあげられる。一方、洗練された庭園が発達した理由として、水が豊かで美しい山並にすぐれ、さらに森や池、川などに恵まれた良好な自然環境をもっていたからである。

この美しい自然環境は庭石・庭木・砂など、すばらしい庭園材料を大量に産出し、さらには変化に富んだ地形や山並みは、借景として巧みに利用されることとなり、1000年の都の歴史とともに、他に類を見ない庭園技術が発展し、継承されることとなった。

平安時代前期は、まだ大陸からの渡来人に造園技術を学んでいたと思われる。例えば嵯峨大覚寺に残る名古曽の滝は、嵯峨天皇の御世の承和元年（834年）に完成したものと考えられるが、この滝の岩組みは百済川成（782年～852年）と伝えられ、洞庭湖を模してつくられた大沢の池の石組みは、巨勢金岡が腕をふるい、石を立てたと伝えられる。

このことは「山家集」に西行法師が「大覚寺の金岡が立てたる石をみて」と題し、「庭の石に目立つる人もなからまし廉ある様に立てしおかずば」と詠んでいることからも渡来人の活躍が明らかで、平安時代の文化人の間でも庭石の扱かい方がうまく評判であったことがわかる。

平安時代も中・後期に入ると、平安貴族の間に日本人の手と技術による建築と仏像づくりと庭づくりが最もぜい沢な趣味として流行する。例えば、藤原道長の平等院、藤原頼通の高陽院・藤原摂関家の東三条殿・浄瑠璃寺などである。平安時代は、これら建築と共に最も庭園技術が発達した時代で、寝殿庭園といわれている。

この寝殿庭園は、京都の自然景勝地に流れていた水脈や湧水、それに池沼、森などが大いに利用され、造園に役立つのである。また、京都の地形は北から南に向って低く、遣水は北から南へ流れ、寝殿造りの建物の近くを浅く、さわやかな水の流れる音をきき、夏には水に涼を求め、時には歌会を楽しんだのである。

これら寝殿造建築と寝殿庭園の関係を美しく描かれているものに「山水図屏風絵」神護寺蔵があり、遣水を美しく描いたものに「北野天神縁起絵巻」がある。

歴史上の作庭家について

先に述べたように平安前期までは渡来人による作庭が目立ったが平安中後期に入ると、平安貴族の知識人の中から庭園愛好家が出はじめる。その１人が橘俊綱である。

彼は藤原頼通の庶子と伝えられ、子供の頃から父・頼道に伴なわれて造園工事の現場を見聞し、長年にわたって近畿一円の自然風景の景勝地を見て歩いた経験に加え、その時代の絵師や彫刻家たちとの交友などの影響もあって、芸術的な表現が抜群であったといわれる。

例えば、遣水（**写真１**）や池を主体とした寝殿庭園では、橋が重要な景観の要素となるので朱塗りの勾欄橋（**写真２**）や石橋のかけ方を考案し、平地や傾斜地に石を配置することは、すでに枯山水様と名づけている。

これらの作庭経験をまとめ上げ、後世のために作庭秘伝書、「作庭記」を書き残したといわれている。

その後、鎌倉時代のはじめ頃、僧侶の中から庭園をつくることを半ば、専門とする人たちが現われた。これが「石立僧」といわれる人達である。徳大寺法眼静意や伊勢房林賢などがそうであるが、彼等は仁和寺に伝わる庭造りの秘伝書を「山水並野形図」としてまとめあげ、後世に引き継いでいる。

鎌倉時代の末期頃に、この石立僧の中でも作庭家として第一人者といわれる人、夢窓国師（疎石）（**図1**）が現われた。国師は当初、むしろ建築の造営を専門としていたが、後醍醐天皇の要請を受けて京都へきてから作庭家として傑出した技量を発揮し、天竜寺、西芳寺などの庭園を残している。後に国師の名をつけた秘伝書が多数出版される。

この夢窓国師を頂点として、石立僧は約300年余りの間、作庭活動を行ない、日本庭園の発達に大きく寄与してきたが、やがて15世紀になると、山水河原者が抬頭してきて、石立僧を圧倒する。

山水河原者は庭者ともいわれたが、室町時代にその中から一時代を劃す作庭の名手「善阿弥」とその孫、又四郎が現われる。この2人は人々よりもよく努力して技術を磨き、作庭に関する故事来歴を勉強し、学徳を修め、沈滞気味であった貴族趣味の庭園界に庶民性の活力を吹き込み、庭に力強さを与えた功績は大きい。

彼は大きな池を造り、巨石を組む他、小石小木を巧みに扱った小泉水の「残山剰水」的な景観をつくり出すことなども得意とした。

彼らはその才能を認められ、将軍足利義政の寵愛を受けて、善阿弥が97才で没するまで数多くの庭園を残している。鹿苑寺や興福寺の大乗院門跡の庭園などがそうである。

これらの手法、作庭法は今日まで脈々と伝えられているが、このあとも桃山時代から江戸期の賢庭、江戸時代の小堀遠州、明治大正時代の小川治兵衛など、傑出した造園家が活躍し、その伝統的技術が連綿として今に受け継がれているのである。



図1　夢窓国師作庭図（築山庭造伝）

庭園材料・石灯篭について

京都の風土は、洗練された庭園をつくり出すのに樹木をはじめ、庭石、石造美術、など庭園材料として豊富に供給されてきた。

京都近郊の鞍馬石、貴船石、鴨川真黒石、白川の御影石などである。のちに室町時代には禅宗の自然観の影響を受けて、石庭や枯山水などの石組に庭石類が活躍するのであるが、ここでは石灯篭について述べてみたい。

日本庭園で使用される石灯篭は2種類あって、1つは社寺の献灯であり、もう1つは庭園用としてつくられる庭灯篭である。平安時



写真1　大覚寺。名古曽の滝からの遺水の復元



写真2　旧大乗院庭園。朱塗りの勾欄橋

代には浄土式庭園が発達し、その要素として仏堂前に池が掘られ、そこには灯篭が置かれるようになった。現存するものとして例えば平等院阿弥陀堂前の灯篭や浄瑠璃寺阿弥陀堂前の灯篭がある。**(写真3)**

これらは建築と庭園の景観をいやが上にも美しくマッチさせている。多くは戦乱や地震・火災、風雪などで失われたが後に修復されたり復元されたり写しを作ったりして現在もなお、その美しい姿を保っている灯篭も少なくない。

その後、鎌倉、南北朝を経て室町末期から桃山時代にかけて茶道が流行しはじめ、露地の照明用に姿のよい古社寺の献灯を移すことがはじまった。高桐院の細川三斎の石灯篭（墓碑）がそのよい例である。また、江戸時代にはいろいろな灯篭がデザインされ、考案されて庭灯篭としてデビューした。**(図2)**

例えば桂離宮には、24個の灯篭が配置されているが、織部型、三光型、三角型、水蛍、洲浜の岬型、雪見型など、それぞれに特徴をもった型が格好よく、その持場で庭園の景観を引き立てるのに役立っている。

最近、私もさる寺院から造園を依頼され、使用する灯篭にあれこれ思い悩んでいたが、結局、南北朝初期の作である橘寺型石灯篭(7尺)**(写真4)**の江戸初期の写しが、うまい工合いに見つかり、その姿が端正で美しく、笠のワラビ手の形や走り獅子、花菱の文様が上品で、これを使うことにしたところである。

灯篭をはじめ石造美術を用いる場合、よくよくの研究と経験、それに目利きが必要である。

今後の課題

日本の伝統的庭園は、日本人のほこる日本固有の文化の1つであって、庭園文化として受け継がれてきている。

我々もそれを誇りとして、庭園のアイデンティティをしっかりもって、その技術の向上と継承に少しでも役立ちたいと思っている。しかしながら伝統的庭園は、戦後の混乱期・そして経済の高度成長期を経て日本の生活様式が、すっかり変化し多くの名園を失なう結果となり、それと共に庭園技術をもっていた、すぐれた熟練者も激減していった。

今や庭園の世界にも技術の空洞化が進んで、庭園技術の伝承が危機に瀕しているのが現状である。また、社会の変化と共にかつてのすぐれた庭園技術を理解する人が少なくなり、庭石や灯篭にしても人造石やセメント造りのものが横行し、本物のわかる人も少なくなってきたことも大きな問題である。今後はいかにして優秀な指導者を育て後継者を育成するか、そして技術を磨く実践の場をどのように与えていくかが大きな課題であると考える。

誇り高く格調の高い日本文化の粋、作庭技術が衰退することなく、ますます発展するにはどうすればよいか、腐心している今日この頃である。

(やまだ　しょうじ)

〔参考文献〕
1、大覚寺文書
1、作庭記
1、築山庭造伝
1、体系農業百科事典Ⅶ造園編
1、浄瑠璃寺庭園整備事業報告書
1、日本史小百科「庭園」森　蘊著



写真3　浄瑠璃寺庭園。浄瑠璃寺型石灯篭（南北朝時代）と作庭記に出てくる洲浜と荒磯の石組の復元。



図2　石灯篭図（築山庭造伝）



写真4　橘寺型石灯篭（江戸初期）、花豊文庫蔵

「伝統建築技術を守る人々」

（各論執筆者、本特集企画担当委員の推薦による各職９人）

屋　根



小西繁俊

昭和10年、奈良県に生まれる。
昭和27年よりより従事
資格・所属
奈良県文化財指名登録



■伝統技術
社寺の檜皮葺、杉皮葺、柿葺など全般にわたって、伝統的技術を継承しつつ従事している。
最近では奈良春日大社の御造営工事に携わっている。

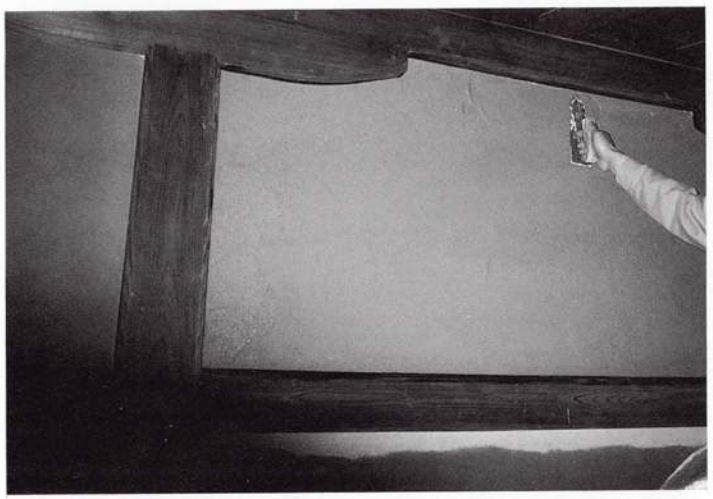
■携わった仕事
奈良春日大社移殿
清浄門
内侍門

左　官



佐藤嘉一郎

大正10年、京都市に生まれる。
昭和12年より従事。
資格・所属
1級左官技能士
京都府左官工協組、伝統建築技術協会、京町家再生研究会



■伝統技術
伝統的左官技法を継承、数寄屋、土蔵、町家の壁工事を施工。施主に喜ばれる仕事を残すことが目標であるとともに、次代を担う後継者の育成にも努めている。

■携わった仕事
鶴屋吉信本店
川西市市庁舎
広銀迎賓館
鶴ケ岡八幡宮貴賓殿
旧二川本陣

大　工



斎藤光義

昭和26年、京都市に生まれる。
昭和48年、㈱安井杢工務店入社、現在に至る。



白鳥公園茶室

■伝統技術
伝統的木工技術の技能修得を通して、各地の公共茶室新築工事に携わるなど、中堅層の優能な技術者として今後の活躍が期待される。

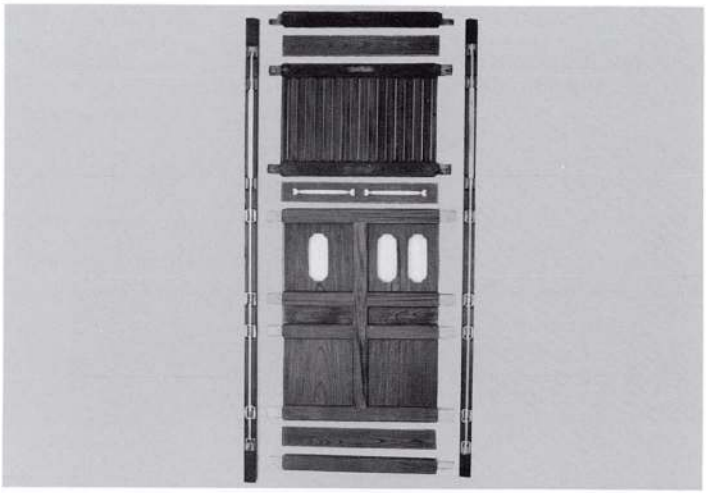
■携わった仕事
メトロポリタン博物館日本ギャラリー
白鳥公園茶室清羽亭新築工事
出雲文化伝承館「独楽庵」復元工事
宇治市市営茶室「対鳳庵」新築工事

建　具



鈴木　正

昭和11年、岐阜県に生まれる。
昭和27年より従事
資格・所属
京都府教育委員会嘱託



妙心寺庫裏韋駄天堂桟唐戸修理

■伝統技術
16歳で建具職鈴木茂吉氏に弟子入りする。
以来約40年にわたり建具職として、国宝・重要文化財建造物の建具修理・復元に従事する。

■携わった仕事
国宝大報恩寺本堂
国宝慈照寺東求堂
国宝東福寺三門
重文角屋　　など多数

造　園



津田利春

昭和16年、京都市に生まれる。
昭和45年、花豊造園㈱入社、現在に至る。
資格・所属
1級造園施工管理技士
2級土木施工管理技士
1級造園技能士



曹洞宗善光寺露地庭造園工事

■伝統技術
造園に関わる全般。なかでも日本庭園の作庭に数多く従事する。
地泉庭、露地庭、石庭、回遊式庭園などあらゆる様式の日本庭園の構成に精通し、茶道、華道、石造美術にも造形が深い。幽玄且つ瀟洒な作風を得意とする。京都に伝わる伝統的作庭技術を継承する数少ない正統派造園職のひとり。

■携わった仕事
裏千家今日庵『食の祭典』茶室工事
因島浄土寺庭園工事
裏千家今日庵和迩浜道場庭園
宇治市市営茶室「対鳳庵」露地庭工事
曹洞宗善光寺露地庭作庭
日蓮本宗要法寺書院庭作庭　ほか多数

大　工



日端和雄

昭和25年、福井県に生まれる。
昭和40年、中村外二工務店に弟子入り。
昭和53年、匠工房設立、今日に至る

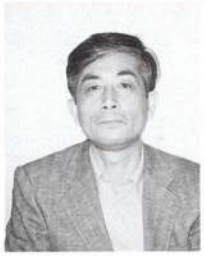


平木邸（大阪府河内長野市）

■伝統技術
伝統的木工技術の技能修得について、現代の名工中村外二棟梁に師事。多くの茶室工事を手掛ける。独立後も主に数寄屋造りの住宅や茶室を手掛け、また、後継者の育成にも努めている。

■携わった仕事
万国博日本庭園茶室
松下幸之助邸茶室
ロックフェラー邸
平木邸、東尾邸（住宅）
福井工業大学附属福井高等学校茶室

屋　根



宮川友一

昭和12年、京都市に生まれる。
昭和30年より従事
資格・所属
㈱全国社寺等屋根工事技術保存会理事



国宝　北野天満宮中門（三光門）屋根檜皮葺々替工事

■伝統技術

社寺・茶席等の屋根の檜皮葺、屋根板葺、銅板葺などの請負。
京都府の国宝・重要文化財を中心に表千家の茶席など数多くの屋根葺替に従事する。創業正徳２年８月で300年以上の伝統を受け継ぐ、十代目で㈲宮川屋根工事業の代表取締役

■携わった仕事

重文知恩院大方丈屋根檜皮葺々替工事
国宝慈照寺銀閣柿葺々替工事
国宝賀茂御祖神社東西本殿檜皮葺々替工事
国宝北野天満宮中門（三光門）屋根檜皮葺々替工事
京都御所各殿所屋根檜皮葺々替工事（協同工事）

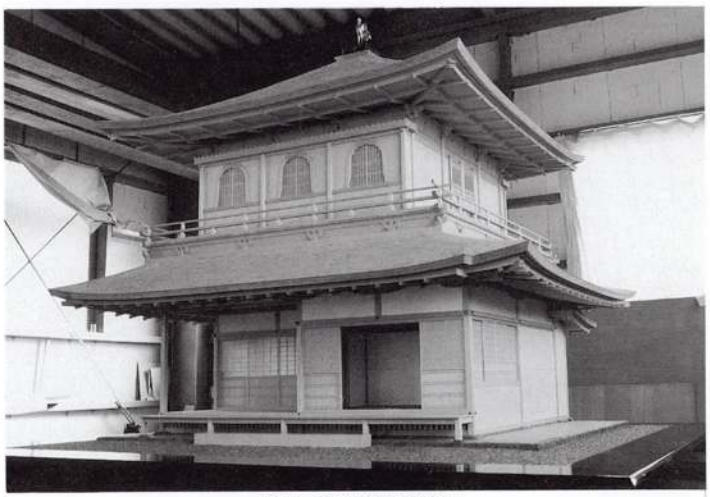
模　型

和田安弘

昭和７年、神戸市に生まれる。
平成６年文部省選定保存技術保持者認定

和田有功

昭和11年、神戸市に生まれる。



国宝　慈照寺銀閣模型

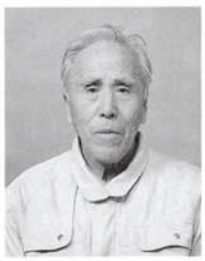
■伝統技術

宮大工の家系に育ち、宮大工の道を歩んでいたが、細見啓三氏（㈶文化財建造物保存技術協会参与）の薦めもあって昭和41年、伝統的木工技術の経験を生かし模型製作の道に転ずる。
今や、二人は少なくとも1/10の模型の製作に関しては右に出るものがいないほどに練達している。

■製作した主な模型

平城京内裏回廊模型
重要文化財今西家住宅模型
重要文化財花田家番屋模型
国宝慈照寺銀閣模型
国宝東大寺南大門模型
平城宮跡大極殿模型

大　工



渡辺節夫

大正14年、島根県に生まれる。
地元で大工修業後、昭和30年、安井杢工務店入社。現在に至る。
受賞歴
昭和63年、「京の名工」京都府伝統産業優秀技術者、平成４年、京都府文化財保護基金功労賞受賞、平成６年国の地域文化功労者となる。



桂離宮月波楼

■伝統技術

伝統的木工技術の技能修得を通して、国宝及び重要文化財建造物の解体修理並びに復元工事の仕事に長年にわたり携わる。また、その豊富な知識と経験を生かし、若い技術者の指導・育成に努めている。

■携わった仕事

桂離宮御殿整備工事
桂離宮茶室等整備工事
重要文化財旧一条恵観山荘移築工事
重要文化財妙喜庵書院及び国宝茶室侍庵修理工事など。

【終論】

現代に生きる町家

—町家再生のこころみ—

大谷　孝彦

京町家再生研究会代表幹事　㈱設計事務所ゲンプラン副代表

町家再生の意味

京都の町家は都市の文化、生活の文化、木の文化そして伝統的職人の技術を集積している。その発祥は10世紀の平安時代にさかのぼり、千年に渡る京都の歴史と共にある。京都の中心部の商家、西陣の織家、花街のお茶屋、上賀茂の社家、等その地域によって、また、表通りに面した本格町家と露地奥の長屋等その立地状況によって、規模、形式、所有形態も異なる。しかし、いずれの場合も京町家は構造と意匠に豊かな、そして繊細な木の表情、自然素材の風情を見せる。格子に代表される表の意匠と、造作、建具等内部の意匠には優しさと厳しさがあり、洗練された数奇の心が格調をもって表われている。表通りの町家は間口に対して奥行の深い、所謂、鰻の寝床型であり、そして、建物の南、又は、東側を吹抜けの通り庭が奥へ貫く平面構成をもっている。中心部の商家では、通りに面する表の部分が店の間であり、玄関より奥が住まいの部分となる職住共存形式の町家が基本である。住居の部分となるオイエは一列又は二列の畳間よりなり、表の店の間との間、玄関の奥に坪庭をとり込む。坪庭は採光、通風のための装置であるとともに、小さな空間に自然との係わりの世界を象徴的に表現する場でもある。町家は単に建物としてあるだけでなく、そこに住まう人々の生活、生活文化と一体になって成り立って来た。永年に渡って積み重ねられた様々の生活の知恵、暮らしの方法をその中に宿している。開放的な建具は冬は襖、障子に、夏は簾、葦戸に建て変えられ、町家の空間は移り変わる庭の眺めとともに、それぞれの季節の風情を表わす。坪庭と表庭の間を秘やかに漂う風の流れに涼を感じる生活感覚も自然との係わりが深い。座敷の床の間、棚、玄関等には季節に応じたしつらえがなされ、落ちついた陰影のある、そして、格調のある町家の空間では、元来、主客けじめのある生活が行なわれてきた。いまや、そのままの形では馴染み難い現代的生活の中においても、やはり日本の心を受け継ぐ生活文化の拠所として、留めておきたい精神性の高い生活様式である。

これらのことは、精神性あるいは自然環境との係わりを大切にしなければならない今後の社会に対して、あるべき方向を示唆しているように思われる。町家の存在はこれからの京都という都市の在り方を考えるとき、もはや経済至上では成り立ち得ない、精神性、人間性をその基盤としなければならない都市にとって、大きな可能性を生み出す土壌となりうるものである。精神性、人間性のある都市づくりとは、人と文化的な環境の係わりの深い都市づくりであろう。その係わりは「人と人の係わり」、「人と歴史の係わり」、「人と自然の係わり」等である。

京町家は人の住まう場であり、職住共存の場として、又、町内コミュニテイーを通じての人と人の係わりの場であること。　永年蓄積された建物と生活の歴史との係わりの場であり、その豊かな歴史性は現代に生きる我々にとって、アイデンテイテイーの根源となること。空間構成上の環境的要素として、建物の素材要素として、自然をとりいれ、又、日々、自然との係わりの深い生活が営まれる場であること。このように見る時、町家はこれからの都市づくりにおける貴重な資源であると思われる。

それ故に、伝統的な町並を形成する連続した町家は勿論のこと、たとえビルの谷間に取り残された一軒の町家であっても、その存在価値は大きい。又、個々に存在する町家も経済的な、あるいは文化的な要素を絆とした連携をとることによって、新たな、そして、より大きな可能性を展開することもできる。

にもかかわらず、この都心部の町家が取り壊され、減少する状況はバブル経済の崩壊後も依然として続いている。その主たる原因は相続税、補修費等、建物維持のための経済的な問題と、伝統に対する生活様式、住民意識の変化である。町家を今後とも存続させ、そこから生まれる可能性を将来へと継承するためには、今における町家の意味を再確認し、存在させるための具体的な方策を考え出さなければならない。町家は人が住まい、又、通常は個人が所有する建物である。従ってこれを固定的に、凍結的に保存することは困難であり、あえてそうするためには相当の公的資金の投入が必要であるが、現状においてはそれも期待できない。又、より本質的な、活性的な形で町家を存続させるためにも、町家自らが存続のための条件を整えることがより効果的である。それは町家に人が住み続けること、そして経済的な力を確保することである。町家の良さを残し、活かしながら、住まい易さを工夫し、新しい活用の方法を具体化しなければならない。

伝統行事である祇園祭を支え続けてきた京都の中心部の町家は職住共存の場であった。それは生活の場であると同時に、町衆の力量と気概を象徴する建物であり、そこには様々な文化の諸相を携えていた。しかし、現在は町衆の力を支えた伝統的な産業にかっての面影はなく、又、新たな形での町家の生活を計り、新たな職住共存の場を作らねばならない。高度な情報社会となった今日の都市においては今まで以上に、多様な可能性が期待できるものとも思われる。又一方、現代に生きる我々にとって、今都会で見失われている自然との共存、伝統的な生活文化との対面の場として、町家での空間体験は貴重である。祇園祭の屏風祭に見られるような、町家の生活文化の紹介の場に、もう少し日常的に触れる機会ができないであろうか。

ここに町家の内と外の必要条件が結びつく接点がある。しかし、それは町家にとっては私空間の公開を意味している。今まで格子の奥に秘やかにしまわれていた町家が表に向かって開かれる。勿論、住まいの部分との係わりへの配慮が必要であり、従来以上に住と職の空間を分かつシステムを考えなければならない。しかし、町家が自ら存在し続けるためには、このような公開性も受けいれなければならない。

町家の新たな形での活用のためには、その目的に即した建物の改装、増改築が必要である。又、町家は木造建築であり、これを維持するためには適切な補修が必要である。この場合、木造建築である故のいくつかの問題がある。即ち、全国一律的な法律によって規制される防火性能、伝統的工法に対する職人の確保、補修費用の軽減、更に耐震性能の問題等である。それぞれの問題に対して具体的な、そして柔軟な対応策の検討が必要である。又、今後の生活環境、社会状況に即した住まい方、あるいは活用の方法を考えるとき、伝統的な町家の要素を活かしながら、なおかつ、現代的な生活様式、感性にも対応できるような機能、表現を持ち込まなければならない。伝統の継承と新たな展開、発展が共存し、これを調和ある形に創造することが必要である。これが町家の再生であり、そして町家の再生は建物とその中で営まれる生活の双方に、そして、相互関連的に係わるであろう。継承と発展は融合一体的な調和をとることは十分可能であり、又一方、対比的な表現をとることによって、張り詰めた緊張感のある調和的空間をつくることも可能である。異種の花木によって表現される生花の如くにである。ガラス、金属等の新しい素材も使い方によって伝統的な空間を効果的にひきたてる。伝統的空間が翻て、現代的な空間として捕えられることとなる。創造的に再生された町家は現代に生きる町家として、今後も又、新たな歴史の中へと継承され続けていくものと思われる。

町家再生の具体例

京都においても最近いくつかの町家再生事例がみられる。町家を改装し、伝統的要素を残しながら、新しい感性を取り入れ、デザイン的にも優れた店舗、ギャラリー等がある。一方では、伝統的な町家を維持し、そこで生活を営み続けながら、外に向かって情報発信を行なっている住人もある。これも又、町家の再生の一例であると言える。いずれの場合も町家と京都という町の間になんらかの積極的な係わりが生まれることによって、その町家は現代の町に生きる、息ずく町家ということができるであろう。

再生事例はその主体者、建物の活用内容、建物の活用範囲、改装の有無、改装の程度等その内容によって性格、特徴が異なる。京都における町家再生実践活動グループである京町家再生研究会で係わってきた再生事例を紹介する。これらの事例の中には、再生活用に係わる多くの本質的な課題を含んでいる。

橋弁慶山町会所　　中京区蛸薬師通烏丸通西入ル **（写真１）**

祇園祭の山鉾の一つ、橋弁慶山を保存する町内とテナントとなる京都の伝統工芸産業の組合－和座百衆、そして、京町家再生研究会の目的を一にした協力によって実現した事例である。町会所は町内の寄り合いが行なわれ、祇園祭のお飾り場となる、コミュニテイーの核としての歴史的町家である。この町会所は木造二階建ての表屋と中庭の奥に土蔵があり、表屋形式と呼ばれる町会所である。棟札によると、明治18年の建造である。祭の時には「はれ」の建物として生き生きとした姿を見せるが、それ以外の時は空家であり、このままでは損傷が進むばかりの状況であった。この町家を日常も展示場として活用することによって、建物維持の費用を確保できることとなった。ただし、祇園祭の時はお飾り場となるため、町内会に明け渡すことが条件である。町内会とテナントの相互の理解、協力のもとにこの再生計画は成り立っている。



写真１　橋弁慶山町会所 表外観

表家を詳細に見ると、外壁軸組の柱は所々で継ぎ足しや補修をした部材等が使用され、町内共有の町会所が資金的にも工夫を重ねて維持されてきたことがわかる。建物の各部材はかなりの補修を必要とし、古いほぞ穴、欠損部の埋木、継ぎ足し、更新を行なった。

又、北側部分の柱が屋根下約１mの位置で継ぎ足されていることから、以前は棟の位置が現在よりも表よりで、奥の部分の屋根が低いものであったという建物の歴史が判明した。東西の妻壁の２階柱各１本づつについて、新しい補強柱の表面に元の柱を薄く切ったものを張り付ける方法で昔の状況を保存した。

計画上、必要展示面積を確保するため、中庭に２階建て、延べ20坪の増築をした。準防火地域であり、増築棟は防火構造とすることを余儀なくされた。延焼部分は軒裏は塗り込め、建具は防火戸とし、蔵風の建物として表現した。表家は建築基準法上既存不適格の状況であり、今回は奥へ約２mの引き家をしたが、延焼部分が法的に拡がらないということで、表の外観を残し、京町屋の木の趣をそのまま保つことができた。　表外観は原則として現状のままであるが、１階の格子を元より少し細目の切り子格子とし、２階に新たに千本格子を建て込んで以前よりも緊張感のあるフアサードを表現した。通り庭入り口の扉は柱の切り込みの痕跡をもとに枠外への引きだし機構付の開き戸を復元した。これらの木工事には昔ながらの職人技術が発揮された。

内部の展示空間については、１階の表の間、奥の間は畳床を外して通り庭と同じ土間空間とし、２階はお飾り場となる表の間のみ畳

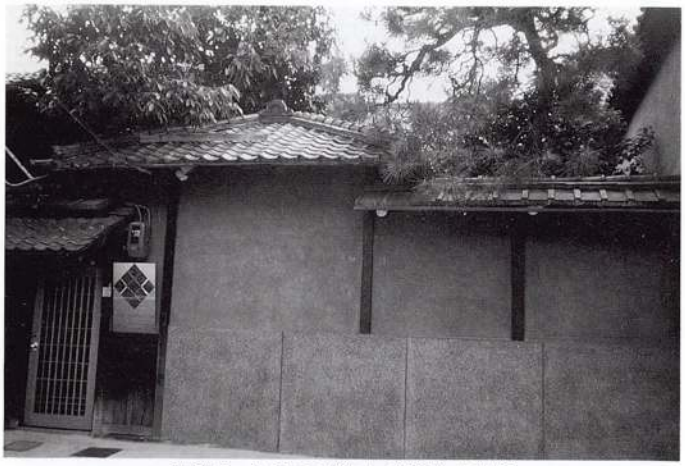


写真2　みほプロダクト 細野家 表外観

を残し、中の間、奥の間は木の床張りとした。町屋を開放的に活用するために、本来座することを主とする静の空間を動的な空間として改装するケースが多い。又、2階中の間、奥の間については平天井を取り外し、小屋組を見せる形とした。その結果、小屋の木組みはダイナミックな架構を見せ、まるで舞台装置のように町会所の歴史を語りかけて来る。襖の替りに一部に展示パネルを建て込んだ内法造作は町屋空間のスケールを感じさせる。このような改装空間は伝統と新しい感性を合わせ持つ工芸品の展示空間として、その効果を高めることとなった。

京町家は筋交、火打ち等が無く、構造的に微妙なバランスで成り立っている。通庭の貫通、畳間の連続した平面によって間口の方向の壁面が殆ど無く、道路面はお飾りのために、1、2階とも全面が開口となる状況である。今回の改修では止むなく見えない部分において、筋交、火打ちの挿入、金物による耐震補強を行なっている。

この建物は景観上、両隣をビルに挟まれた形の一軒家であるが、隣のビルの前広場に姿を見せる町会所はほっとするような人間的スケールと暖か味を感じさせる。高層化した町並みの間にあって、京都の歴史を活かしながら再生された憩いの空間は、既に伝統的な町並とは言えないが、新たな価値を持つ都市風景として評価されるべきものと思われる。

みほプロダクト　細野家　中京区室町通御池通上ル **(写真2，3)**

明治10年に建てられた居宅、仕舞家である。表の高塀の内に前庭があり、塀越しに松の木が風情を添える。一部の部屋が使われていない状況であったが。表の玄関三畳とその奥の六畳の間、前庭の手



写真4　セカンドハウス 河合家 表外観



写真3　同左 内部 茶室ワインパブより庭ごしにオフィスを見る

前にある四畳半の茶室をプロダクション・オフィスとして活用することとなった。茶室はサロン的なワインパブとして改装している。庭を中心にオフィスとパブを視線の通じる一体的な空間として表現し、日本文化が豊かに凝縮した空間の中に、又、現代的な感覚を持ち込んでいる。オフィスは畳床を落とし庭と同レベルの内外貫通した板床。主催者の友人の照明デザイナーによる外塀の3本の光の帯、通路踏み石のグラスファイバーによる動く色光は新しい感覚の装置である。このようなオフィス空間に外国からの来訪者も多く、世界に向けての情報発信の基地として息づいている。再生の過程で家主、借手、紹介者、設計者、友人、職人等、多くの人の人づき合いの濃密さ、文化に対するこだわり等、京都ならではの特徴ある再生活動であった。

セカンドハウス　河合家　中京区東洞院通蛸薬師通上ル **(写真4，5)**

明治38年の建造。表家の店棟と中庭を介した奥の主屋があり、表家の横の露地が主屋の玄関へ通じている。この2階建の表家を店舗として再生活用することとなった。京都でいくつかの系列店を経営するテナントが、1階を喫茶、2階を軽食レストランとし、1階の表部分ではケーキの製造販売を行なう。表の外観は1階腰壁が石張り、格子が鉄パイプという昭和初期の改造型である。今回、1、2階の窓を透明硝子とし、外から内部の様子がよく見える。又、2階の客席から当初は虫子窓であったであろう横長の窓からパノラマ状に表の景色が見渡せる。内外の開放感は格子のある従来の町屋と全く異なるものである。しかし、あまり違和感を覚えないのは、木造2階建のスケールと屋根、庇の水平線、木の表情等、京町家の基本



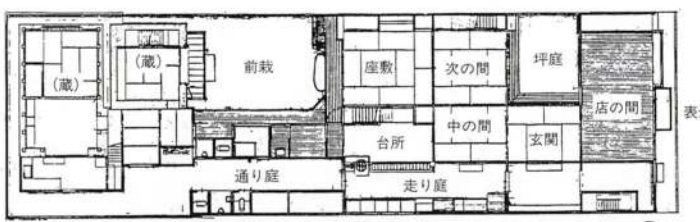
写真5　同左 内部 2階客席

的な要素を保っているからであろう。又、表屋との間にある庭に面しても大きな窓を作り、日本的な庭の眺めをとり込んでいる。

内部は1、2階とも板張り床とし、1階は土間レベルである。2階の平天井をはずし高さと変化のある小屋組を見せている。階段は中央部に新たに付け替え、1、2階とも開放的な空間として生まれ変わった。照明も現代的なものとなり、若い客、女性客の人気を得ている。奥の主屋とは入口露地、中庭の眺めを共有するため、公私共存に対する配慮が必要である。路地奥に新たに結界として入口門扉が設けられた。視線に対しては主屋側に簾を二重に吊る形で家主側が一歩譲った形の共存となった。公私の空間の使い分けについては貸主と借主の間で相互の理解、協力が必要となり、その成否は町屋再生活用の可能性に大きく係わるものである。又、この表家は柱、壁等の構造体が比較的少ない構成であった。今回の改装に当たり、基礎の足固め、筋交、火打、方杖、添え柱、壁面追加等の構造補強が本格的に行なわれた。店舗空間においては補強構造を敢えて意匠性と関連ずけて表現することも可能である。しかし、伝統的な町屋における耐震性能の問題は伝統的な木造工法を念頭において今後更に検討する必要がある。

無名舎　吉田家　　中京区新町通蛸薬師通上ル　**（写真6，7）**

明治42年以前の建造。表家2階は昭和10年の改造である。間口5間半の大規模で典型的な京都中心部の商家である。先代の時期、現当主が不在中に手荒な改築が加えられ、一部はガレージになり、アルミサッシュが入る等、看板建築と言われる荒れた状況になっていた。昭和53年以降、現当主が昔の記憶を頼りにこつこつと復元を開始、現在も継続中である。建具、金物等の資材は骨董市、大型ごみの集積地より手に入れることもあった。伝統的な町屋に於ては寸法が規格化されていたため、他所からの部材の再活用が可能であった。奥の蔵を改造して常の住いとし、主屋、店の間を自らの生活にも使用しながら、芸術家、学生等に開放し、町家の空間体験を通じて、京都における住いの文化を教え、伝えている。2階の座敷の畳を能舞台を思わせるような厚板敷きの部屋に改装するなどは、美術家である当主の創造的センスと建物に対する思い入れを表わすものである。表の店の間は日頃から町屋の生活文化に係わる展示があり、祇園祭の折には屏風飾りの場となる。建物は無名舎と名付けられ、自ら祇園祭の役員を努め、地域社会で積極的な役割を果たす当主は伝統的な町家の住人としての生きざまを町家の建物、空間に反映していると言えるであろう。町家の再生は本質的には、そこに住まう人、活用する人の強い意志によって初めて可能となるのである。



吉田家　1階平面図1/400　京都中心部の本格町家の標準平面

むすび

町家の存続は今後の都市づくりにとって大切な要素である。幸いにも残されている貴重な町家の再生は都市づくりの中で基本的な施策として位置づけられなければならない。町家の新な活用方法、職住共存、公開のシステムを考える必要がある。伝統的な生活文化が蘇り、又、新しい文化が芽生えるような再生の活動が、都心の町家に住まう人達の生活の中から展開されることが期待される。単なる観光主体の表面的な町づくりは困難であろうから。

平成9年2月、中京区の再生活用中の町家に対して行なったアンケート調査の結果は以下のとうりである。

アンケート配布　59件　有効回答　35件　回答率　59.3%

1　今活用中の町家は「現代に生きる町家」であると思うか。
　思う　20　　思わない　5　　余り意識していない　8

2　町家は再生活用することによって今後21世紀の京都の町に役立つと思うか
　思う　27　　思わない　3　　無回答　5

3　役立つ場合はどのような意味においてか（複数回答）
　文化的に　26　　経済的に　10

4　町家が相互に連携するシステムは今後町家の再生活用に有効と思われるか
　思う　19　　思わない　5　　無回答　11

5　今後も今のような町家の再生活用を続けるか
　続ける　24　　続けない　6　　無回答　5

今後の京都の町のあり方をも視野において、積極的な意志を持って町家の再生活用を続ける人達がいることが確認できる。

（おおたに　たかひこ）



写真6　無名舎 吉田家 表外観



写真7　同左 内部 玄関より坪庭，店の間を見る

【町家再生に向けて】

伝統的木造住宅における延焼防止の試み

「散水式水幕装置」

十倉　毅

㈶日本建築総合試験所建築物理部長・工博

わが国の町並みは、木造建築物で形成されてきた長い歴史と伝統をもっている。しかし、一旦出火すると数百戸あるいは数千戸を焼失する歴史も存在し、とくに関東大震災や第２次世界大戦での大火災による都市の壊滅的損害は、建築基準法や都市計画法に「防火地域」、「準防火地域」など、都市防災の観点からの地域指定を設けさせる強い背景となった。

建築基準法には今なお、「準防火地域内にある木造の建築物は、その外壁及び軒裏で延焼のおそれのある部分を防火構造とし、……」の記述がある。そして、これが全国一律の基準として都市の不燃化を推進した功績は、まぎれもない事実である。が、一方では、京町家のような市街地に存在する木造建築物は、改修もままならないままに、モルタル造、鉄筋コンクリート造などに姿を変えつつある。

このような現状に対し、京都市は1997年春から３年がかりで市内中心部の３万戸といわれる京町家の総合調査に乗り出した。新聞によれば、調査対象は戦前の木造住宅全戸、この成果は京町家の保存・再生を前提にした町づくりに生かされるという。「遅すぎた感もある」とは、ある大学教授の談話である。しかし、文化の継承、伝統的木造建築に関心をもつ大方には、なによりのニュースであった。

戦後50年を経て、都市の不燃化が進み、広幅員道路も随所に配置されるようになった。その結果、火災が発生しても焼け止る可能性が増し、延焼速度も低減した。近代消防の名前は、情報伝達システムを含む消防の初期鎮圧性能の向上に置き換えてもよい。京都市消防局によれば、通報から放水開始までの平均時間は７分、遅くとも10分である。これらを総合すれば、「延焼のおそれある部分」が10分間の初期防火能力をもち、防災面の環境条件さえ整備されれば、木造建築をある程度まで許容してもよいのではないか。

1993、94年の両年、京都市から㈶日本建築総合試験所に「町家再生に係わる防火手法に関する調査研究」（西川幸治委員長）が委託された。ここでは、町家再生に係わる法制面からの検討とともに京町家の実大模型が製作され、この模型の外壁と軒裏に石油バーナーを接炎させた場合の散水式水幕装置の防火効果が検証された（**写真１、２参照**）。

実験には、水道管直結（水圧１kgf/㎠）のドレンチャーヘッド（公称流量18ℓ/min、扇型噴出角度60度）を用い、木材の温度が着火点260℃に達した時点で軒裏への吹き上げ散水を開始したが、軒裏を約２ｍにわたって濡らした水幕は、しぶきとなって外壁を伝わった。そして、10分間にわたって火炎の成長は、認められなかった。一旦着炎しても焦げた部分への水の浸透によって鎮火したのである。

本散水式水幕装置については、管路の死水・ソーニング・設置位置など課題も残されているが、本稿では伝統的木造住宅を保存・継承する一つの手段として紹介した。

なお、「理科年表1997年度版」から採った日本各地における日最大風速（風速の10分間平均値）の階級別日数を**表１**に示した。同表から判るように京都は日本でも有数の弱風地域である。全国一律の基準を見直す根拠がここにもある。

（とくら　つよし）



写真１　軒先への接炎（京町家実大模型実験）

表１　日本各地の日最大風速*の級別日数（1975～90年までの年平均）

都市名	酒田	新潟	東京	横浜	名古屋	京都	大阪	福岡
10m/s以上	91	50	31	34	18	1	30	18
15m/s以上	8	4	1	1	0	0	1	1

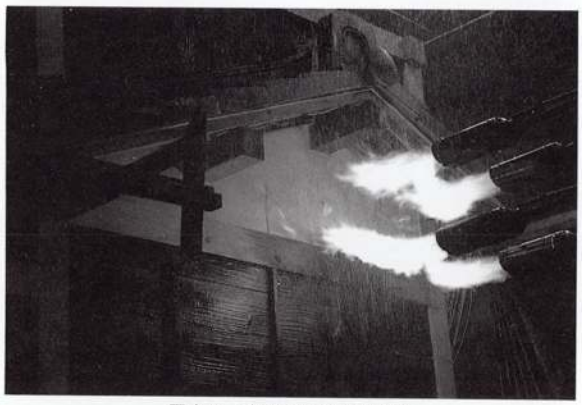


写真２　妻側への接炎（同左）

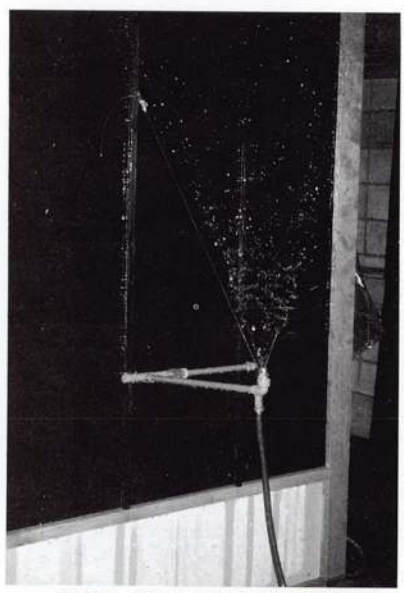


写真３　散水式水幕装置（転倒式）

伝統的木造建築をめぐる話題

古材バンクの会

京都に古くからある町家が、生活様式の変化などから、建て替えられたり、取り壊される際、ゴミとして捨てられる古材を再利用しようということで、永井規男氏（関西大学工学部教授）の提案で発足した。

木は切られてから百年、二百年の寿命を保つ優れた耐久建築材として、我が国の気候風土に適した木造建築文化を育んできた。こうした先人たちの知恵と技術を学び、併せて地球環境保全にも役立てようと活動している。具体的には、古材の提供者と利用者のネットワークをつくり、保存がかなわず消失しようとしている古い木造建築を多様な資源として活用し、また、木造建築の勉強会、情報交換なども行っている。

古材バンクの会事務局　☎075-254-0864（FAX兼）

甲良豊後守宗廣記念館



この記念館は、甲良町法養寺が生んだ偉人「甲良豊後守宗廣公」(1572年生、作事方大棟梁で日光東照宮社殿の造営で知られる）の功績を後世に伝承するため、法養寺区民の資金の積立と県の「風あいのあるまちづくり事業」によって建設された。

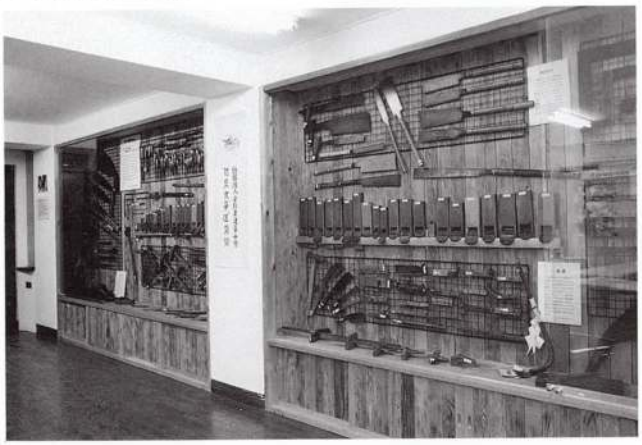
展示棟は当地に残る旧家のもつ伝統的架構や草葺きの屋根の残る建物を利用した。全体の構成は、改装する展示棟と、かってこの家の書院として建物が配置されていた場所に、渡り廊下を介して配置した研修棟からなっている。

改修にあたっては、草葺きの屋根を、琵琶湖特産のヨシで葺き替えたり、縁石もみんなの家から運び出し供出、据え付けも区民の労働奉仕によって行われた。

研修棟の８本の丸柱は、近くの学校の体育館のものを、解体されると聞きつけ再利用した。石も木も建物も、その地の時の積み重ねを、ひっそりと受け継いでいる。

滋賀県犬山郡甲良町法養寺501　☎0749-38-3656
開館日　金～日曜日　午後１時～午後５時　（年末年始休館）

建築道具館



この道具館は栃木県在住の宮師六代目伊豆守則直　赤穂新太郎氏のもつ128種586丁の使い込まれた道具を主に展示されている。伊豆守則直は200年の歴史を持つ建具職人の家で、代々受け継がれてきた道具の中には、江戸時代の逸品と呼ばれるものも少なくない。それらを使って60年以上にわたって建具に始まり、お宮、神輿を作りつづけてきた。

その赤穂氏も70歳を過ぎて、後継者にも恵まれず引退を決意し道具のほとんどを㈳全日本建築士会に寄贈された。
匠の心を受け継ぎ、日本の伝統的な木造建築文化を継承していこうとする当会との出会いによって道具館として設立された。

東京都新宿区高田馬場3-23-2　☎03-3367-7281
開館日　月～金曜日　午前10時～午後４時（祝日、年末年始休館）

住まいのサロン-町家や民家を気持よく住み継ぐために

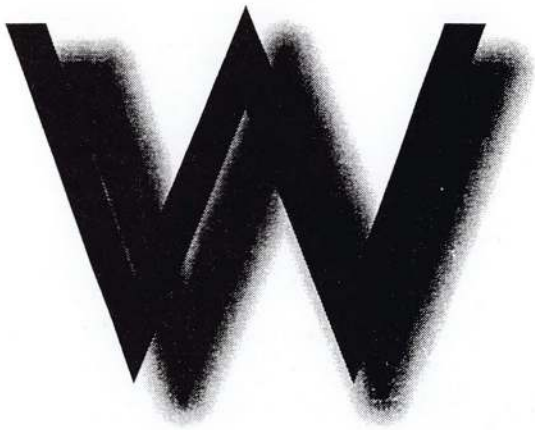
滋賀県や京都には、伝統的町家や風土に適した民家が多数残っている。最近、こうした木造建築物のもつ落ちついた雰囲気や、歳月を刻んだ成熟さと美しさに引かれて、若い人達も含め町家や民家の魅力に関心をもつ人が増えている。

しかし一方で、こういった建物は普通の建築にくらべてコストが割高になるのではないか、老朽化ゆえの耐震性に対する不安とか、現代の生活習慣に馴染まないとか、不確かな知識や情報によって取り壊されているのが現状である。

こうした失われて行く建物に対して、正確な診断・評価をして構造上の補強をしたり、現代生活に適した仕掛けを施した建物にして、再利用しようという試みが注目をあつめている。

・民家・町家を住まいや商業空間として利用したい
・古い良さを生かした空間のある家をつくりたい
・使われていない民家・町家を利用してほしい。・購入したい等の情報交換や、相談に応ずる気軽な談話室として設置された。

開設　毎月第３土曜日　午後３時～９時
場所　彦根市城町１丁目７－14
一級建築士事務所　計画工房内
担当：戸所、佐藤、須川、塚口
☎0749-24-1630 FAX0749-23-0185



[座談会]

Welcoming

建築を画像化する女性たち

――まず初めに、自己紹介と現在携わっている御仕事について教えて下さい。

金井　主な仕事は、デザイン学校で建築パースの講師をしています。以前は、パース事務所に勤務していました。講師の仕事以外は、個人でパースを描く仕事をしています。

奥村　仕事は、産業映像の企画、構成、台本作りをやっています。ドラマで言うとシナリオ作りに当る部分の仕事をしています。

松井　ＣＧ専門のプロダクションの制作をやっています。

――仕事の内容を具体的に教えて下さい。

金井　学校では、インテリア、建築業界でのプロを育成するための基本的な建築パースを教えています。個人の仕事の方は、エアブラシでこつこつパースを描いてます。内容はマンション、住宅、店舗、様々な作品を描いています。

奥村　映像のプロダクションから仕事がくるパターンが80%、その他は、直接スポンサーから来るというのがあります。仕事の内容としては、例えば、建築関係でしたら、工事記録ビデオ、竣工後の建物を紹介するビデオなどの映像の流れやナレーションを作って行きます。そのビデオを見せる対象に応じた構成と展開手法を考えまして、伝えたいイメージや内容を最大限に表現します。

松井　ＣＧには、イメージ的なＣＧと、実際の物を見せるＣＧがあります。ＣＧの使われ方として、工場などで火が燃えて、普通では見えないような所を表現するとか、計画中の、例えばマンションなどを動かしてみせるとかが有ります。手掛けた作品としては、衛星放送のＣＧ、テレビ番組のオープニングＣＧ、コマーシャルのロゴなどがあります。

――この職業を選んだ理由を教えて下さい。

金井　大学を出た後、料理雑誌の編集をしていました。コーディネーターやスタイリストなどに興味がありましたので、結婚を期に、コーディネーターの道を選んだのですが、当時、コーディネートの仕事があまり無くて、たまたまその頃にパース事務所に勤めている人と知り合ったのが、この道に入るきっかけとなりました。パース事務所に面接に行った時、４時間くらい話し込みまして、作品は持って行かなかったにもかかわらず、話の内容で来て下さいと言われました。

奥村　そのときどきの風の流れにまかせて、自然の成り行きでなったような気がします。以前勤めていた所が、社員研修を行う会社で、そこで教育用のスライド、ビデオを作成する部門に所属していました。そこで映像に関することを一から学んだんです。４年目頃に独立しました。そのきっかけは、交通事故に遭いまして、それに対して因縁めいたものを感じ、仕事を変えて自分の気持ちを良い方向に持って行こうとした訳です。それから10年経ちました。ただ、いま考えてみますと、「映画好き」が根底にはあるかもしれませんね。

松井　私もこの仕事を選んだのは、特にこれをやりたいというのではなくて、人との出会いによって、この方向に流れて行ったという感じです。元々はファッション関係の仕事をしていたのですが、会社を退社しようと思ったときにいろいろな人にアドバイスを貰って、それが基となって今に至ります。人との出会いが大事だと思いました。

――建築を画像化する立場からみて、良い建築家を教えて下さい。

金井　打合せするときに、はっきりとした自分のポリシーを持っている人が良いと思います。クライアントの話を聞いて的確に内容を把握し、指示してくれる方が良いですね。

奥村　私は直接設計の人とはあまり話さないのですが……クライアントとして考えると、作る熱気のある人、制作しようとする熱意を持っている人がよいと思います。

松井　私も設計をされる人とは、直接話さずに、プロダクション、代理店が間に入ります。そのような人として考えると、クライアントの意見、ＣＧ制作側の意見を理解して、それを反映して仕事を進めて行く人が良いと思います。

――画像化する上での楽しい時、辛い時を教えて下さい。想い出話でも結構です。

金井　絵を描くことそのものが楽しいので、仕事に対して苦しいというのはあまり感じないのですが……楽しい方の想い出で、まだパース事務所に居た頃の話ですけど、ある日電車に乗っていましたら、どこかで見たことのあるマンションが目に入ってきました。なんと自分がパースに描いたマンションなんです。その時は、感激しました。苦しい時をあえて言いますと、やはり締切ですね。学校では、適切に教えるというのが難しくて、前は、授業を行う度に、胃が痛くなるようなこともしばしばでした。楽しい時は、生徒の成長過程を見ることとか、就職してから描いた作品を持ってきてくれるとか、そういう時が楽しいです。

奥村　辛いほうの思い出から入りますと、何年か前に、ある会社の案内ビデオを作ったんですが、泊り込みの仕事だったんです。最終日に夜の８時に終る予定が、翌朝の７時までかかったというのが思い出として残ってます。金井さんとも同じですが、締切といいますか、時間との戦いが辛いです。あとはアイデアが浮かばない時とか。楽しいことは、日頃、生活を普通にしている分には知ることの出来ない世界に触れることです。例えば、大阪城の改築を行っている様子や、その工法とかを知ることが出来るとか、そういう楽しさは有ります。一つ一つの仕事が、同じ物が無いので、いつもワクワクしながらやってます。それが私の一番の楽しさです。

松井　この世界に入った当初は、コンピューターのことをあまり知



奥村恵美子

クリエイティブハウス奥村

大学を卒業後、社員教育機関で教育用スライド・ビデオの制作を担当し、1986年にクリエイティブハウス奥村を設立。企業ＰＲビデオ・建築記録竣工ビデオ・工場案内ビデオ・イベントマルチスライドなど広範囲にわたる映像媒体の企画・構成・台本づくりを手がけている。

日頃の生活ではのぞけない世界（大阪城の改修で使われた特殊工法 etc.）をかいま見ることができ、幅広いテーマの仕事が飛び込んでくるので、毎回の仕事が刺激的で飽きることがない。



金井洋子

大阪総合デザイン専門学校 インテリア学科 講師

大学を卒業後、広告デザイン会社入社。料理誌の編集ディレクターを担当。結婚を機に、インテリア専門学校に入学。卒業と同時にパースデザイン事務所に入社。現在、大阪総合デザイン専門学校講師。

教育現場に入って、10数年が経過しています。いかに理解しやすく、興味深い授業をするか日々思考錯誤の連続です。



松井伸子

㈱ロジスティックス コンピュータグラフィックス制作

大学卒業後、ファッション情報誌・洋書輸入業者を経て、ＣＧ業界に入る。

２年間、ＣＧハードウェア販売会社勤務。

1990年㈱ロジスティックス創設当時から制作スタッフとして参加。

ＶＰ（ビデオパッケージ）・ＴＶ番組タイトル・TVCM等のＣＧを制作。

W

らなかったので、専門知識を吸収するのが大変でした。コンピュータは日々進歩して行きますので覚えることが多くて大変です。まぁ楽しさ半分、大変さ半分と言いますか……楽しい時は、思い通りの作品が出来上がったときが、うれしいです。思わずまわりに居る人たちに、「ほらほら、出来た出来た」なんて……

――今、新しいことにトライしていることがあったら教えて下さい。

金井　マックを始めました。方向性は、模索中です。学校では、手でパースを描く授業とCADを使う授業が別々になっていまして、それをミックスさせたらどうだろうかと考えています。パースを描く流れを上手に教えることが出来たらいいなと思います。

奥村　今新しくトライしていることは無いですねぇ。毎日の仕事がいつも違いますから……個人的なことですと、今一人でやってまして、そうしますとどうしても量の制限が有ります。そろそろアシスタントといいますか、御弟子さんといいますか、そういう人に自分の意思を伝えて、仕事をしてもらうような形を考えてます。今同業者をあまり知らないんです。台本や企画書を書く人がいなくて、そういう人が多く出て来てくれればいいなと思っています。

松井　ファッション業界と上手に関われないかな、と思っています。今でも携わっていますが、昔ファッション関係の仕事をしていたものですから……海外のスタイリストで、一緒に仕事をしていまして、その人は、インテリアや、世界の動向からファッションの方向を見る人なんです。そのような感じのものとCG、インターネットを結びつけて世界に情報を発信したいと思ってます。

――「人間」というものを画像の中でどう扱っていますか？

金井　パースでは人は必ず登場します。学生にパースを描かせますと、人、車、木が苦手のようです。特に人は存在観が在りすぎてもいけませんし、かといって、なさすぎても、絵が中途半端になります。学生には、空気のように絵と調和する人を描くようにと言っています。昔は、リアルな人が要求されましたが、今は、そんなことは無いみたいです。

奥村　建築物が竣工した後のビデオでは、モデルを使って案内したりすることもあります。そうする事によって、見る人があたかもそこに居るような動きとか温もりが出て来ます。なにか印象付けたい所に人間の表情を使うとインパクトが強く、効果が高まります。人間の表情に勝るものは無いですね。

松井　CGについて言えば、人間を表現することはとても難しいです。建築のCGに出て来る人は、今はペラペラの薄い人ですけど、そのうちにリアルな人が出て来ると思います。人間の微妙な動きを表現するのはとても大変なことだったのですが、今は少しずつ表現出来るようになってきています。ただ一般の方は、CGならば、だれでも映画のようなリアルな人間が出来ると思っているようですけど、今の段階ではちょっと無理ですね。お金と時間が有れば出来ると思いますけど……

――同業の女性の方にアドバイスがあればお願い致します。

金井　私がこの世界に入ってからもですが、パースの手法が、移り変りを見せています。手で描く手法とコンピューターで描く手法がどのような比率で仕事として成立するか非常に見通しが立ちにくい所です。そのへんの見極めをどうするかが問題で、上手にアンテナをはって対応してほしいと思います。

奥村　私個人は、女性と言うことを意識したことが無くて……映像作りとして考えて言えば、これが正しいというのが無いので、自分がどこまでこだわって、納得出来るものを作るかという点に尽きると思います。とことんやれるところまでやる。そういうことをしてほしいと思っています。

――物を作る人にとっては、肝に銘じないといけませんね。

奥村　自分に対しても戒めのつもりで言ってるんですが……（笑）

松井　仕事以外で見たり聞いたり、色々なことを吸収して仕事に反映してほしいと思います。それは自分自身のためにもなりますし……それがいちばん大事なことだと思います。常に吸収する態度が必要だと思います。

――本日は楽しい御話をいただいて有難うございました。

企画／会員企画小委員会
Director/T. TOMIYA
1997年２月12日　於本会会議室

京都駅ビルの構造設計 －2－

西　伸介
㈱木村俊彦構造設計事務所

京都駅ビルは、「平安遷都1200年関連事業」の指定を受け、ＪＲ京都駅敷地内に京都の新しい都市の拠点として世界に誇れる国際ステーションを目指し、計画された。世界の著名な建築家による国際的な設計競技の結果、当選案として採択された原廣司案を基に、基本設計、実施設計を行い、南北約60～70m、東西約470mの規模を有する駅施設、文化施設、コンベンションホテル施設、商業施設、駐車場施設を含む複合施設で、今年９月にオープンする。

■京都駅ビル建築概要

建築主	西日本旅客鉄道株式会社、京都駅ビル開発株式会社
設計者	原　広司＋アトリエ・ファイ建築研究所 木村俊彦構造設計事務所
施工者	京都駅ビル建設工事共同企業体
敷地面積	38,075㎡
建築面積	32,239㎡（延床面積　235,627㎡）
階　数	地上16階（ホテル施設）、地上12階（商業施設）、塔屋１階、地下３階
軒　高	１ＦＬ＋59.8m
最高高さ	１ＦＬ＋64.3m
構造種別	地上：鉄骨造 地下：鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造
外　装	ＰＣ版、金属パネル、ガラスによるカーテンウォール

架構計画

本建物は一体の建物として構成されているが、構造の架構形式は諸施設の建築的要件によって水平に３つのWING――W-WING：商業施設、駐車場施設、M-WING：ホテル客室、駅施設、E-WING：ホテル客室、宴会場、文化施設――、および３つのWINGに接する建物中央北側の駅コンコース（アトリウム）に大別できる。

階層の構成は、すべてのWINGに共通して１ＦＬ＋10.5mから15.5mの階層に「構造マトリックス」と呼ぶ鉄骨トラスによるデッキレベルを設け、それより上部に各WINGごとに用途の異なる上層部、下部に駅施設やホテル、文化施設のエントランス等の公共空間となる下層部と地下部を設けている。

構造マトリックス

この建物の架構計画の特徴のひとつである「構造マトリックス」は、上層部の荷重を下層部に伝達する機能をもっている。複雑で巨大な建物を、既存のＪＲ京都駅や市営地下鉄に制約されない自由な建築として構築するために、「構造マトリックス」から上下方向に自由に腕を伸ばせる（germinant）システムで、下層と上層の平面計画を一体化する建築の胚盤（germinant disk）として基本構想時から検討を続けた。この一層分の厚さの剛な階「構造マトリックス」によって、この上にある各WINGの施設に適した自由な平面計画を可能としている（とは言っても、下層から上層に伸ばせる柱は伸ばしたほうが経済的である）。

また「構造マトリックス」の階層に設備の部屋を設け、すべてのWINGの基幹となる設備配管、配線を水平に自由に引き廻すことを可能とする「設備マトリックス」としても計画した（**図1**）。

動的解析

本建物は３つのWINGごとに異なる架構形式を、エキスパンション・ジョイントを設けずに連結して、一つの建物として計画している点で、構造設計の工夫が必要となった。

３つのWINGに対応した３つの振動モデルを作る。そして３つの振動モデルを一体化して一つの振動モデルとするために、おのおのの振動モデルの質点の間を水平連結材で連結した動的解析モデル「WING連結モデル」（**図2**）（44質点、132自由度）を作成して、巨大な建物の各WING相互の影響を含んでいる応答値と動的挙動を確認している。さらに建物の平面形状が南北約60m、東西約470mと長大で複雑なことから、剛床仮定の範囲を小さくして剛床効果が低減した場合を考慮するために、各WINGをさらに細分化した動的解析モデル「ブロック連結モデル」（**図3**）（140質点、420自由度）においても動的挙動を確認している。

以上の解析結果から、設計用層せん断力、各WINGの間に接しているアトリウムに生じる強制変位、ブリッジの支持部のクリアランスを設定し、詳細設計を行った。

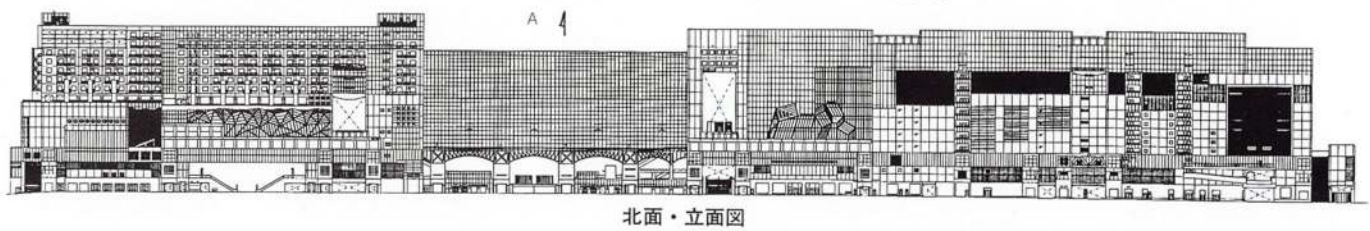
水平連結材

水平連結材とは床版のことである。床版の面内剛性を柱、梁からなる垂直剛性に対して適正に評価すること、そして床版に生じる応答値の評価と部材設計は構造設計上の課題となった。これには理論的な検討も踏まえて、多数のケースについて解析して、適正値を設定している。

アトリウム

アトリウムは駅施設のコンコースとして利用される３つのWINGに接する東西150m、南北32m、高さ50mの吹抜け空間で、鉄骨トラスで支えられたガラス屋根で覆われている。鉄骨トラスは梁成1.44mで、南北方向のスパン32mを、1.35m～1.44m間隔に架けている。支点は鉛直、水平２方向を拘束するピン支承で、各WINGの建物で支持している。

アトリウムを力の流れを感じさせない均質な空間とするために、弦材、斜材ともにすべて□－100×100の角型鋼管で、部材はすべて溶接による接合としている。部材が多数取り合う節点には、鋳鋼を用いた。この鉄骨トラスは、鉛直、水平（風、地震）、温度荷重に対する設計のほかに、地震時に生じるWING間の相対変位を強制変位としたケースについて検討している。さらに、レベル２地震時の強制変位による応力と温度応力を組み合わせた作用力に対して、一部の部材が座屈しても、その他の部材で鉛直荷重を支持できることも確認している（**図4**）。



北面・立面図

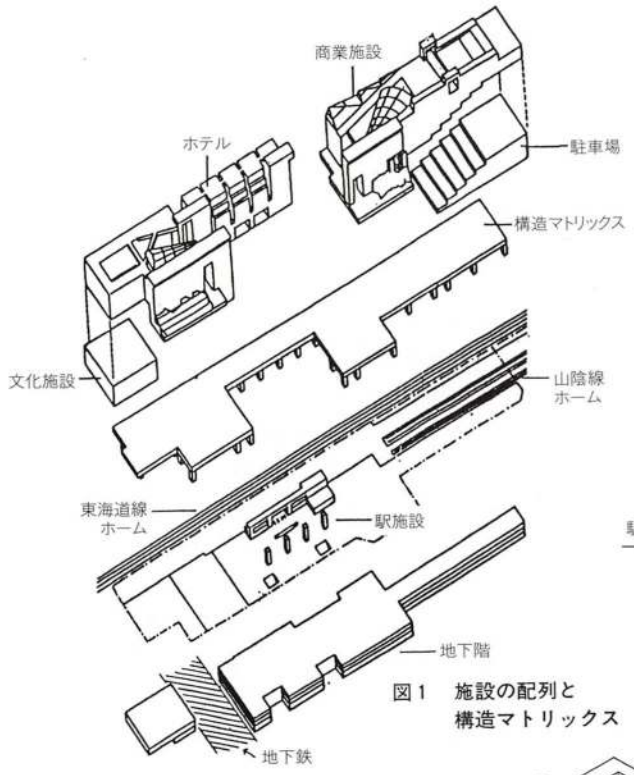


図1　施設の配列と
構造マトリックス

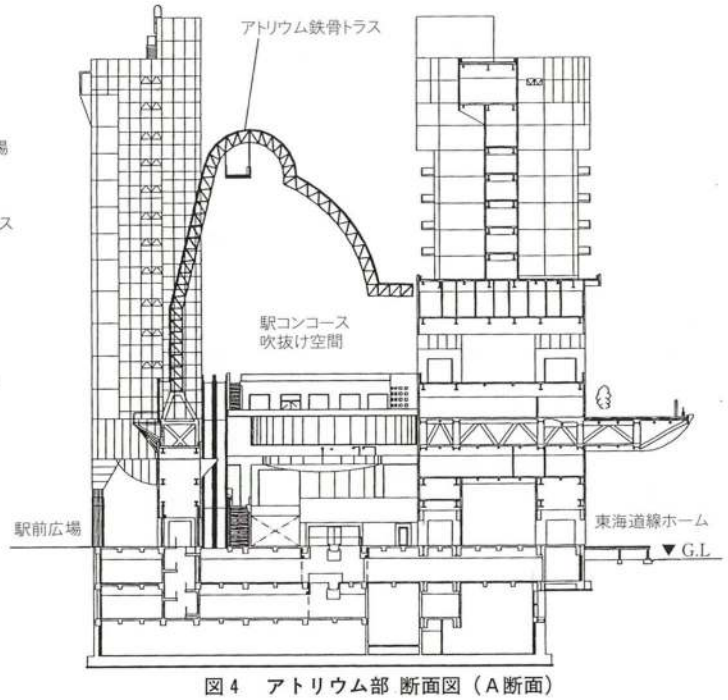


図4　アトリウム部 断面図（A断面）

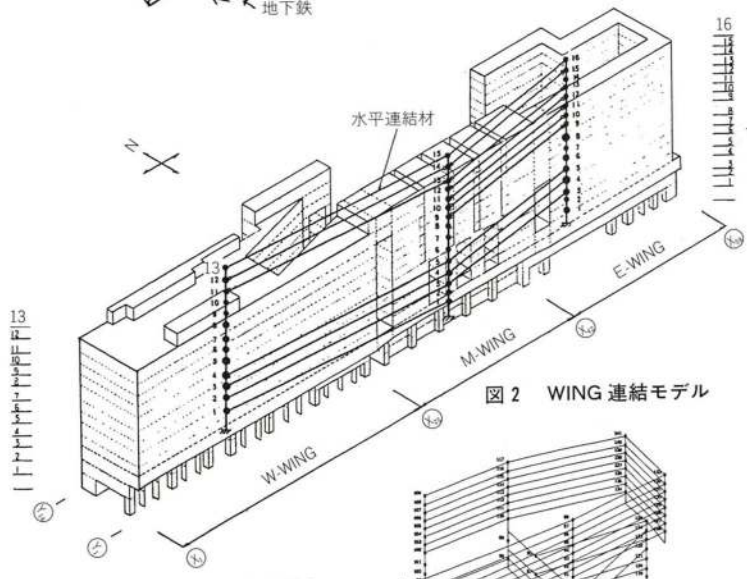


図2　WING 連結モデル

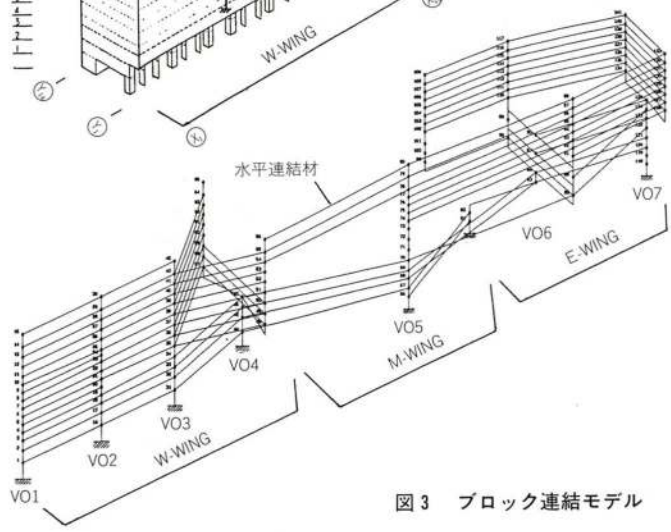


図3　ブロック連結モデル

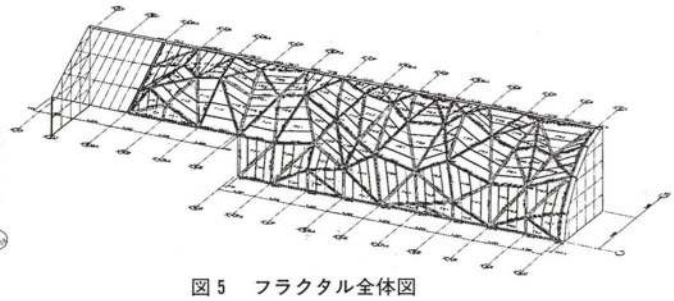


図5　フラクタル全体図

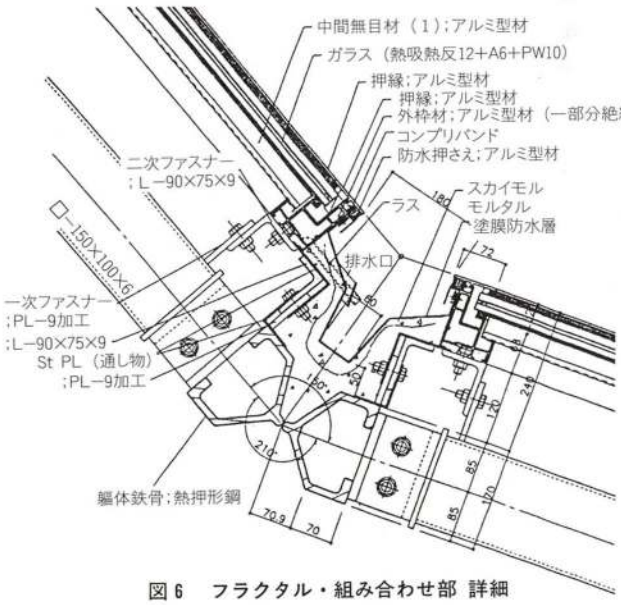


図6　フラクタル・組み合わせ部 詳細

フラクタル

フラクタルはホテルの宴会場のホワイエ空間を覆う東西50m、南北12m、高さ16mの任意な形状の三角形を組み合わせた多面体のガラス屋根である。

熱押し出し法によって製造された異形溝形鋼を用いて三角形のユニットをつくり、凹凸に組み合わせて立体トラスを構成し、ガラス屋根を支えている。この立体トラスはおのおのの三角形のユニットが接する稜線、または谷の全長のみ溶接して全体を組み立て、部材が集中するトラスの節点は力学的につながらなくても成立する、新しいユニバーサルな構造として、基本構想時から検討を続けた。凹凸は建築的な形態をもとに、力学的に必要な梁成を満たす寸法を確認する解析を繰り返し、収斂させて決定した。外観、内観ともにすっきりした納まりをつくることができた（図5、6）。

（にし　しんすけ）

大阪市立大学学術情報総合センターのAGVシステム

東　恒雄
大阪市立大学工学部機械工学科・教授

大阪市立大学学術情報総合センター（以下、センターと略す）の建物は図書館と情報処理センターの複合施設であり、地上10階（一部11階）、地下4階、延べ床面積37,400m²の建物の大半を図書館が占めている。センターの利用者は年間60万人、図書については新着、貸出、閲覧を含めて年間40万冊、一日平均1,500冊の利用が見込まれている。

従来、これらの図書の搬送は手押しブックトラックにより行われていたが、建物の大型化による搬送距離の増大やエレベータの待ち時間の増加、床カーペット化に伴う必要搬送力の増大などは図書の搬送に携わる図書部門職員に過度の負担を強いることになる。そこでセンターには、ブックトラックを、人間ではなくAGV（Automatic Guided Vehicle）により移動させる図書自動搬送システムが開発・導入された。職員または利用者によって図書が積載されたブックトラックを、AGVがその下に潜り込み、リフトアップして指示された場所まで運ぶシステムである。AGVに要求される搬送の種別としては、曜日ごとのスケジュールにのっとり指定時刻に指定場所から指定場所へ搬送する自動運行、随時に指定場所から指定場所へ搬送する半自動運行、およびリモコン操作による手動操作運行がある。

ところで、センターは不特定多数の人が利用し、その中をAGVが無人で移動する。そのため利用者に威圧感を抱かせないようにAGVおよびブックトラックは小型化されたものとなっている。また、後述するごとく、本AGVシステムでは利用者に対する安全性が最優先されている。

AGVシステムによる図書の搬送

AGVは長さ130cm、幅40cm、高さ40cm、自重133kgと小型であり、定格積載荷重は100kgである。ACサーボモータによる4輪駆動により6～40m/minで定速走行し、前進・後進・分岐を行う。また、電源としてDC24Vのバッテリー4個を搭載しており、自動充電方式で1回の充電につき連続5時間の運行が可能となっている。

AGVは2基の専用エレベータに乗ってフロア間を移動する。各フロアでは、床カーペットの下に貼られた磁気テープを路線として、各フロアに設置されたパソコン（制御装置）から無線通信により誘導される。AGVは建物全体で10台導入されており、これらの運行は運行監視制御装置のメインコントローラで運行プログラムによって自動運行されるほか、各所に設置されたAGVコントロールパネルによる半自動運行や光リモコンによる手動操作運行も可能となっている。なお、エレベータ、自動扉等のシステムとはパソコンおよびネットワークを介して自動的に連動するように制御されている。

ブックトラックは80台導入されており、1台について50kgの図書を積載できる。ブックトラックは単に職員による図書搬送として使われるだけでなく、所定の位置（返却ステーション）に止め置かれて、利用者からの返本台として使われる。配架準備作業コーナーから返却ステーションへのブックトラックの配車・回収はAGVにより定期的に行われる。AGVのリフタにはロードセルを装着してブックトラックの重量を検知し、リフトアップ時の重量超過や搬送途中の書籍落下による重量変化をチェックしている。もちろんブックトラックにはキャスターがついており、職員が手押しで通常のブックトラックとして使用することもできる。

AGVシステムの付加機能

利用者の安全確保のために、AGVシステムにはいくつかの機能が付加されている。まず、ビル火災発生時の安全確保として、ビル防災盤から火災信号が発生すると、各階制御装置からの無線通信指令と非常放送の音声認識の独立な2系統で緊急停止するようになっている。その際、防火シャッターやエレベータ出入口など災害時のシステム動作の障害になる場所や避難上障害になる場所は避けて停止するように制御されている。また、通常運行時においても、AGV本体に赤外線障害物センサーを装着して、人や物を感知すれば一時停止により接触を避けるとともに、バンパーに人が接触した際にも緊急停止するようになっている。

その他、AGVには走行状態を示すランプ（フリッカ）やチャイムが装備されている。

*

以上紹介させていただいたAGVシステムは、大阪市立大学、大阪市都市整備局、株式会社日建設計、松下電器産業株式会社の共同で開発されたことを最後に付け加えておきたい。

（あずま　つねお）





AGVが潜り込んだブックトラック

日本瓦一アスカ工法ロック式

石野欣秀
石野瓦工業㈱常務取締役

瓦葺工法には、大きく分けて「土葺工法」「桟葺工法」があるが、従来の和瓦の「土葺工法」「引掛け桟葺工法」では高層建築などへの施工では耐震性、耐風性、安定性等に不安が付き物であった。また、最近は工期が短縮される傾向にあり従来の職人芸的な工法では間に合わない事態が出てきている。「アスカ工法一ロック式」はこれらの問題を解消し、近代建築にも安心して採用していただける様にと開発したものである。

土葺工法

「土葺工法」とは瓦桟を土止め桟として葺土を野地板に固定するためだけに使用し瓦の固定はもっぱら葺土の粘着力に頼った工法で下記のような特徴がある。

[長所]

・野地の不陸を土を置くことで修正できる。
・行儀の悪い瓦でも、ねじれを土で吸収して葺ける。
・断熱性・遮音性が高い。

[短所]

・屋根重量が大きく耐震上不利である。
・経年変化により土が風化すると縦横に瓦のずれが生じる。

引掛け桟葺工法

「引掛け桟葺工法」とは瓦の葺き足に合わせて瓦桟を軒に平行に打ちつけ、瓦を桟木に一枚づつ引掛けて葺く方法である。
下記のような特徴がある。

[長所]

・瓦桟が腐らない限り縦方向の瓦のずれがない。
・土葺に比べて重量が軽く耐震上有利である。
・野地板や瓦桟のむれがすくない。

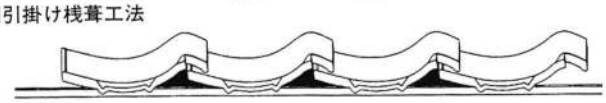
[短所]

・横方向に瓦の安定が得難い。
・瓦のねじれがひどいと葺くことが困難になる。
・野地むらの修正がやりにくい。

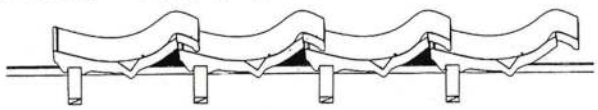
■土葺工法



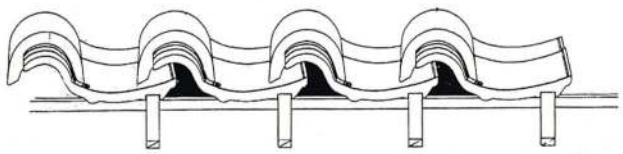
■引掛け桟葺工法



■アスカ工法一ロック式（和瓦）



■アスカ工法一ロック式（飛鳥瓦）



アスカ工法一ロック式

「アスカ工法一ロック式」とは従来の桟葺工法の長所を活かし、さらに改良を加えた桟葺乾式工法の発展形である。

これまでの軒に平行に打つ横桟木に加え、その上に軒に直角の縦桟木を施工して、格子状に桟木のブロックを組み、そこに安定溝を持った専用瓦をロックする（はめ込む）工法である。瓦の裏側には縦桟木を挟み込むための安定溝がありミゾの両側面・底面を合わせた3面固定によりしっかりと桟木にロックするようになっている。

特徴は

耐久性、耐震性、耐風性に優れる

瓦が縦・横桟木にロックされているため地震に強い。
さらに、一枚一枚を釘で固定することで、強風や雪にも強く、いつまでも葺き上げ当初の美しさを維持できる。

建物への負担が少ない

土を使わない乾式軽量構造で、風や雪、地震による瓦のズレが起こりにくいため、雨水の屋根構造への浸水が防がれるなど、建物全体の耐久性にも貢献する。

施工の標準化が可能

品質管理された、ねじれの少ない専用瓦を縦桟木と横桟木にロックするだけなので職人の個人的な技能の差が出ず、ムラのない美しい葺上がりが可能。

工期の短縮が可能

工期的には、瓦を瓦桟木に嵌め込むだけですので従来の葺職人による熟練技能を必要とせず、一般工でも美しい屋根が施工できるため、一つの屋根を何人でも葺ける。そのため人員を大量に投入でき、工期の短縮が可能。

まとめ

尚、現在「アスカ工法一ロック式」は和瓦、飛鳥瓦等に採用され木造住宅から高層建築まで巾広く採用されており、兵庫県南部地震でもその確かな耐震・耐久性が証明されました。今後は瓦葺工法の主流となるものと確信いたして居ります。　（いしの　よしひで）



■アスカ工法一ロック式
（格子状に組んだ桟木のブロックに、安定溝を持った専用瓦をロックする）

好きな小説家の名文を写す(その1)

山田　修
修　建築事務所

1）韓国の鳳停寺を思う

名文とは，なんだろう．一回の読書で意味や情景が，すっと頭の中へ入ってくる文章のことである．ひとことでは「すぐれた文章 or 有名な文章」となるが，その評価は人によって異なる．なかには，名文が迷文になっている小説家もいるからだ．

わたしが名文と思っても，人は迷文と評価する．その逆も真である．要は「自分好みの小説家が好きか嫌いか」という個人的判断によるところが大きい．

わたしの好きな作家は，立原正秋（1926～1980年），司馬遼太郎（1923～1996年），城山三郎（1927年～）の3人である．立原正秋は，いまから20数年前に彼の自伝小説といわれる「冬のかたみに」を読んで好きになった．

その理由は，韓国の鳳停寺（本のなかでは無量寺となっている）のたたずまいと風物が活写され，自分がその寺にいる錯覚におちいったからだ．当時わたしは，韓国古文研究会を主宰（30年間韓国通いを続けている）し，鳳停寺（金羅北道安東郡在，672年創建の古刹．当寺の極楽殿は13世紀の創建になり現存する韓国最古の木造建築物の一つ）が大好きで同寺を，10回ちかく訪問していた．日本でも同じ古寺を同回も訪れたことはない．

そのたたずまいは熟知していたから，作家と自分とを重ねて文章を読み，物を見る視点が似ていた，と思う．

好きな作家の文章は，受身的に読むと，すべてが名文になる．文章上達法の第一歩は名文を読むことだ，といわれるが，読むと書くとは全然異なる行為で，つながりはない，と考える．名文を読むだけでは文章訓練の場とはならない．

そこで「自己流に訂正する」ことを考えた．すなわち「自分が，その小説を書いたつもりで推敲する」行為は，文章を書く訓練につながっていく．「名文を写す」は，原文を写すことではなく「推敲を入れて写す」ということだ．推敲するには，読者の覚めた知的判断力と勇気がいる．



2）「はましぎ」の一文を推敲する

具体例として「3．語意のあいまいな言葉は使わない」でとりあげた立原正秋の「はましぎ」の一文を推敲してみる．

わたしは，次のように写してみた（・印が推敲箇所で〔　〕印は抹消部分）．

『(前略)

彼が海岸を歩きながらさがし求めた言葉には，役に立たないものがかなりあった．それは，ふだん使いなれている言葉なのに，文章にしてみると，語意あいまいなものがある．これは，あきらかに，言葉を論証せずに使っている証拠であった．

〔また,〕ある言葉を文章に入れてみると，その言葉に入れたがために文章があいまいになることがある．これは，その言葉はきちんとしているのに，前後をつなぐ文脈が明確でないためであった．

〔また,〕なるべくじょうずな表現をしようと思って書いた文章が，強調しすぎたがためにうそに見えることもある．

〔また,〕いくら言葉でだませても，言葉の裏にうそがある，そんな言葉もあった．

〔また,〕ひどいのになると，これから論証しなければ問題があるのに，すでに論証されたものとしてその前提のものとに論証する言葉がある．批評家の文章にこういうものが多かった．(後略)』

推敲個所は，つぎの4つである．

① 3箇所の「あった」を「ある」にした．こうすると過去形と現在形のリズムが交互にくり返され，文章に活力が生じる．現在形で表現しても文の流れより過去だ，ということは分かる．

② 文中の4つの「また」は抹消した．接続詞は，とった方が文章に迫力が出る．その代わり，また以下の文章は改行した．立原自身がいっている「文章は一字でも削りとることなり」を実践してみた．

③ 「あいまい」「じょうず」「うそ」「だます」は，ひら仮名を用い，柔らかい表現（視覚的観察）とした．

④ 「普段」は副詞ゆえ「ふだん」とした．代名詞・形容詞・副詞・接続詞は，ひら仮名がきがよい．その代わり「つか」を「使」として，ひら仮名の中に漢字一つを使い歯切れをよくした．2回目の「使」は前の使に倣った．

立原正秋は「あった」「また」を重ねて，論証された言葉を強調するとともに，小説家の悩みを激しく訴えたかったのかなァ，とも考えた．

以上は，わたしの独断専行の文章訓練法の一手段で他意はない．名文が迷文に推敲されたところは「素人の遊びの場」としてお許しを願いたい．

(やまだ　おさむ)

写真　鳳停寺の鐘楼

自然の太い丸柱（アカマツ）を使った二層吹きぬけの鐘楼である。外観は野性的でらいらく、内観は凹凸でぬくみ、の感じを受けた。

うす暗い一層の柱間を通って石段を登り、明るい大雄殿前の広場に出る。目線の変化につれて風物の明暗が反転した。韓国の寺は、全般にこのようなドラマチックな演出となっている。

設計図の理解 −1−

河津隆之
河津隆之事務所

高置水槽廻りおよび下階に向かって

今回から、設備図そのものの話に入ります。建物の規模は延べ3,000m²、地下1階、地上5階程度の事務所ビルで、給水方式は高置水槽方式（建築設備実用語辞典：井上書院によれば「給水方式の一種で、配水管の水圧が不足したり、一度に多量の水を使用する場合に用いる。受水槽に水を受けてからポンプにより高置水槽に揚水し、それ以下は重力により給水する」とあります）としていますので、お手もとにこの方式の設備図があれば、ぜひ図を広げて以下の文章を読んで下さい。

その設備図で屋階の屋上平面図を見ます。屋階の上に塔屋があればその屋上で、設備設計図のとじ方からは終わりの方だと思います。このように屋上の方から見ていった方がわかりやすいようで、ここに高置水槽が描かれているはずです（高置水槽方式の最大の短所は、水槽類の維持管理が悪いと水質汚染につながる恐れがあることですが、最近のある調査報告によれば、このような規模の事務所ビルでは依然として約67%がこの方式になっているようです）。

また、特記仕様書の工事種別のなかに水系の消火設備があれば、消火用高置水槽もこの近くに設置され、高置水槽の給水主管から分岐給水しているはずです。

この高置水槽の設置位置には法規制があり、塔屋屋上に設ける場合は、水槽とパラペットとの間の距離は0.6m以上が必要ですし、その離れが1.0m以下の場合は高さ1.1m以上の安全柵（手摺）を設けることなどがあります。屋上に高い（2.0m以上）架台を設置しその上に高置水槽が置かれる場合は、より厳しい規制となります。

しかし、高置水槽がどれくらいの高さの架台上に設置されているかは、普通、平面図では見えてきません。特記仕様書の機器表に高置水槽の外形寸法とともに、架台の高さなどが示されているのが一般的ですから、機器表にも目を通す必要があります。記述がない場合は系統図もチェックします。

さて、屋上平面図もしくは塔屋屋上平面図で高置水槽廻りを見ます。揚水ポンプよりの揚水管や水槽からの給水主管（揚水管も給水主管もHASS 001の図示記号では同じですが、設備図によっては給水管を1点鎖線、揚水管を2点鎖線で描いているものもあります）、オーバフロー管、水槽の排水管が取り付けられているのがわかります。

これには、特記仕様書に書かれた図示記号（凡例・シンボル）による品名をしっかり頭に入れ、系統図と見比べながら作業をします。なお、揚水管と給水主管が明確でない場合は給水主管には弁が取り付けられており、揚水管にはありませんから、これで区別できます。

また、この平面図、系統図より弁やフレキシブルジョイントなどが取り付けられているかどうか、寸法はいかほどなのかもわかります。

図1を見て下さい。高置水槽のオーバフロー管と排水管は一緒に接続して先端に防虫網を取り付け、パラペットの内側にある雨水排水溝に放流し、揚水管と給水主管は塔屋屋上を転ばし配管で鳩小屋に入り、**図2**の系統図では塔屋内部を立ち下がって6階の天井に配管されているのがわかると思います。

先に触れました皆さんのお手もとにある設備図ではいかがでしょうか。揚水管、給水管を色分けしながら色鉛筆でたどって見て下さい。

いま、6階建を想定しながら話を進めていますが、設備図は基準階に移ってくるはずです。塔屋からたどってきた給水管と揚水管は、一般にパイプシャフト内に納まっています。

このパイプシャフトを先の建築設備実用語辞典では、「建物内の上下階を接続する配管をまとめ、閉鎖した空間内に収容するようにした上下階をつなぐ垂直の筒状部分」と記していますが、この中には揚水管、給水立て管のほかに各階の排水横枝管を接続しながら立ち下がっていく排水管あるいは各階からのループ通気管を受けながら立ち上がっていく通気立て管、伸頂通気管が納まっているのを図示記号と系統図より読みとりながら地階平面図へと移行していきます。

（かわず　たかゆき）

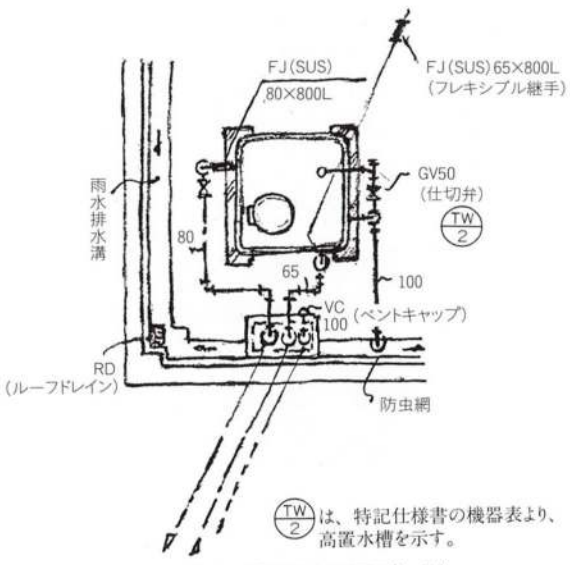


図1　塔屋屋上平面図(一部)

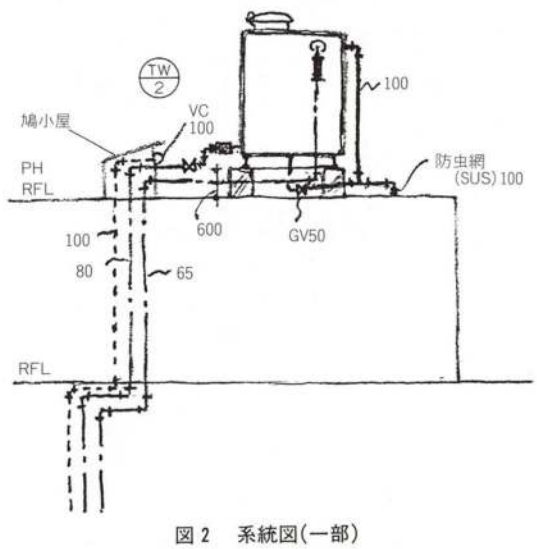


図2　系統図(一部)

30's EYE(第21回)松本正・梅村克〈F.O.B.アリミテ共同主宰〉

SUPER ARCHITECTURE〜近代末期の建築夜話〜

米井 寛
東畑建築事務所

30'sEYEシリーズ21回目は、初めて2人のゲストを招き、なごやかな雰囲気の中で「近代末期の建築夜話」と題した講演会を行った。



左・梅林克氏、右・松本正氏

F.O.B.アリミテとは

建築家3人のパートナーシップによる事務所としてF.O.B.アリミテは96年に設立された。松本正氏は京都造形芸術大学専任講師を務める建築史家でもあり、一方の梅林克氏は高松伸建築設計事務所出身でデザイン面の責任者である。また、もう一人の遠藤昭彦氏は同じく高松事務所の出身で主にCGなどのコンピューター部門を担っている。

イタリアの不思議建築

講演の前半は、ミラノ工科大学への留学経験のある松本氏から、主に18〜19世紀の「イタリアの不思議建築」が紹介された。氏がとりあげた建築の一つは、後期バロックの建築家ヴィットーネ(Vittone, Bernardo：1702-1770)によるブラの教会(1742年)である。当時のヨーロッパには、ロージェの「プリミティヴハット」のような機能主義的な建築観が現れ、すでに反バロック運動も起きていた。こうした前近代と近代のはざまにあって、この建築はイタリアの「最後のバロック建築」であると氏は位置づける。そしてこのあとのイタリアは、様式建築から抜け出せないまま新たな機能論を受け入れるという「ヘビーな状況」に入ったという。

このヘビーな時代を象徴する建築家としてあげられたのがアントネッリ(Antonelli, Alessandro；1798-1888)であった。彼は19世紀末のトリノに165mという当時世界一の高さを誇る「アントネッリの塔」と呼ばれる尖塔建築を完成させる。これは、柱梁式という近代的な構造をもってはいたが外部は様式建築の断片をまとった、当時のイタリアのアンビバレントな様相を示すものであり、しかもすぐに先進工業国フランスのエッフェル塔に高さ世界一の座を奪われてしまう。これ以降イタリアの建築家は「古典言語」と訣別し、「未来派」などを経て、急速に近代建築へと移行していったという。

これらの「不思議建築」の紹介とともに松本氏は、機能主義としてのモダニズムはコルビュジェ、ミースよりさらに遡って捉えねばならず、またポストモダニズムも、様式を相対化するという意味では19世紀の新古典主義に同じであると述べる。そして、この20世紀末の煮詰まった状況は19世紀末に似ていなくもないが、20世紀のモダニズムやポストモダニズムの領域にとどまって新たな解答を見いだそうとしても、ここに見た「イタリアの不思議建築」のようなしんどい結果を招くだけだというのである。つまりは、様式的な言語を捨てて一気にモダニズムへと移ったイタリアの合理主義者のようなドラスティックな変化が必要であるということかもしれないが、松本・梅林両氏は、まさにこうした歴史観を踏まえた上で、現状に拘泥しない新たな建築のあり方を求め続けているように思われた。

オートマティックな建築形態

次に両氏からいくつかの建築作品や進行中のプロジェクトの紹介があった。その中で、建築形態のもつ記号や作家の恣意性をできるだけ遠ざけながら、機能的で即物的な形態の操作でものをつくりたいという2人の建築観が何度か語られた。例えば東京都心の小規模な住居兼アトリエである。「AURA(オーラ)」では、2枚の壁のずれとそこに架かるスピンした梁、そして壁の間から透過する光によって建築が成り立っており、「オートマティズム」ともいわれるような即物的なつくり方を意識的にやっているという。

また、F.O.B.の事務所である「ORGAN」は、螺旋状のチューブを必要な内部の機能と面積に従って切断し組み合わせていくという構成である。このことはオフィスビルに特有の均質性を打ち破ることでもあり、結果として10人の所員には固有の「それぞれの場所」が出来上がっているという。

震災復興への提案

阪神大震災のあと2人は「関西建築家ボランティア」でも活動しているが、その中でユニークな「コンテナによるプロセスハウジング」が提案されている。これは実現には至らなかったものの、コンテナを仮設的に住居として利用しながら、同じ場所で漸次本設に移行していくという合理的なシステムの提案であった。

また、被災地の住宅復興プロジェクトも進行中である。「ハウスイン ウオザキ」と雑誌等で紹介されているものがそれで、3世帯の共有空間を設定した残りの敷地を「庭」として扱い、従前の「お屋敷の庭」を別のかたちで蘇らせようとしている。

建築の拡張と新たな建築家像

建築を単体ではなく風景や地形といった広い領域の中で捉えたいということも指向されており、ある自治体のまちづくり案では、都市のインフラとしての情報空間を整備しながら、地勢をそのまま生かした建築をネットワーク化する提案が行われている。

また、事務所としてビデオ制作から家具のデザイン、建材の輸入までも手がけながら、従来とは異なるフィールドに踏み込んだ新たな建築家のあり方が問い続けられている。

*

会場からは、「少しずつずれながらやっているパートナーシップが理想的すぎる」という意見も聞かれたが、建築の歴史とデザインという当初の立脚点の異なる2人の(決して喧嘩をしないわけではないそうだが)すぐれた役割分担が、建築デザインに明解な意味を与え空間の質を高めていることが、参加者には十分理解されたと思われる。今後両氏が建築と建築家の領域をどこまで拡張し、「近代末期」をどのように乗り越えていくのかを注視したい。 (よねい ゆたか)

日 時／1996年11月22日(金) 18：30〜21：30
会 場／日本建築協会サロン 参加者／25人

建築家に何ができるか―阪神大震災・被災地の現場から考える(2)

野崎隆一「白地地域復興の現状」

増田昌彦
泉南市事業部都市計画課参事

震災から2年以上が経過し、被災地に建つ建築やまちづくりの内容がより一層問われる時期になってきた。若い会員の集い小委員会では、この時期に、その担い手である「建築家」の果たすべき役割に焦点をあてて、復興のまちづくり、ひいてはこれからの建築や都市のあり方を展望していく目的で「建築家に何ができるか」シリーズを企画している。その2回目は建築家の野崎隆一氏を講師に迎えた。

野崎氏は自宅、アトリエとも神戸であり、震災直後から関西建築家ボランティア（以下、関ボラ）の中心的メンバーの一人として、建物診断に始まる様々な復興支援活動を行ってきた。また、魚崎地区をはじめとした、行政の事業区域から外れた、いわゆる白地地域において、被災や復興状況調査および市場や商店街の再建、住宅の共同化、被災マンションの再建等数多くのプロジェクトに取り組んでおり、これらの復興まちづくりにおける取り組みで日本建築士会連合会まちづくり特別賞を受賞している。

講演は、白地地域の復興状況やその過程そのものについてというよりも、白地地域での活動を通しての「まちづくりと建築家の役割」に論点をおいた形で進められた。

まちづくりのクライアントはコミュニティ

復興にあたり、個々の生活再建と同時に、以前にも増して住みやすく魅力あるまちをつくっていくためには、建築家の果たすべき役割が重要であることはいうまでもない。しかしながら、まちづくりについてもこれまで建築家のサイドから数多くの提案が行われてきたにもかかわらず、なかなか実現に結びつかない一方で、被災した住宅地でハウスメーカーによる住宅が溢れていることに象徴されるように、魅力あるまちなみが再生されているとは言い難い。震災復興に限らず、まちづくりの仕事は、限定された敷地に建築を計画、デザインしていく場合とは明らかに異なる。特定のクライアントではなく、コミュニティを相手にしなければならない。そのなかで建築家の持つ、空間を構想する能力をまちづくりに十分反映していくためにはどうすればよいのか。

復興まちづくりの経験から

野崎氏は自身のこれまでの経験から、いくつかの問題を提起した。

一つはまちづくりにおける建築家の職能の問題。建築家の職能を、具体的な提案を行うことによって代価を得ることと規定した場合、特に被災地のまちづくりにおいては提案に至る前段階の調査や相談、調整などのコーディネート的な仕事にどこまで関わるのかということが問題になる。関ボラ内部でも早い段階で、建築家であるからにはまちづくりについてまず自分のイメージを提示、提案すべきであるという意見と、一方でまず調査を行い、それをもとに地元の人々がどんなまちに再建したいか、そのコンセンサスを固めてから具体的な提案をすべきという意見に分かれて議論がされたという。

野崎氏は後者の考え方で、被災地におけるまちづくりで建築家が役割を果たしていくためには、自らの職能を固定的に捉えるのではなく幅を広げて、例えばプランナーや他の専門家とチームを組みながら、その場その場に応じたスタンスを取っていくことが求められるという。

今回は、これと重なって「ボランティア」としての活動をどこまでやるかという問題もあった。行政の事業区域から外れた区域では、神戸市が「まちづくり人材センター」を設立するまでは、まちづくりの立ち上がり段階での建築家やプランナーの参画を支援する仕組みはなく、ボランティアに頼るほかはなかった。ボランティアでは限界があり、このような仕組みを充実させることが必要である。

もう一つは建築家やプランナーが提案を行う場合の受け手の側の問題。ある地区を調査し、まちの状況を説明したうえで、次の段階である計画の提案を行っていくとしても、コミュニティを代表する組織ができていなければ、提案自体が空振りに終わってしまう。地元の「組織」との対応のなかで提案していくことが重要で、その組織が不明瞭な状態では提案していくことはできない。区画整理に代表される行政の復興事業には、プランがあってもそれを具体化させていくためのプログラムがなかった。すなわち、「まちづくり協議会」等の組織をしっかり立ち上げていくこと（また普段からつくっておくこと）が不可欠であると改めて実感しているという。

建築家をとりまく社会

視察のため神戸を訪れたAIA（アメリカ建築家協会）の役員から聞いた話として、アメリカの建築家は建築の仕事のほかに、教育やコミュニティ等の地域活動を行っているということが紹介された。野崎氏の講演での話と合わせて、建築家が日常的に地域社会に目を向け、まちづくりについてもっと積極的に意識し、関与していくべきではないか、また同時に建築家をとりまく様々な環境において、建築家の持つ能力を十分生かしうる仕組みを地域社会や行政が創り出していくことが大事ではないか、と改めて認識した。

「愛への奉仕」

後半のディスカッションのなかではほかにも複数コンサル制の提案や、まちづくりを通してみる民主主義そのもののあり方の問題等、多岐にわたって意見交換がされた。

そして、最後に吉阪隆正の論文『三つの建築家像』から引用した話で締めくくられた。建築家の姿として「用への奉仕」「筋への奉仕」「愛への奉仕」の三つがあり、そのうち一つしか選べない。吉阪が最も望ましいとする「愛への奉仕」、つまりこの場合は近隣の人々への愛ということだが、この途を選ばなければ被災地では活動できなかったという。多くの示唆に富む話を聞かせていただいたが、結びの話はとりわけ印象に残った。（ますだ　まさひこ）



日時／1997年1月24日（金）18：30～20：45
会場／日本建築協会サロン　参加者／33人

GBRCニュース
GENERAL BUILDING RESEARCH CORPORATION OF JAPAN

財団法人 日本建築総合試験所
〒565 吹田市藤白台5-8-1
TEL.06-872-0391 FAX.06-872-0784
業務時間 9：00～17：15

平成9年度の事業計画

はじめに

戦後の発展を支えてきた我が国の社会システムは現在、国際化、高度情報化の急速な進展、本格的な高齢化社会の到来等により大きな転換を迫られつつあります。

このような情勢に対応するために、当財団は試験所機能の拡充・整備と技術水準の向上、国際的な試験品質保証システムの導入等に努めているところであります。

平成9年度においても、関係各界の指導と協力を得て、引き続き積極的に従来の方針を維持します。

以下に平成9年度の主な事業計画を紹介します。

受託試験等事業

平成9年度における受託試験等事業は、次のとおり実施します。

(1) 強度、耐風、耐火・防火、遮音、断熱等の受託試験業務
(2) 建築物の安全性等の受託調査研究事業
(3) 建築物の構造等の安全性を審査する建築技術安全審査事業
(4) ISO 9000適合に関する審査登録事業
(5) JIS工場に対する工業標準化法に基づく公示検査事業
(6) 大阪府下特定行政庁連絡協議会の「コンクリート工法に関する指導要綱」に基づく研修事業
(7) 情報機関誌（「GBRC」）発行事業
(8) 建築関係学・協会への協力

自主調査研究事業

当財団が独自に、または、他の機関と共同して行う調査研究で、平成9年度に行う主要なものは、次のとおりです。

(1) 新JIS対応のための直張り防音木質床の接着工法による軽量床衝撃音レベルの差異の調査
(2) 火害を受けたコンクリート系構造物の診断手法の研究（継続）
(3) 瓦に作用する風荷重に関する研究（共同研究）（継続）
(4) コンクリート構造物の補修性能評価に関する研究（継続）

施設整備

1）神戸試験室の移転

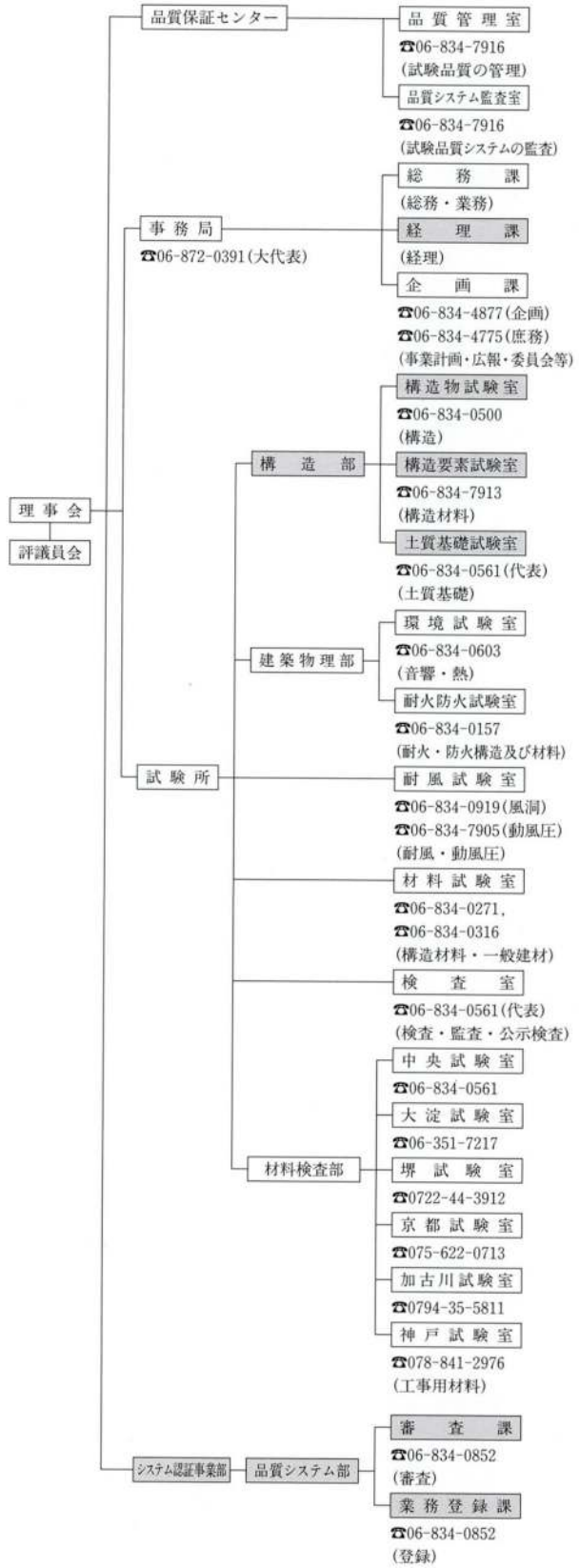
阪神大震災からの復興のための建設工事の増加に合わせて、平成8年4月に急遽仮設の試験室を開設したが、その借地期限が平成10年3月末日で終了するため、神戸市内の新用地に移転します。

2）既設分施設整備

平成9年度は、従来から推進している試験精度の維持・向上及び試験業務の省力化、迅速化等に係る施設の整備・拡充を57件（建築関係7件、機械装置関係40件、什器備品他関係10件）行います。

【組織の一部変更】

当財団では、ISO 9000適合に関する審査登録事業を開始するため及び業務の効率化・能率化を図るため、平成9年4月1日付で右図のとおり組織を一部変更（　部分）しましたので、お知らせ致します。



㈶日本建築総合試験所　組織図

BOOK STATION
ブックステーション

これからの安全都市づくり
阪神・淡路大震災の教訓を踏まえて

紙野桂人 監修
日本都市計画学会関西支部
震災復興都市づくり
特別委員会 編著

学芸出版社
1995.10.10刊
B5W判　160頁　3,502円



復元模型安土城
宮上茂隆 作

草思社
1995.12.11刊
B5判　85頁　3,900円



まちづくりイベント・ハンドブック
建設省まちづくり事業推進室
監修
イベント研究会 編著

学芸出版社
1996.1.25刊
B5W判　224頁　2,987円



日本の都市環境デザイン '85〜'95
都市環境デザイン会議 編

学芸出版社
1996.4.10刊
A4変形判　160頁　4,326円



阪神淡路大震災住宅内部被害調査報告書(最終報告書)
日本建築学会建築計画委員会・
兵庫県南部地震調査研究部会・
建築内部空間における被害ＷＧ
まとめ

日本建築学会事務局資料頒布所
1996.9刊
A4判　273頁　1,800円



地震と免震
耐震の新しいパラダイム
大橋雄二 著

朝倉書店
1996.10.4刊
A5判　258頁　3,296円



現代建築集成／研究所・研究施設
LABORATORIES &
RESEARCH FACILITIES

メイセイ出版
1996.11.20刊
A4変型判　224頁　16,000円



SD選書229
サウンドスケープ
その思想と実践

鳥越けい子 著

鹿島出版会
1997.3.25刊
B6判　212頁　1,854円



平成8年度 建築科優秀卒業生表彰

日本建築協会では、昭和27年より全国の工業高等専門学校、高等学校、専修学校などの建築科の優秀卒業生に対し、学校の推せんにより、本会会長の表彰状を授与しているが、平成8年度卒業生のうち、232校の265名を表彰した。

工業高等専門学校（9校9名）

釧路工業高等専門学校　対馬かおり 君
石川工業高等専門学校　安田　和代 君
明石工業高等専門学校　水野　あい 君
米子工業高等専門学校　薮内美穂子 君
呉工業高等専門学校　沖本　千枝 君
徳山工業高等専門学校　白神　博昭 君
有明工業高等専門学校　野正千恵子 君
八代工業高等専門学校　松本　健志 君
都城工業高等専門学校　石躍　健志 君

高等学校（195校207名）

旭川工業高等学校　平吹　友美 君
旭川実業高等学校　多田　友貴 君
小樽工業高等学校　村居　千恵 君
同　（定時制）　猪狩　剛 君
帯広工業高等学校　兼古　照夫 君
釧路工業高等学校　奥野　直子 君
札幌工業高等学校　井川　宏美 君
同　（定時制）　鷲尾　紀幸 君
苫小牧工業高等学校　立花将太郎 君
同　（定時制）　菊地　拓巳 君
名寄工業高等学校　山本　聡 君
函館工業高等学校　越田　陽子 君
同　（定時制）　中村　純 君
美唄工業高等学校　吉原　昇一 君
室蘭工業高等学校　堀田　圭二 君
留萌工業高等学校　寺西　寿史 君
青森工業高等学校　長尾　崇志 君
同　大原　真 君
弘前工業高等学校　長内　智絵 君
同　原田　和也 君
光星学院野辺地工業高等学校　山田　泉 君
十和田工業高等学校　竹ケ原　仁 君
大船渡工業高等学校　佐藤美穂子 君
久慈工業高等学校　畑中　真紀 君
盛岡工業高等学校　小原史知雅 君
秋田工業高等学校　戸澤麻希子 君
能代工業高等学校　庄司　弘喜 君
鶴岡工業高等学校　櫻井　崇 君
米沢工業高等学校　遠藤　輝 君
会津工業高等学校　安部　浩幸 君
松韻学園福島高等学校　山田　隆浩 君
日本大学東北高等学校　永井　裕之 君
大宮工業高等学校　皆川　誠二 君
宇都宮工業高等学校　上田　聖 君
真岡工業高等学校　谷田部恭治 君
白鷗大学足利高等学校　内山　禎 君
足利工業大学付属高等学校　柳澤　雅俊 君
桐生工業高等学校　新井　博文 君
館林商工高等学校　柄沢　健一 君
高崎工業高等学校　伊藤　彩子 君
同　原田　健一 君
同　（定時制）　萩原　伸一 君
長野原高等学校　松井　郁洋 君
藤岡工業高等学校　木暮　直也 君
大宮工業高等学校　石元　孝之 君
前橋工業高等学校　公家　克徳 君
同　（定時制）　北爪　美和 君
川越工業高等学校　金子　悦久 君
武蔵越生高等学校　中城　儀貞 君
市川工業高等学校　鈴木　善暁 君
蔵前工業高等学校　石黒　幹也 君
墨田工業高等学校　金杉　和彦 君
田無工業高等学校　宮本　隆雄 君
関東第一高等学校　山口　信治 君
昭和第一学園高等学校　印部　誠治 君
日本工業大学付属東京工業高等学校　船橋　拓馬 君
小田原城北工業高等学校　若松　伸明 君
同　鈴木　克宗 君
神奈川工業高等学校（定時制）　中山　周平 君
鶴見工業高等学校　佐々木孝臣 君
同　（定時制）　松田　太志 君
横須賀市立工業高等学校　菊田　文彦 君
同　小菅　正弘 君
横浜工業高等学校　神田信太郎 君
北富士工業高等学校　小林　寛史 君
甲府工業高等学校　井上みゆき 君
同　（定時制）　石川　哲久 君
同　〃　望月　美和 君
飯田長姫高等学校　小塚みすず 君
池田工業高等学校　浅野　佳章 君
上田千曲高等学校　滝澤　充 君
長野工業高等学校　宮下　太一 君
新発田南高等学校　須藤　里香 君
静岡工業高等学校　（定時制）　中野　勇 君
島田工業高等学校　櫻井　栄治 君
修善寺工業高等学校　小林　一馬 君
天竜林業高等学校　鈴木　正光 君
沼津工業高等学校　佐藤　直也 君
同　（定時制）　伊山　宏典 君
浜松工業高等学校　高瀬光太郎 君
同　（定時制）　高林　郁夫 君
愛知工業高等学校　田中　将実 君
一宮工業高等学校　各務　康 君
佐織工業高等学校　山本　宜夫 君
豊橋工業高等学校　渡邊　伸詞 君
半田工業高等学校　渡邊　裕文 君
名古屋市立工芸高等学校　梶田　章 君
名古屋工業高等学校　田中　圭輔 君
大垣工業高等学校　安田　礼子 君
可児工業高等学校　石丸　博康 君
岐南工業高等学校　西川　陽市 君
岐阜西工業高等学校　岩間　貴範 君
高山工業高等学校　牛丸　泰宏 君
中津川工業高等学校　市岡　孝明 君
関商工高等学校　加藤　明子 君
伊勢工業高等学校　大西　由夏 君
上野工業高等学校　千歳　信一 君
津工業高等学校　別所　理恵 君
四日市工業高等学校　藤田　真司 君
同　（定時制）　小林　園子 君
敦賀工業高等学校　橋本　安弘 君
福井工業大学付属福井高等学校　浅野　天仁 君
小松工業高等学校　北　敏光 君
珠洲実業高等学校　表　良伸 君
羽咋工業高等学校　吉野　美砂 君
金沢市立工業高等学校　濱田有希子 君
同　（第二部）　安江　昭一 君
高岡工芸高等学校　横田　明子 君
富山工業高等学校　金原　成賢 君
八幡工業高等学校　小山　裕子 君
彦根工業高等学校　藤田　里沙 君
今宮工業高等学校　荒山　啓司 君
同　（定時制）　穐西智栄子 君
西野田工業高等学校　岡崎　哲朗 君
大阪市立工芸高等学校　筒井　洋一 君
都島工業高等学校　下園　啓 君
都島第二工業高等学校　大西　慎也 君
堺市立工業高等学校　輪田　勇久 君
大阪工業大学高等学校　上村　剛史 君
東住吉工業高等学校　住吉　大輔 君
伏見工業高等学校　中田　直人 君
奈良工業高等学校　今西　啓祐 君
吉野高等学校　白井　祐介 君
新宮高等学校　仲　康剛 君
和歌山工業高等学校　皿山　直人 君
和歌山第二工業高等学校　小池　淳司 君
龍野実業高等学校　寺井　信夫 君
〃　馬躰　千晴 君
東播工業高等学校　南庄　貴雄 君
豊岡実業高等学校　平山　紋子 君
兵庫工業高等学校　上田　努 君
境港工業高等学校　坂田　晴彦 君
鳥取工業高等学校　永美　康仁 君
出雲工業高等学校　高橋　諭 君
江津工業高等学校　和田　誠 君
松江工業高等学校　原　竜太郎 君
津山工業高等学校　春木亜希子 君
水島工業高等学校　田淵　章 君
山陽高等学校　岩本　美恵 君
広島工業高等学校　東　真喜子 君
福山工業高等学校　谷本　孝泰 君
如水館高等学校　橘高　沙織 君
下関中央工業高等学校　礒部　隆昭 君
萩工業高等学校　中野　健雄 君
柳井工業高等学校　奥永　政之 君
多々良学園高等学校　田中　黙 君
早鞆高等学校　橋本　健治 君
鴻城高等学校　山本　徳宏 君
坂出工業高等学校　大熊　正幸 君
多度津工業高等学校　森　充美 君
高松工芸高等学校　瀬川　理恵 君
貞光工業高等学校　田中　裕樹 君
徳島工業高等学校　村田　晋也 君
徳島中央高等学校　小倉　紀和 君
安芸工業高等学校　苅谷さおり 君
高知工業高等学校　村上麻里子 君
同　岡田　磨衣 君
同　（定時制）　佐々木　建 君
宿毛工業高等学校　山崎　晶子 君
帝京第五高等学校　大藪　高利 君
東予工業高等学校　渡部　純也 君
松山工業高等学校　玉井　志保 君
同　（定時制）　大野　嘉包 君
吉田高等学校　上甲　志保 君
松山聖陵高等学校　板倉　良寛 君
浮羽工業高等学校　中尾　涼子 君
田川工業高等学校　平嶋　寿俊 君
戸畑工業高等学校　重岡　誠志 君
福岡工業高等学校　堀内　太平 君
大牟田高等学校　大原　龍介 君
九州工業高等学校　山本　耕平 君
九州産業大学付属九州産業高等学校　熊本　幸伸 君
筑紫台高等学校　内田　修央 君
鳥栖工業高等学校　原　良子 君
佐賀中央工業高等学校　今村　真吾 君
佐世保工業高等学校　日高　正海 君
同　（定時制）　尾崎　伸也 君
島原工業高等学校　田中　充晴 君
長崎工業高等学校　尾崎　達博 君
小川工業高等学校　宮坂　美穂 君
球磨工業高等学校　西　美穂 君
熊本工業高等学校　福島　朋子 君
同　（定時制）　永田　隆二 君
水俣工業高等学校　新立　美幸 君
文徳高等学校　竹原　隆総 君
開新高等学校　甲斐　祐樹 君
同　高沢　和宏 君
同　橋本　泰行 君
同　宮崎　淳也 君
同　森山　隆明 君
八代第一高等学校　黄木　宏一 君
大分工業高等学校　工藤　健治 君
鶴崎工業高等学校　渡邊　弘治 君
日田林工高等学校　伊藤　隼人 君
楊志館高等学校　日野　利治 君
小林工業高等学校　西　利広 君
日南工業高等学校　河野　将宗 君
日向工業高等学校　須田　千春 君
都城工業高等学校　大村　拓也 君
宮崎工業高等学校　鳥海　正彦 君
同　（定時制）　中松　輝 君
出水工業高等学校　桑原謙太郎 君
加治木工業高等学校　玉島　大和 君
鹿児島工業高等学校　鉾之原英子 君
沖縄工業高等学校　石川　稔 君
北部工業高等学校　上間　勇人 君
美里工業高等学校　南風原長稔 君

専修学校（28校49名）

青山工学専門学校札幌校　引地　幹子 君
北海道中央工学院専門学校　田嶋　誠 君
同　新井　鐘守 君
東北工科情報専門学校　山崎じゅん 君
仙台デザイン専門学校　小林　和也 君
青山製図専門学校　堀江　裕之 君
東京科学電子工業専門学校　井口　祐一 君
東京製図専門学校　檜森千賀子 君
読売九州専門学校　浅原　志保 君
同　岡村　悦嗣 君
同　蔵本　裕矢 君
同　白川　太一 君
同　小谷　寿美 君
同　鹿瀬島竜太 君
同　藤崎　悦子 君
同　朝部香代子 君
同　原田　裕也 君
同　古谷　誠司 君
読売福岡理工専門学校　岩野　禎輝 君
同　小柳真紀子 君
同　篠原　亮平 君
同　中園　雄一 君
同　山本　常義 君
早稲田大学専門学校　河野　和也 君
浅野工学専門学校　飛田　信二 君
金沢科学技術専門学校　表　真紀 君
同　高田　一征 君
北陸工業専門学校　村江　宏之 君
愛知工業専門学校　柴田　敬一 君
東海工業専門学校　藤村真由美 君
東海工業専門学校金山校　佐々木拓朗 君
大阪建設専門学校　堀　さゆり 君
同　稲津加奈子 君
同　村上賢二郎 君
同　河口　忠雄 君
大阪工業技術専門学校　荒木ゆかり 君
同　和田　雅章 君
同　（二部）　板東　努 君
修成建設専門学校　黒田　浩文 君
同　毛利　恭子 君
同　山西　公朗 君
中央実務専門学校　伊藤　優子 君
京都建築専門学校　沼田　成子 君
同　（二部）　山田　博之 君
兵庫科学技術専門学校　河　真輔 君
岡山科学技術専門学校　岡部　大吾 君
九州工業技術専門学校　越智　一夫 君
佐賀工業専門学校　白倉　秀則 君
宮崎ユニバーサルカレッジ　日高　樹里 君

第4回
日本建築協会賞

日本建築協会の創立70周年（昭和62年）を契機として、建築界における総合団体としての性格にもとづき、建設に関わるあらゆる分野において社会に貢献した団体または個人に対して、その業績を讃えるとともに、わが国文化の向上、公共の福祉に寄与することを目的として創設いたしました日本建築協会賞の第4回をこのたび実施いたしました。（作品は表彰対象から外す）

各界に広く応募を呼びかけましたところ、締切日（平成8年11月29日）までに、12件の応募がありました。

これが選考については、第4回日本建築協会賞選考委員会（委員長：薬袋公明、同委員10名）で、慎重に審議いたしました。結果、日本建築協会賞4件、日本建築協会賞特別賞1件を選定し、それぞれに賞状並びに賞碑、副賞を贈呈いたしました。

尚、表彰式は、平成9年3月28日、日本建築協会創立80周年記念式典（於太閤園）にて挙行いたしました。

日本建築協会賞

織物文化への貢献

株式会社　川島織物　代表取締役社長　南　莊郎

●

免震建物と免震効果の実証

株式会社　松村組　代表取締役会長　松村雄吾

●

工高教育におけるCADの有効利用とその普及に関する研究

秋田県立大曲工業高等学校建築科　教諭　黒沢一元

●

膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及

太陽工業株式会社　代表取締役副会長　能村博正

日本建築協会賞特別賞

実験集合住宅 NEXT21

大阪ガス株式会社　取締役社長　領木新一郎

織物文化への貢献

株式会社　川島織物　代表取締役社長　　南　荘一郎

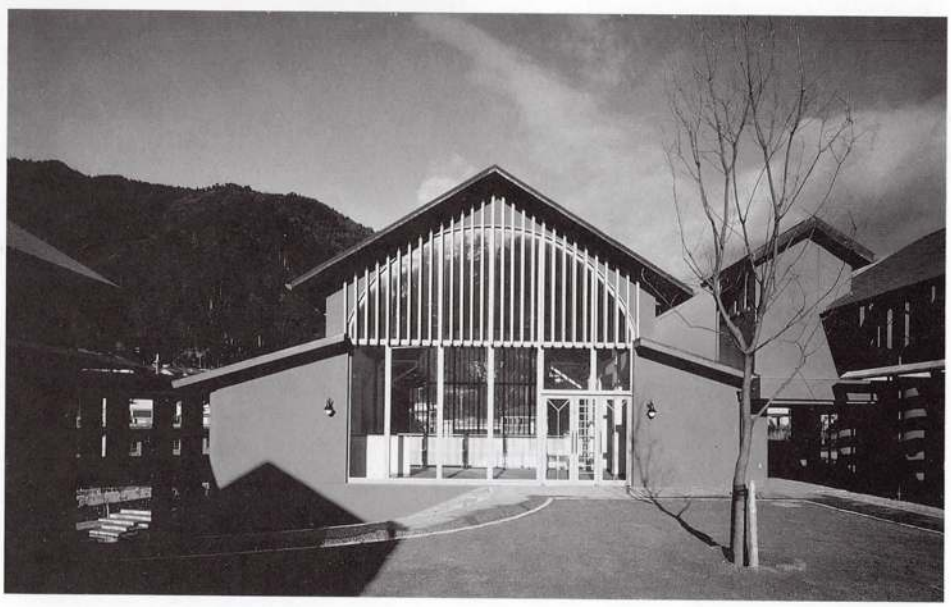




川島テキスタイルスクール



カワシママイスタースクール



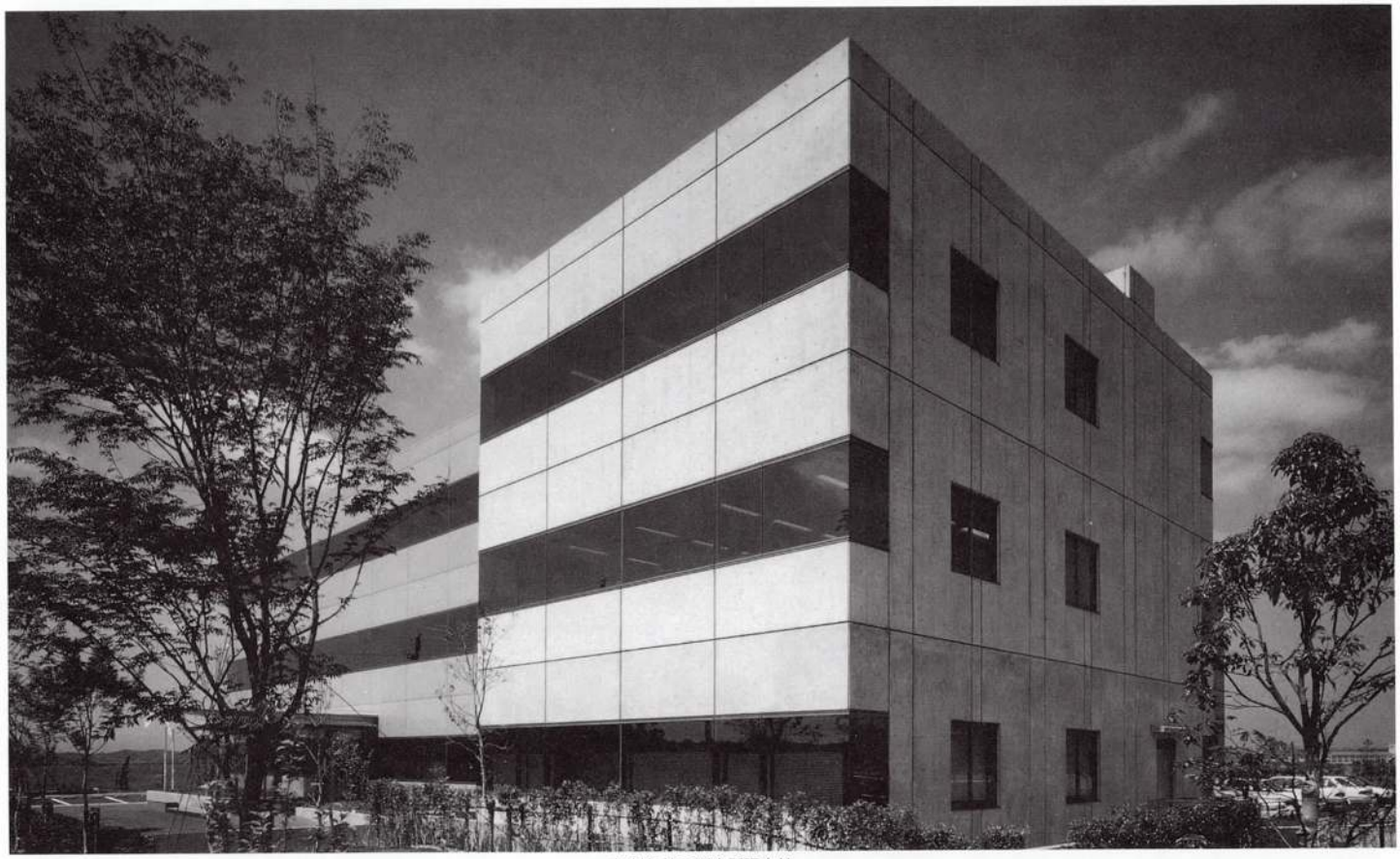
伝統技術を駆使した芸術性の高い手織織物を基礎に、つねに最新の先端技術を取り入れ、高レベルの品質・機能・感性を兼ね備えた独自のオリジナリティを持った織物を創造して、生活・文化の向上に貢献することを基本理念としている。

その理念に基づき、生活環境を構成する重要な因子である織物を通じて、文化の昂揚を目的として「川島テキスタイルスクール」を昭和48年（1973年）に開校。開校以来インテリアファブリックスやファイバー・アート分野で活躍する技術者を数多く輩出している。

また、建物内の内装や壁装を中心にインテリアの高度な施工技術を身につけた有能な技術者の養成を目的とした「カワシママイスタースクール」を昭和63年（1988年）に開校し、インテリアの確かな技術を習得した技術者を世に送り出し続けている。一方、昭和58年（1983年）には2千年前のエジプト裂から現代に至る貴重なコレクション約8万点を展示する施設である「織物文化館」を開設し、多くの人に公開している。

免震建物と免震効果の実証

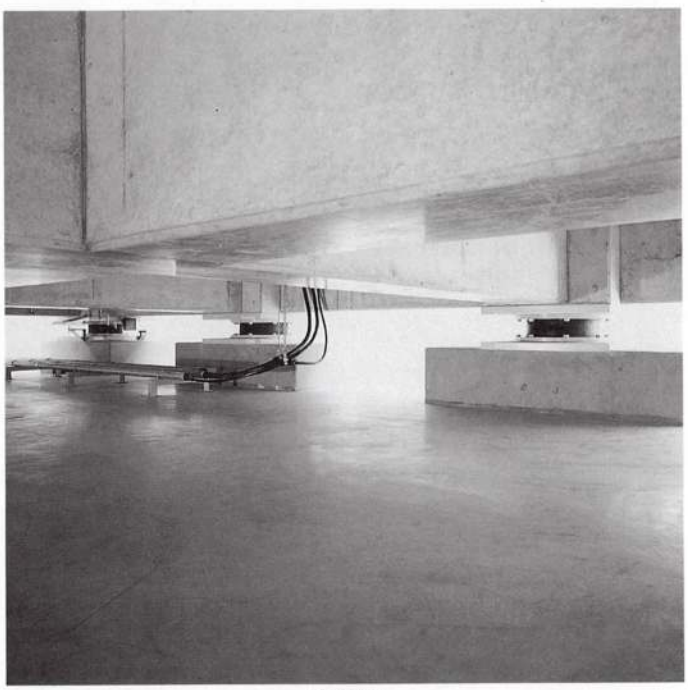
株式会社　松村組　代表取締役会長　松 村 雄 吾



松村組技術研究所研究棟

同社・技術研究所研究棟は、首都圏を中心に年間数棟程度建設されるようになっていた免震建物を関西地方にも普及させるべく計画し、完成した関西地方初の免震建物である。同建物においては、その免震効果を検証するために当初から地震観測システムが導入されており、先の兵庫県南部地震時に貴重な観測結果が得られた。建物基礎上での加速度に対して、免震建物内での加速度は大きく減少しており、さらに、非免震建物である隣棟の最大加速度の数分の一に留まったことが確認された。免震効果がデータとして確認されたことから、震災後、免震建物への関心が急速に高まり、関西地方はもとより広く全国的に建設されるようになるとともに、建設数においても急激な増加を示している。同社は、得られた地震観測結果とその解析から免震建物の有用性を具体的に立証し、その公共性を第一義として直ちにそれを広く社会に公開した。

このことにより「免震構造」が建築構造の分野において、構造システムの一つの選択肢として広く認知されるようになったのであり、その功績は高く評価されるべきものがある。

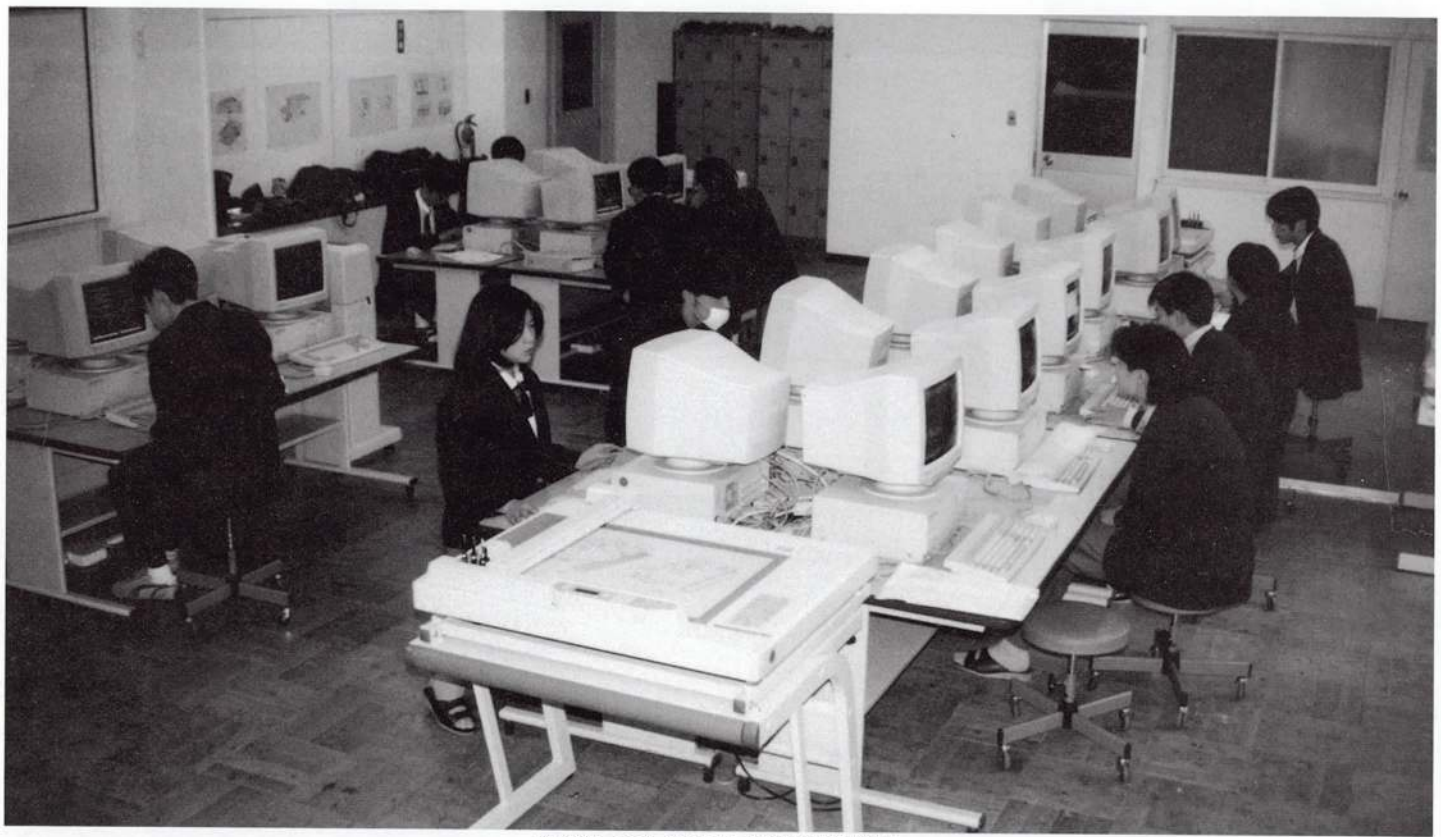


免震装置

日本建築協会賞

工高教育における CADの有効利用とその普及に関する研究

秋田県立大曲工業高等学校建築科　教諭　黒沢一元



新CADシステムを活用した課題研究の授業風景

建設業界におけるパソコンCADの普及が急速に進んでおり、秋田県内でも同様の傾向が見られる。このような社会情勢を踏まえ、本研究者は、昭和63年度から7年間にわたり、工高教育においてパソコンCADの普及に関する実践的研究を行い、次の成果をあげた。

1. 全国で極めて普及率の高い福井コンピュータ株式会社 Archi-TREND-11を搭載した建築専用CADシステムを、秋田県内で初めて導入した。

2. 2学年では、CADの基礎や各種構造の建築物のCAD基礎作図法を修得させた。3学年の課題研究CAD研究コースでは、CADの応用技術を修得させた。特別活動では、コンクールにCAD設計図を応募させ、学内外から高い評価を受けるとともに、実演発表を行うなどの成果をあげた。以上のように、在学中にCAD技術を修得させ、その活用能力を高めさせることにより、社会に貢献できるエンジニアを育成してきた。加えて、市民開放講座でも、多くの市民に体験してもらい研修を深め、普及に努めてきた。

3. 本研究の成果が高く評価され、社団法人全国工業高等学校長協会賞、財団法人山下太郎地域文化奨励賞、秋田大学教育学部旭水会教育研究助成論文優秀賞他を受賞した。



秋田県職業教育フェアで実演発表している美術部員

日本建築協会賞

膜構造建築物の技術開発とその実用化ならびに普及

太陽工業株式会社　代表取締役副会長　能村博正



東京ドーム　設計：日建設計・竹中工務店／施工：竹中工務店／膜製作：太陽工業

同社は大型テントの技術開発を行い、膜材料に適した曲面形態の研究など近代建築工学に裏付けられた大型膜構造建築物への基礎を築くとともに、各種の研究開発を行い、独自のノウハウを蓄積した。また㈳日本膜構造協会の設立に尽力し、各種基準の法整備を押し進め、実現。これらの技術開発と設計基準整備により、大規模な恒久膜構造建築物の建設を可能にした。

昭和63年「東京ドーム」の完成により、同社がこれまで築き上げてきた世界最高水準の設計・製作・施工の技術が実証され、日本に新しい大空間時代が誕生したのである。

東京ドーム完成以降、膜構造は恒久建築物として数多くの施設に採用され、今や膜構造技術と施工実績はわが国が世界一となっており、同社のわが国における大空間膜構造建築物の実現と技術水準の向上および普及に寄与した功績は大きい。なお現在も、膜構造技術の研究開発活動や国際交流への助成活動等を広く行い、人材の育成に貢献している。



デンバー国際空港　Architect/C. W. Fentress J. H. Bradburn Associates, P. C.
Engineer/Severud Associates Consulting Engineers, P. C.

日本建築協会賞特別賞

実験集合住宅 NEXT21

大阪ガス株式会社　取締役社長　領 木 新 一 郎



実験集合住宅 NEXT21

NEXT21は、21世紀の都市型集合住宅のあり方を考えるためのひとつの手段として計画・建設された実験集合住宅である。ソフト・ハード両面からの様々な開発技術や提案を実施・公開し、それを広い分野の方に議論していただくのを期待するものである。

NEXT21は、大阪市天王寺区に93年10月に建設された。翌年４月から16家族による居住実験を開始し、現在継続中である。テーマは、環境保全・省エネルギーとゆとりある生活のバランスである。二段階供給方式により建設され、居住者のライフスタイル・ライフステージの変化への対応を可能にしている。また、都市における生態系の復元を目指し、建物全体で1000m²の緑化を行うとともに、生ゴミや生活廃水を住棟内で処理し、中水として再利用するアクアループシステムにより、環境負荷の低減の検証も行っている。住棟エネルギーシステムには、環境性に優れ、高効率の燃料電池コ・ジェネシステムを導入、約３割の消費エネルギー削減を図った。

今後も様々なデータを取得・情報発信していきたいと考えている。



西澤文隆「実測図」展ー建築と庭ーと実測図集刊行

日本全域にわたって建築と庭の実測調査を行っていた建築家・西澤文隆氏は、鉛筆で建築と庭の細かなテクスチャーを表現した膨大な図面を残し、志なかばにして1986年4月16日に亡くなった。

氏の没後10年の昨年、実測関係の資料すべては氏の母校・東京大学建築学科に寄贈させる話がまとまったが、寄贈後は公開されることも難しくなるこれらの実測図を、寄贈を前に5月から公開することとなった。

■巡回展スケジュール

●**伊丹展**／1997年 **5** 月**10**日(土)～ **6** 月 **1** 日(日)
10：00～18：00
(1)伊丹市立工芸センター（月曜休館）
兵庫県伊丹市宮の前2-5-28　TEL0727-72-5557
ＪＲ伊丹駅から徒歩西6分or阪急伊丹駅から北東9分
(2)白雪ブルワリービレッジ長寿蔵ミュージアム
（5月14日と月曜休館）
兵庫県伊丹市中央3-4-15　TEL0727-73-1111
ＪＲ伊丹駅から徒歩西5分or阪急伊丹駅から北東8分

●**北九州展**／1997年6月22日まで　9：30～17：30
(1)北九州市立美術館建築コーナー（月曜休館）
5 月**13**日(火)～ **6** 月**22**日(日)
(2)北九州市立美術館 ANEX（月曜休館）
6 月**17**日(火)～ **6** 月**22**日(日)
北九州市戸畑区西鞘ケ谷21-1　TEL093-882-7777

●**京都展**／ **7** 月 **7** 日(月)～ **7** 月**18**日(金) 10:00～16:00
京都工芸繊維大学美術工芸資料館（土、日、祝日休館）
京都市左京区松ケ崎　TEL075-724-7924

●**徳島展**／ **8** 月 **1** 日(金)～ **8** 月**24**日(日) 9：30～17:00
徳島県立21世紀館多目的活動室（月曜休館）
徳島市八万町向寺山　TEL0886-68-1111

●**金沢展**／ **9** 月 **8** 日(月)～ **9** 月**20**日(土) 9：00～17:00
金沢工業大学ライブラリーセンター（9月14、15日休館）
石川県石川郡野々市町扇が丘7-1　TEL0762-48-1100

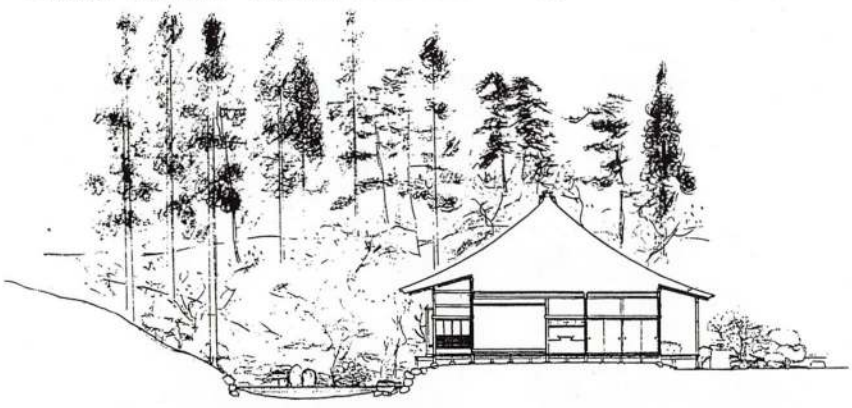
●**仙台展**／**10**月**7**日(月)～**10**月**24**日(金) 10:00～16:30
東北工業大学 T. I. T.ギャラリー（10月10～12日休館）
仙台市太白区八木山香住町35-1　TEL022-229-1151

●**東京展**／1998年 **1** 月**12**日(月)～ **1** 月**24**日(土)
11：00～19：00
ギャラリー間（日・祝日休館）　TEL03-3402-1010
東京都港区南青山1-24-3TOTO 乃木坂ビル3F

■素材と展示方法
・西澤文隆氏監修・作成の実測図（鉛筆画）約80枚
―厳島神社、大宮・仙洞御所・京都御所、桂離宮、鹿苑寺、西芳寺、二条城、彦根城、六義園、竜安寺ほか
・西澤文隆氏撮影の写真と文章
・各対象の説明文と全貌のわかる写真

■単行本／建築と庭―西澤文隆「実測図」集の発行
本展覧会の図録を兼ねて実測図集が伊丹展に間に合うようこの5月10日に刊行される予定。定価3990円。
・体裁　A4判横綴じ・箱入り・並製本、128頁
・編集　西澤文隆「実測図」集刊行編集委員会
　建築思潮研究所
・発行　建築資料研究社

詳細問い合わせは、西澤文隆「実測図」展実行委員会事務局（〒664 伊丹市行基町3-21-2-101アトリエサワ内、TEL0727-72-8993）へ。



西澤文隆氏の園城寺光浄院実測断面図

開発許可事務等が守口市へ

4月1日から、大阪府は守口市の市街化区域の開発許可事務等の一部を守口市に委任することとなった。

委任事務　都市計画法第29条による開発許可およびこれに関連する手続き
申請窓口　守口市（すでに大阪府で事前協議を行ったもの、開発許可を受けたものの完了検査等の一切の手続きの窓口も守口市）

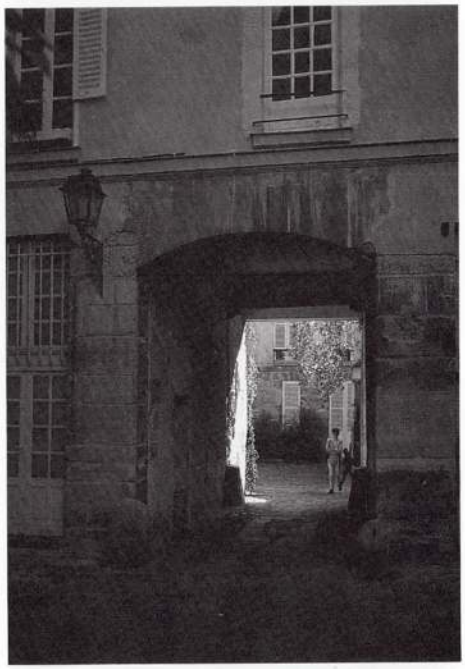
「SPACE MODULATOR」ホームページ

1960年に日本板硝子㈱が創刊した建築誌「SPACE MODULATOR」は、建築及びガラスの分野に関して、新鮮な視点で追求、表現する特集形式をとっており、最近では日本の博物館・美術館を取り上げている。

このホームページが開設された。バックナンバーや閲覧の案内、博物館・美術館の情報で構成されている。

アドレスは http：// www.nsg.co.jp/spm/index.html

村井修「パリ・都市の詩学」展



写真家・村井修氏はパリに取材して、パリの大通りから路地へ、パッサージュを抜けて広場へ、あるいは庭園を散策し、セーヌの橋、サン・マルタンの水辺に休み、墓地をめぐり、静かなパリの魅力を探し求めた。昨年デザイン・美術評論家・海野弘氏の文章と組み合わせて出版された「パリ・都市の詩学」（河出書房新社刊）の写真をベースとして、今年新たに取材した冬のパリの表情を見つめたカラー写真約100点を展示する村井修写真展が開催される。

会期　1997年 **5** 月**16**日(金)～ **5** 月**30**日(金)
　10：00～19：00　日曜日休館
会場　グランパークホール　TEL03-5441-2154
　東京都港区芝浦3-4-1
　グランパークプラザビル4F

建築系3校の卒業設計作品展

中央実務専門学校（大阪府豊中市）、修成建設専門学校（大阪市西淀川区）、大阪工業技術専門学校（大阪市北区）は、昨年に引き続き、第2回建築専門学校卒業設計作品展を開催する。これは、平成8年度卒業生の作品―模型、計算書を含めて一が、3校合同で展示されるというユニークなもの。

会期　1997年 **5** 月**12**日(月)～ **5** 月**18**日(日)
　初日／13：00～18：00
　最終日／10：00～15：00
　5月13日～17日／10：00～18：00
会場　梅田東生涯学習ルーム（大阪市北区茶屋町）

問い合わせは、中央実務専門学校内展示実行委員会（TEL06-866-0800）へ。

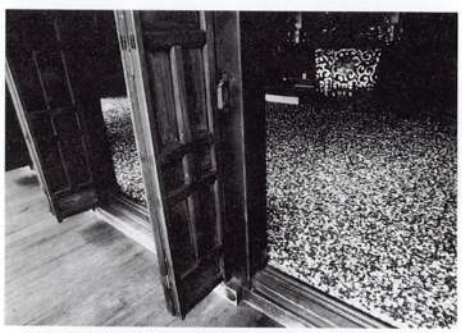
個展「上京の町家ー吉原邸」

京都生まれのテキスタイルデザイナー・高見晴恵氏が、築後120年以上たつ上京の町家を舞台に、手で1.5cmに切った赤・黄・白・紫・緑の五色の綿布を床にまいて、日頃見過ごしている光を浮かび上がらせ、想像力を生み出す場をつくりだす。

日時　1997年5月18日(日)～6月1日(日)
13：00～18：00　火曜日休み

場所　吉原和恵邸　TEL & FAX075-451-1461
京都市上京区霞屋町通上長者町上る
最寄り駅：京都市バス堀川中立売下車、西へ一筋目南へ100mほど、東側

問い合わせは、アートスペース虹(TEL＆FAX075-761-9238)へ。



高見晴恵氏の京都・安養寺における個展　1994年

欧州住宅事情視察研修

㈶大阪住宅センターは創立20周年を機会に、10日間の旅程で欧州住宅事情視察研修を企画し、広く参加者を募っている。

日程　1997年7月3日(水)～7月12日(土)

行先　ウイーン→ザルツブルグ→ミュンヘン→パリ
7/4 ウイーン市森林局訪問後、市内建築見学
7/6 ミュンヘン市内見学後、住宅局で研修
7/8 パリ市内ラ・デファンス新都心ほかの見学
7/9 パリ郊外のモンティニー・ル・ブルトンヌー市見学後、住宅展示場OMEXPO NORD訪問
7/10フランスのリフォーム工事業者訪問

旅費　一人￥498,000
(参加者15名以上の場合)

募集人員　20名（満員になり次第締め切り）

申込　5月末日までに、参加申込書を日本通運㈱大阪旅行支店(FAX06-458-7716)へ。申込金5万円はさくら銀行梅田支店＜口座名：日本通運㈱大阪旅行支店、当座№4224478＞へ。

詳しくは、㈶大阪住宅センター（TEL06-253-0071）へ。なお、利用航空会社はエールフランス、ルフトハンザ、日本航空の予定。

建築Next Phase研究会

ポストモダンの時代が終わり、現在は「プログラム、アクティビティ、サステナブル、デジタル」といったテーマが関心を集めている。このような「持続する方法論」の構築――建築家として社会の状況をどう読み、どんなテーマを持ち、それを実作にいかに反映させていくのか、しかも変化に柔軟に対応していけるようなものであること――への取り組み方を、建築家の林昌二氏が解説する。

テーマ　「持続する方法論」の構築―建築家にとっての究極のテーマを考える―

日時　1997年5月9日(金)　18：30～20：30

会場　東京デザインセンター　TEL03-3445-1121
東京都品川区東五反田5-25-19

講演者　林　昌二氏（建築家、日建設計）

参加費　2000円（学生1500円）

申込　必要事項を記入し、FAXで東京デザインセンター（FAX03-3445-1125）へ。

「キヤノンIXY」開発物語

大阪デザイン振興プラザ（ODP）デザインセミナーの今年のテーマは「ヒットデザインはいかにして創られるか」。話題を集めたヒットデザインの仕掛け人を講師に迎え、商品の企画から誕生までの開発ストーリーを聞いている。

第4回は、1996年度グッドデザイン金賞を受賞したキヤノンIXYの開発を手がけた塩谷康氏に、そのIXYの発売までのストーリーを聞く。

テーマ　キヤノンIXY
＜精密機能を表現するデザイン＞

講師　塩谷康氏（キヤノン・総合デザインセンター）

日時　1997年5月16日(金)　15：00～16：30

会場　アジア太平洋トレードセンターITM棟10F
大阪デザイン振興プラザ内セミナールーム

定員　100名（先着順）

参加費　1500円（当日支払い）

申込先　5月13日までにATCのODP（TEL06-615-5510、FAX06-615-5173）へ。

マルチメディアの展示会

㈳日本能率協会主催でマルチメディア展示会を開く。

会期　1997年6月18日(水)～20日(金)　10:00～17:00

会場　マイドームおおさか（大阪市中央区本町橋）

■ Computer Graphics Osaka97

コンピュータ・グラフィックス、画像処理、デジタル映像技術に関する催しで、13回目の今回は、デジタル映像の特集を組む。

■ Network Kansai97

モバイルコンピュータとイントラネットを統合した意味の「モバイル・イントラネット」をテーマに展開。

'97大阪ガス環境シンポジウム

持続可能な世界を実現していくためには、人間活動と環境の関係をよく理解し、環境への負荷の少ない社会の構築を急がなければならない。異質なものとの「共生」のチエが求められている。「希望の未来」のために何をなすべきか、パネリストと参加者が共に考えるシンポジウムが開催される。主催は大阪ガス。

テーマ　「持続的発展と豊かな生活について考える」
―環境問題とライフスタイル―

日時　1997年6月10日(火)　13：30～17：00

会場　ガスビル3Fホール
大阪市中央区平野町4-1-2

講演　Amory B, Lovins氏
（ロッキーマウンテン研究所代表）

討論会　●パネリスト
柴谷篤弘氏（京都精華大学元学長・生物学者）
加藤晃規氏（大阪大学助教授・建築家）
倉阪智子氏（環境監査研究会・公認会計士）
●コーディネーター
山藤　泰氏（大阪ガスエネルギー・文化研究所所長）

参加費　無料

定員　300名（予約制・先着順）

申込先　大阪ガスインテリアデザインスクール
（TEL06-262-3214　FAX06-262-7202）

スペースデザインゼミ開講

現代の都市と住空間を、5人の特色ある建築家がそれぞれの立場から見つめ直し、これからの都市住宅を考える。

講義内容と講師
(1)6月25日「住居論」／東　孝光氏
(2)7月2日「コーポラティブハウス」／安原　秀氏
(3)7月16日「住まいと環境」／石井　修氏
(4)7月23日「未来型住宅研究」／森山佳嗣氏
(5)7月30日「集合住宅研究」／遠藤剛生氏

時間　全5回　毎週水曜日　18：30～20：50

定員　20名（先着順）

会場　大阪ガスインテリアデザインスクール教室
大阪市中央区備後町3-6-14
備後町オークビル6F

受講料　35,000円（税込み）

申込先　大阪ガスインテリアデザインスクール事務局
（TEL06-262-4089）

日本建築協会

月間の動き

【平成9年2月分】

総会

第2回通常総会
26日・5時5分～5時40分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか25名
議　事　(1)第1号議案監事選挙の件
(2)第2号議案本部所属評議員選挙の件
(3)第3号議案監事および評議員重任の件
(4)第4号議案名誉正会員推挙の件
(5)第5号議案平成9年度事業計画（案）承認の件
(6)第6号議案平成9年度収支予算（案）承認の件

理事会

第6回定例理事会
26日・4時～4時50分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか27名
議　事　(1)平成9年度事業計画（案）承認の件
(2)平成9年度収支予算（案）承認の件
(3)第2回通常総会提出議案の件
(4)第4回日本建築協会賞の承認の件
(5)入退会者承認の件
(6)後援・協賛名義使用承認の件
(7)報告事項その他
第4回会勢理事会
26日・3時～4時
出席者　岡本、銭高（代塩脇）副会長ほか3名
議　事　(1)会勢の現状について
(2)会勢増強目標について

編集委員会

第11回会員企画小委員会
4日・6時半～8時45分・於本会会議室
出席者　稲木副委員長ほか5名
議　事　(1)「建築と社会」（シリーズもの）の報告と掲載予定
(2)新しい企画案について
第10回構造分科会
5日・6時～7時・於本会会議室
出席者　長瀬幹事ほか5名
議　事　(1)「構造の頁」の企画
(2)新年度分科会委員交代の件
第10回施工材料分科会
6日・4時～6時・於本会会議室
出席者　植田幹事ほか2名
議　事　(1)5月号「木造建築物の伝統技術とその将来」特集
(2)「施工材料の頁」
第8回法令分科会
12日・2時～4時45分・於本会会議室
出席者　城戸幹事ほか2名
議　事　(1)「法令コーナー」の企画
(2)6月号「住む空間の復興」特集の企画
第10回広告企画小委員会
13日・5時～6時・於本会会議室
出席者　河原副委員長ほか6名
議　事　(1)3月号「東海支部―風土・文化とまちなみ・建築―金沢・能登」特集広告途中経過報告
(2)4月号創立80周年記念「80人の眼―建築と私と社会」特集広告途中経過報告
(3)5月号「木造建築物の伝統技術とその将来」特集広告途中経過報告
(4)6月号「住む空間の復興」特集・「住宅・都市整備公団」特集広告途中経過報告
(5)収支状況報告
第11回編集委員会
13日・6時～8時半・於本会会議室
出席者　河原副委員長ほか3名
議　事　(1)3月号「東海―風土・文化とまちなみ・建築―金沢・能登」特集経過報告
(2)4月号創立80周年記念「80人の眼―建築と私と社会」特集案検討
(3)5月号「木造建築物の伝統技術とその将来」特集経過報告
(4)6月号「住む空間の復興」特集・「住宅・都市整備公団関西支社」特集企画検討
(5)7月号インテリア・住宅系分科会特集内容検討
(6)平成9年の会誌体裁の改訂について
(7)収支状況報告
第8回計画―インテリア・住宅系―分科会
17日・7時～10時・於本会会議室
出席者・角方幹事ほか3名
議　事　7月号インテリア・住宅特集企画
第10回設備分科会
18日・6時～9時15分・於本会会議室
出席者　西岡幹事ほか4名
議　事　(1)委員の交代
(2)「設備の頁」の企画
(3)8月号設備特集の企画
第5回計画―建築系―分科会
24日・7時～8時40分・於本会会議室
出席者　江副幹事ほか9名
議　事　9月号特集内容案の検討
第11回作品作風小委員会
27日・6時半～8時・於本会会議室
出席者　富田副委員長ほか6名
議　事　(1)前回編集委員会の報告
(2)作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(3)作品の選定
(4)「gallery」掲載報告・予定
(5)「SKETCH BOOK欄」の掲載予定

事業委員会

第1回近代建築見学分科会
6日・6時～7時40分・於本会会議室
出席者・福島副委員長ほか3名
議　事　本年春の企画について
第10回若い会員の集い小委員会
18日・7時～8時50分・於本会会議室
出席者　芦田委員ほか4名
議　事　(1)実施報告
(2)今後の予定について

出版委員会

第3回出版委員会編集会議
7日・6時～8時半・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか3人
議　事　最終校正原稿の確認・その他
第10回出版委員会
20日・5時半～6時15分・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか9名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(2)今後のテーマと執筆者選定
(3)創立80周年記念出版の経過報告

第4回日本建築協会賞

日本建築協会賞第2回選考委員会
10日・3時～4時半・於本会会議室
出席者　薬袋委員長ほか8名
議　事　第4回日本建築協会賞の選考

建築家に何ができるか

第3回「阪神大震災後のランドスケープからの提言」
林まゆみ／造園家・神戸芸術工科大学講師
28日・6時半～8時40分・参加者33名

建築クラブ

第298回朝食会
12日・8時半～10時・於大阪グランドホテル
演題　「デンマークと椅子」
講師　島崎　信氏（武蔵野美術大学教授）
参加者　55名
第5回建築クラブ役員会
12日・9時40分～10時40分・於大阪グランドホテル
出席者　佐野代表ほか6名
議　事　(1)平成9年度役員改選
(2)第300回記念事業計画（案）
(3)平成8年度決算見込み、平成9年度予算（案）

入会者（敬称略）

〔団体会員1社〕
吉村建設㈱
〔個人会員4名〕
岩住　欣一（岩住アルミサッシ）　木村　理（神戸市役所）　向井　理江（ヨシモク）
横田　隆司（大阪大学）

■お詫びと訂正
本誌平成9年4月号創立80周年記念「建築と私と社会―80人の眼―」特集中、46頁の狩野忠正氏「鏡+卵」の文中8行目に文字の欠落がありました。欠落した部分を訂正し、ご迷惑をおかけした執筆者、読者のみなさまにお詫びいたします。

＊

「近代建築の理解は、卵という空間概念―床・壁・天井をなくしてしまったもの―を見ているようなものである。**しかも、鏡に映された**卵を見ているといった方が正当である。また、人間の目というレンズを通してみているので、さらに複雑となる。本当の姿は定かではない。」

■お詫び
本誌平成9年4月号作品作風欄「アーバンエース肥後橋ビル」86頁の写真が印刷上の問題で、関係各位にご迷惑をおかけいたしましたことを謹んでお詫びいたします。

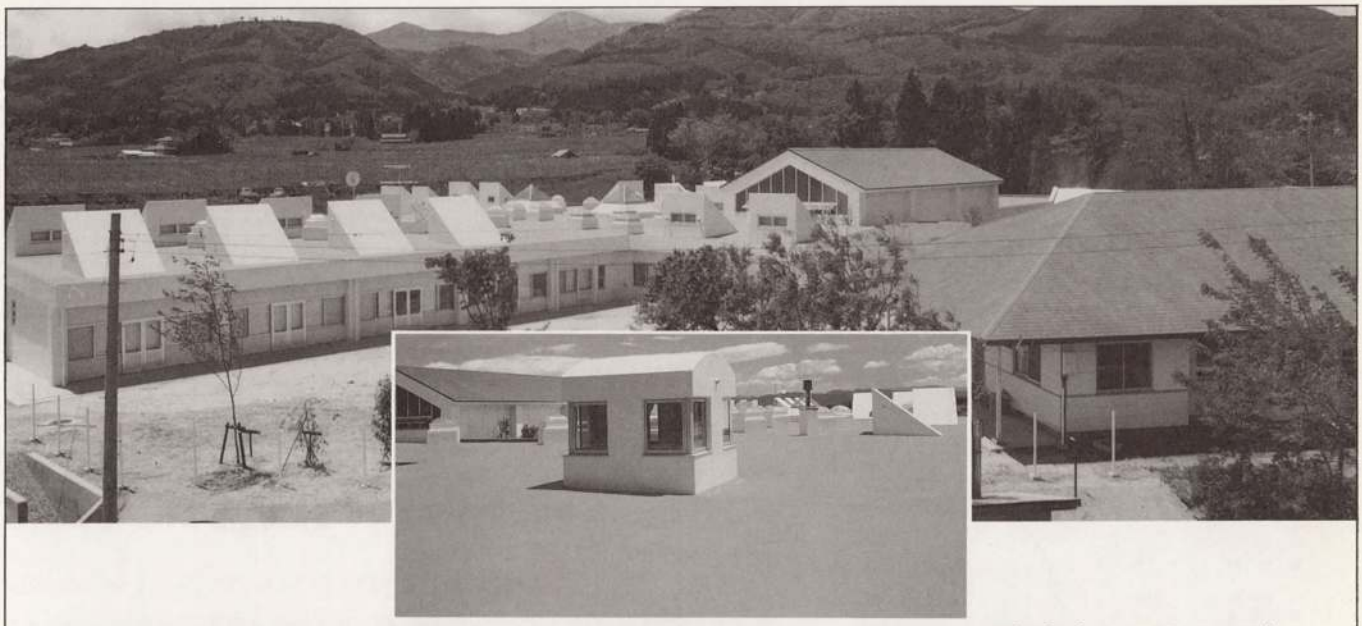
「建築と社会」誌
特集一覧● 1977～1997

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。昭和42年からは体裁をA4変形判に変え、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時々の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-348-0635, FAX 06-348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。なお、「建築と社会」創刊号～昭和30年12月号まで全87巻の復刻版が、1991年10月から順次発行（不二出版）・配本されているので、詳細は日本建築協会事務局へお問い合わせ願いたい。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1977 Vol. 58	●デザインの動向―部分と全体＊	●兵庫県―その風土と建築・建築界	●日本建築協会60周年記念号 ●ニュータウンの管理	●コンクリートの品質管理と行政指導の方向	●日影規制と法＊	●身障者施設＊	●照明設備＊	●埋立地における構造問題―大阪南港と芦屋浜を例として	●日本住宅公団と建築作品	●ミニ乱開発から計画的ミニ開発へ＊	●建築における省エネルギー化	●第24回青年技術者＊
1978 Vol. 59	●デザインの動向―新旧のコントラスト	●水＊	●医療施設―病院建築と情報システム	●外壁塗装材料＊	●電波障害と建築＊	●組合方式による集合住宅計画	●住宅設備	●新しい耐震設計	●CAD―設計とコンピュータ	●一般号＊	●第25回青年技術者＊	●ビル環境
1979 Vol. 60	●転換期の再開発＊	●大阪南港ポートタウン	●商業空間	●コンクリートのひびわれ	●日影規制＊	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌＊	●建物の終局強度の検討＊	●庄内のまちづくり＊	●80年代のインテリア＊	●第26回青年技術者＊	●建設業の労務事情＊
1980 Vol. 61	●80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望＊	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物＊	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集＊	●住宅の耐久性＊	●建築行政と法規＊	●最近の防水工法＊	●都市景観とアメニティ＊	●屋内体育施設の設備＊	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材＊	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅＊	●これからの建築設計と新耐震設計法＊
1981 Vol. 62	●職能論＊	●中国の論文―北京の都市計画＊	●ポートピア'81＊	●台所まわりの計画と設備＊	●シーリング材の知識＊	●災害と法―安全な環境をめざして＊	●都市住宅―住まい手からの発想＊	●建築物と風―デザイナーのために ●日建設計作品集＊	●住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割＊	●間仕切壁の性能評価＊	●第28回青年技術者＊	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 Vol. 63	●新たな商業空間の展開＊	●省エネルギーと開口部＊	●医療施設―地域医療と設備計画＊	●近畿の地盤と地質＊	●都市景観―まちなみ美観への誘い＊	●大阪市庁舎（第一期）＊	●ホール建築と音＊	●大スパン構造＊	●昭和設計作品集＊	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築＊	●風土・空気と人間＊
1983 Vol. 64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設＊	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール＊	●集合住宅と生活音
1984 Vol. 65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル	●ビルのリフレッシュ―内外装補修技術の現状と発展―	●建設産業とロボット開発	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル＊	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 Vol. 66	●大阪湾物語＊	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 Vol. 67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住居と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 Vol. 68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚の街づくり	●建物と街並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 Vol. 69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明	●制振	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営繕	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 Vol. 70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 Vol. 71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 Vol. 72	●新しい都市空間づくり―Ⅰ―	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり―Ⅱ― ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんてん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 Vol. 73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の街並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているのか	●京のかたちと色
1993 Vol. 74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 Vol. 75	●コピー文化の新時代 ●広島の街造りとアジア競技大会	●九州のインスタレーションと我	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品	●いま、医療施設は	●住空間における居ごこちへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 Vol. 76	●光がつくる風合の世界＊	●音―騒音から操音／創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点	●建築構造と社会の接点 ●日建設計	●ライフラインと建築設備	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 Vol. 77	●阪神大震災から学ぶ	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念	●遠江―その地域振興と文化	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害!非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 Vol. 78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり	●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築	●創立80周年記念／建築と私と社会―80人の眼―	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興（予定）						

＊印は欠号



トータルメンテナンスに貢献する…アロン建材シリーズ

アクリルゴム・外壁化粧防水材
アロンウオール®・二成分反応形屋根塗膜防水材 **アロンコートSQ®**

アクリルカチオン性・無機複合弾性タイル
アロンQDタイル・アクリルゴム・塗膜防水材 **アロンQDベランダ**

東亞合成 〈建材事業部〉本社 〒105 東京都港区西新橋1-14-1
☎03(3597)7341(ダイヤルイン)

支 店/東京03(3597)7342・大阪06(203)3178・名古屋052(541)1184
営業所/仙台022(211)6121・富山0764(42)2311・広島082(228)5430・
高松0878(25)2671・福岡092(721)1902・札幌出張所011(612)4131

OM

テトカッパー防水層

カッパー防水帯——コーパータイト オクロン防水帯

資料をご請求下さい。

奥山化工業株式会社

本 社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル TEL03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264
大阪事務所 TEL06(391)1081－2 FAX 06(395)2109
名古屋出張所 TEL052(811)3660
横浜営業所 TEL045(320)4832 FAX045(320)4765
厚木出張所 TEL0462(21)1761 FAX0462(23)1341
埼玉営業所 TEL048(774)2845
茨城出張所 TEL0292(28)0878 FAX0292(28)2614

新しい時代の、新しい扉をひらきたい。

TOYO Shutter

東洋シヤッター株式会社

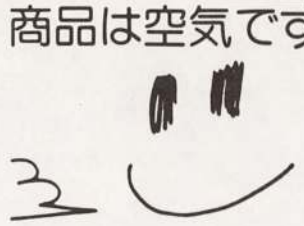
本 社 〒540 大阪市中央区南新町1－2－10(TSビル)
TEL(06)943－6571(代)
■東京/横浜/盛岡/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/大津/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話 06(302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06－466－2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9－3　電0720－49－2128

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役大阪支店長　琴浦　健

大阪支店　大阪市中央区北浜2－2－21　電話 06(202) 3071（代表）
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町1－4－1　電話 03(3502)6111（大代）
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・横浜・東関東・北関東・神戸・四国

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話（352）1131代
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

OKUJU
スペースクリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530
TEL(06)312-4131　FAX(06)312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・仙台・宮崎・京都

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話 06-949-1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話 06-363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡
営業所　札幌・茨城・大宮・千葉・山梨・静岡・福井・滋賀・和歌山・松江・長崎・沖縄
出張所　青森・秋田・盛岡・川崎・富山・岐阜・三重・鳥取・岡山・高松・下関・大分・熊本・宮崎・鹿児島

Digital Pri-Press



AOBA PRINTING CO.,LTD.,

代表取締役社長 依藤孝行

青葉印刷株式会社

〒534 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-351-5428 Fax.06-351-5299

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
郵便番号542 電話 大阪（06）768－5031 代表
メンテナンス部　電　話　大阪（06）768－1651 代表
東京支店　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
郵便番号112　電話（03）5689－2351 代表

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
K栗原工業株式会社
本社/〒530 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL 06(313)1101
創業1919

Carrier 冷暖房は CARRIER キャリア
東洋キャリア工業㈱デストビューター関西地区
日本冷熱工産株式会社
本社及大阪営業所 吹田市豊津町40番38号
電話 大阪 (384) 1201～7

電気工事設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル5階)
電話 06(361)3671(代)
支店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03(3666)1478(代)
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

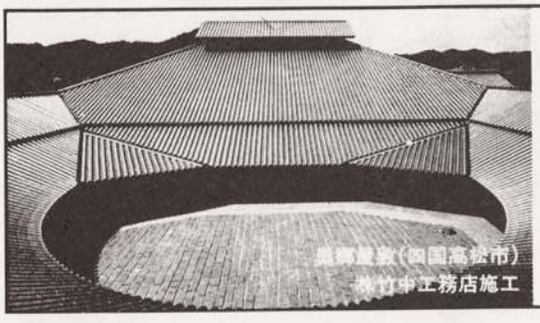
電気設備 設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本社 〒530 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル) 電話06(385)1361代
大阪営業所 〒564 吹田市垂水町3丁目34－6 電話06(385)1361代
京都営業所 〒615 京都市右京区西京極葛野町21 電話075(311)1185代
神戸営業所 〒650 神戸市中央区浪花町59(神戸朝日ビル) 電話078(333)7756代

人と都市の快適な環境をつくります
営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電
きらと輝かしあふれるクリエイティブカンパニーをめざす
住友電設株式会社 大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
常務取締役支社長 馬田栄
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話 大阪(202)0325～9番
本社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・中部・九州

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06－532－0461(代表)
FAX.06－535－5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
SANPO
三宝電機株式会社
取締役社長 嘉納秀一
本社 〒530 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL.06(364)1471・FAX.06(364)5533
東京支社 〒105 東京都区芝浦3-8-3ランディック芝浦ビル TEL.03(5472)3311・FAX.03(5472)0085
名古屋支店 〒462 名古屋市北区金城3-12-14 TEL.052(991)5131・FAX.052(914)7535
神戸支店 〒657 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL.078(842)6411・FAX.078(842)6416
堺研究所 〒590 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL.0722(27)8408・FAX.0722(27)1424



〒556 大阪市浪速区塩草二丁目二番三号
ファックス 五六一～七四五四
☎ 五六一～七四一六
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
施工中工務店施工

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547 大阪市平野区加美北3－4－5
TEL.06(792)5858 FAX.06(792)2810

新鮮
情報処理／編集・企画／印刷・製本
ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。
ND
日本電植株式会社
〒530 大阪市北区天満2丁目5番15号 TEL.06(352)7502代
FAX.2F事務所 06(355)2714 3F制作 06(357)7250

特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙 ●ホクシノン(無機質壁紙)
(株)ホクシンクロス
〒583 大阪府羽曳野市島泉８－173－１
TEL(０７２９)３９－３６１０
工場　〒580　大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-11奈良県大和郡山市小泉町２７４４
第二　〒597　大阪府貝塚市王子５０１

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
Master Builders Technologies
株式会社エヌエムビー
株式会社ポゾリス物産
本　社：東京都港区六本木３－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-202-3294

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは，日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した，二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)



デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

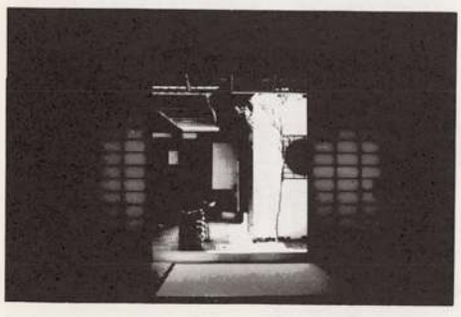
浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（０７７２７）２－２２２０
舞鶴（０７７３）７６－０１３３

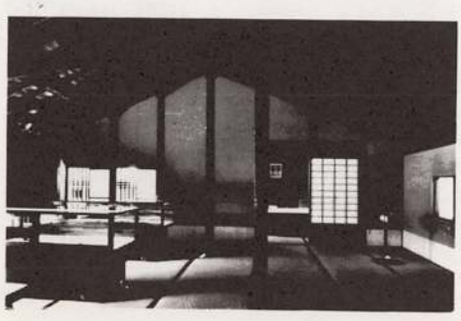
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（０６）３３２－６８６１
TEL 東京（０３）３２７２－８５０１

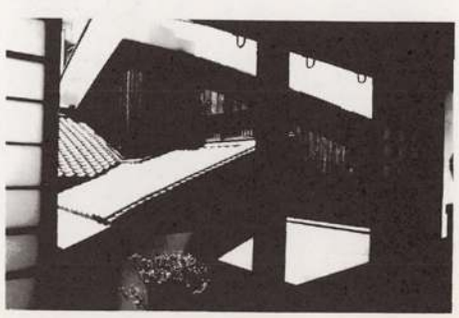
小浦産業株式会社
TEL 大阪（０６）４４３－６１８１

光洋物産株式会社
TEL 大阪（０６）２５２－６０００

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（０７７５）８３－２３８１
TEL 大阪（０６）８７７－１５８１

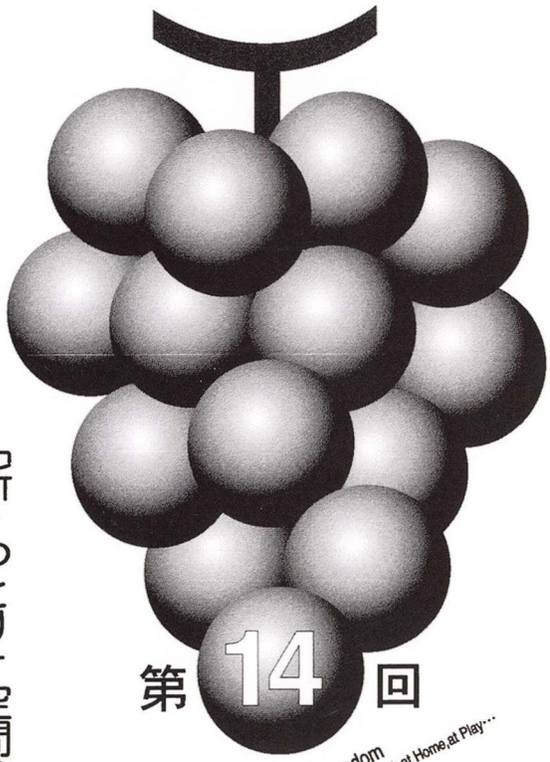






TOTAL CONSTRUCTION MATERIALS AND EQUIPMENT FAIR

'97 総合建築材料・設備展



「新・ゆとり」空間の創造——見つけよう あなたの住環境

入場無料

1997年5月28日(水) ⇨31日(土)

10AM~5PM 最終日のみ4PMまで

インテックス大阪 1号館

主催：（社）日本建築材料協会・**日本工業新聞社**

聴講無料

併催 建築トレンドセミナー

於：インテックス大阪＝国際会議ホール（350席）

5月29日（木）13：30～15：00

「高齢社会の住環境を考える」

大阪大学名誉教授　東 孝光 氏

5月30日（金）13：30～15：00

「建築と景観ーゆとりのある風景をー」

建築家　瀧 光夫 氏

於：インテックス大阪＝CD会議室（40席）

5月29日（木）13：00～13：30

「カナダ輸入建材利用の多様性」

カナダBC州政府特別顧問　リチャード・ポリクイン氏

5月29日（木）13：30～14：30

「日本におけるカナダ輸入住宅を再考する
ーライフスタイルの変化、品質、日本市場のトレンドー」

“輸入住宅” “カナダ・ジャパン ビジネス・ジャーナル”執筆者
在カナダ福島銀行代表　山本利幸氏

★会期中、
素敵な景品の当たる
抽選会を実施！

事務局

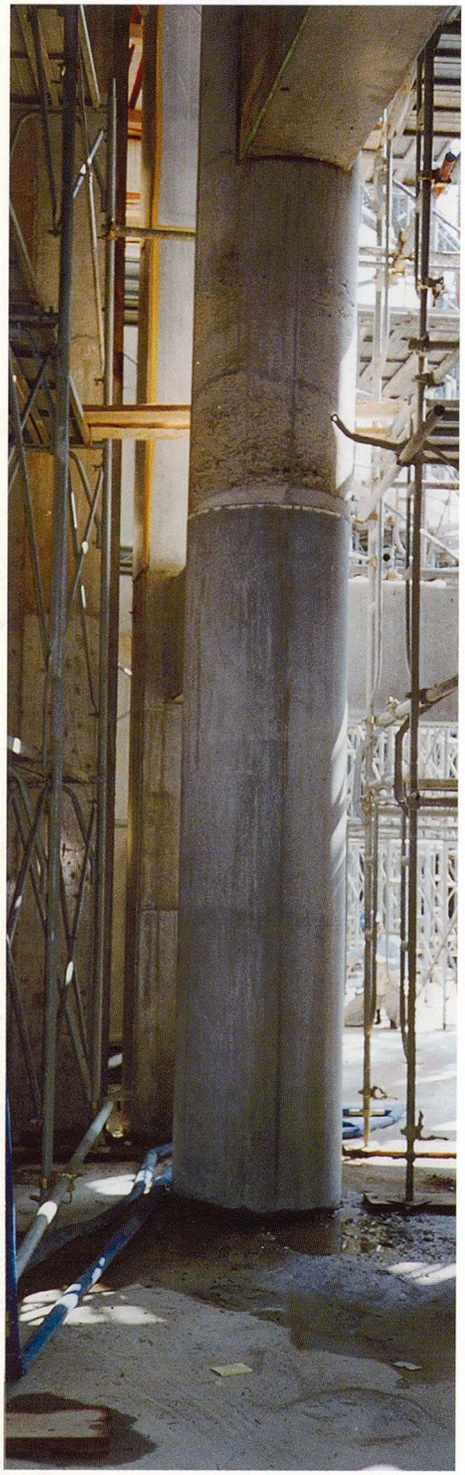
社団法人 日本建築材料協会
〒550 大阪市西区京町堀1-8-3
TEL.06-443-0345~7 FAX.06-443-0348

日本工業新聞社 事業部
〒530 大阪市北区梅田2-4-9
TEL.06-343-3222~4 FAX.06-341-4773

打放しコンクリート化粧補修

ジャンカ、コールジョイント、サビ、型枠材の木アクの心配がなくなりました。

施工前



施工後



ＫＹシステム工法

㈱建築養生 技術部が開発した工法で打放しコンクリート面の洗装工事及び補修工事をシステム化したものです。

特殊洗剤によるコンクリート表面の樹脂の剥離及びシミ抜き

在来工法との相違点

1 コンクリート面のツヤが統一された

コンクリート面のウレタン樹脂(型枠材に塗布されたウレタン樹脂が移行)の剥離により、本来のコンクリート面に統一された。

2 サビ、ベニヤアク除去によるコンクリート面の変色なし

サビ、ベニヤアクは樹脂の表面に付着していたので、樹脂の剥離と同時にコンクリート面を変色なしに洗える。

3 部分補修が可能になった

コンクリート面のツヤの統一により、ジャンカ、コールジョイント等の部分補修が可能になった。

4 フッソ樹脂塗料吹付時に起こる補修部分の変色(黒色)がなし

フッソ樹脂塗料の吹付時に起こる吸い込みの差による変色(黒色)が樹脂の剥離により均一化され、変色なく仕上げられる。

株式会社 **建築養生**

●見本出し致します
本社
京都市南区上鳥羽金仏24
TEL(075)661-6566㈹ FAX(075)671-6421

雑誌 03379-5